

論 説

ナインイレブン テロ 9.11 恐怖襲撃の様々な既視感()

夏 剛

1. 「力・欲の枢軸」の陥穽と歴史「演变」(変易)の「天網」

2001年9月11日(火曜)朝、イスラム過激派テロリスト19人が民間航空機4機を強奪し、米国の経済・軍事の中枢に対して同時多発的「神風特攻」を敢行した。紐育の世界貿易中心ビルの倒壊やワシントン国防総省ビルの炎上が、中継映像で忽ち世界に広がり地球規模の同時多発の衝撃を惹起した。日付は奇しくも米国の緊急通報用電話番号¹⁾と吻合したが、2000,01年頭に2度楽しんだ新千年紀祭の余韻が猶少し残り、他国に波及した情報技術企業株のバブル崩壊も未だ底打ちに程遠かった此の国には、其の思わぬ激震は警鐘乱打の観が強い。

米国は事前に多くの徴兆を把握したのに機敏に反応せず、不逞の徒の襲撃を座視する破目に陥った²⁾が、前年暮れの大統領選のフロリダ州手作業再集計の後進性が連想された。20世紀最大級の不意打ちを真珠湾で受けた国が再び世紀的奇襲で遣られたのは、「力の枢軸」³⁾に付き纏う地政学的危険を思わせる歴史の巡り合わせだ。世界最強の故に本土が侵攻を免れて来た事が免疫力の低下に繋がり、足元の隙間に対して鈍感な体質が出来たのも皮肉だ。滅亡体験の質的欠如と対を成した落し穴は、全的視野・仮想力の意外な不足である。

米国は世界最強の傍受体系^{システム}を持ち、同時多発の通話の洪水から鍵言葉に即した断片を瞬時に拾える。老子の「天網恢恢、疎而不漏」(天網恢恢、疎にして漏れず)を絵に描いた様に、巨細漏らさず⁴⁾網羅し得る「隠形ネットワーク」(姿無きネットワーク)⁵⁾は物凄いが、機械の発達に反比例して人的接近は疎かに成ったと言う。宋の哲学者・王陽明は反体制蜂起の鎮圧を指揮した実践に基づいて、「破山中賊易、破心中賊難」(山中の賊は破り易く、心中の賊は破り難し)と喝破したが、今次の被害で表面化した疎漏や弱点は其の逆説の通りだ。

今の世界で目に余る「心中賊」として、邪気の傲慢・偏見と無邪気な慢心・偏頗が思い当たる。悪意を持たぬ後者は自覚も罪悪感も無いだけに、歯止めが掛からず往々にして却って始末が悪い。「山中賊」に由る9.11の理不尽な暴力で紐育証券取引所は暫く閉鎖に追い込まれたが、1987,98

年の米国発の世界的金融動乱は欲望の不条理な暴走だ。前者の暴落は新人類^{ファンド・マネージャー}基金運用者時代の^{コンピュータ・プログラム}「^{コンピュータ・プログラム}電 脳 自動売買が一斉防御に走った合成の誤謬⁶⁾」で、後者の破綻はノーベル経済学賞受賞者の米国教授の参画した^{ヘッジ・ファンド}投資基金の一方的賭けの外れが起因だ。

初回の悲劇と2回目の喜劇は同工異曲で、「^{チャオジーグーグオ}超級大国」(super power)・「^{ジーチャオグーグオ}極超大国」(hiper power)⁷⁾の米の脆弱を露呈させた。壮麗な「鳥籠構造」で出来た世界貿易中心ビル^{センター}の悲愴な溶解・崩落も、設計時に強震や飛行機衝突事故を想定したものの、狂信者が飛ばす大型航空機の突貫・全面火災までは想到しなかった点^{わざわい}が禍^{わざわい}した。心の隙間を端的に物語る事象として、其の辺りに本拠を据えた某金融会社の顧客情報や取引記録の^{バックアップ}保全複製は、有事に備える危険分散の宗旨に反して、事も有ろうに至近距離の別のビルに置かれていた⁸⁾。

此の話にぴったり合う中国語の「偏偏」(事も有ろうに。^よ選りに^よ選って)は、「^{えら}選ばれし者」の^{うぬぼ}自惚れに因る一極偏重を言い得て妙だ。2003年8月13日、マイクロソフトの基本ソフトの設計上の欠陥を衝く^{ウイルス}病^{ウイルス}毒が蔓延し、世界の6桁に上る^{のぼ}電^{コンピユーター}脳を使用不能にした⁹⁾。ビル・ゲーツの金儲け主義とウィンドウズの不備を嘲笑う愉快犯の^{アメリカン・ドリーム}落書^{アメリカン・ドリーム}き¹⁰⁾は、「^{アメリカン・ドリーム}米国の夢」の成功者の裏面や情報技術の覇者のアキレス腱を覗かせた。悪戯された標的の中国語訳名の「微軟」「視窓」は、微小な衝撃にも堪え得ぬ「裸の王様」の笑劇と字面に対応する。

翌日に北米東部で起きた大停電は、忽ち農業社会へ逆戻りさせた点で好一対だ。先進7ヶ国首脳会議で3割弱の比重を占める米・加は、電力自由化の綺麗事とは裏腹に電力設備の途上国並みの老朽化を曝け出した。5千万人に迷惑を掛け両国の紛糾を招いた事故の引き金は、オハイオの電力会社が剪定を怠った枝が伸びて送電線に接触した事だ。複数の機関の監視装置が故障等で作動せず連鎖災害を許したのは、些末な外因と粗末な内因に因る誤謬の合成だ。¹¹⁾無形な^{ソフト・パワー}「柔力」に対する人間の無力は、其の悲喜劇で改めて示された。

歴史は1回目が悲劇で2回目が喜劇の形で繰り返す、と古代希臘の賢者は言った¹²⁾が、中国の陰陽原理や西洋哲学の「正 反 合」¹³⁾の様に、両者の接点と延長には更に循環が有り得る。9.11と違って残忍さや悪意を伴わぬ真夏の悪夢の次に、再び多事の秋が^や遣って来た。2003年10月27日の赤十字国際委バグダッド本部爆破を皮切りに、断食月入り後イスラム過激派が中東で連続破壊を仕掛けた。駐^{トルコ}土^コ耳^コ古^コ英^コ総領事館への自爆攻撃の翌々日の11月22日、ベルギーに本拠を置く国際大手宅配便会社の貨物機が^{ミサイル}イ^{ミサイル}ラ^{ミサイル}クで^{ミサイル}導^{ミサイル}弾^{ミサイル}を被弾した。

米国の中枢に照準を定めた同時多発襲撃の^{テロ}反^{テロ}転^{テロ}・^{テロ}拡^{テロ}散^{テロ}の如く、一連の典型例は其々国際機関、反「悪の枢軸」連盟と外国企業を狙った。占領と復興を阻止する為に全世界との対決も辞さぬ決意が噴き出たが、同じく民間機を巻き込んだ最後の1件は、「^{ソフト・ターゲット}軟目標」(ソフト・ターゲット)への無差別攻撃として目を引く。「軟」は民間と守備軟弱の両義を含む¹⁴⁾が、常識的に「非攻」(非戦)¹⁵⁾のはずの前者と物理的な「^{ハード・ターゲット}薄弱環節」(手薄な処。弱点)の^{ハード・ターゲット}後^{ハード・ターゲット}者^{ハード・ターゲット}への打撃は、米国防省の「^{ハード・ターゲット}硬目標」を含めた9.11と一緒の「非対称戦争」だ。

米大統領訪英の時機に合わせた英国在外機構への攻撃は、地理的域外と心理的圏内に跨って意地悪い。心臓を抉る様な9.11急襲に対して、指を切り付け爪を剥がす類の真似だが、指は神経末梢が集中した故に酷刑の格好な対象に成る¹⁶⁾。1995年の阪神大震災の半分に当たる3千余りの死者を出した9.11の大量破壊は、一挙に成し遂げた処でも広島・長崎の原爆投下と通じる非日常性が有るが、「常規武器」(通常兵器)に由る時間・地域・標的分散の殺傷は、一挙手一投足に恐怖を覚えさせる神経戦の恒常化で増幅・累積の効果が高い。

広島原爆に因る死者数の24万人余りは奇しくも、31年後の毛沢東死去の直前の唐山大地震と同じだ。両国の軍事独裁体制の終焉の駄目押しと成った2回の災禍に比べて、日本の「第二の敗戦」や世界の「第二の冷戦」を兆した阪神大震災と9.11事件は、犠牲者が其の数十分の1に止まり且つ同等の精神的創傷を遺した点で後冷戦時代らしい。英米聯軍のイラク攻落後に華南発の致死性新型肺炎の拡散が極みに達したが、胡錦濤が「硝煙無き戦争」と称した¹⁷⁾騒乱の人類を戦慄させる猛威は、4桁に届かぬ死者数では量り切れぬ物が有る。

西洋の先哲は人を一吹き蒸気や一滴の水でも潰される思索の葦に譬えた¹⁸⁾が、現代では情報の肥大化と人間の弱体化の進行に因り、僅かな破壊要因でも共振強震が起き易い。「葦」を靡かせる「風」¹⁹⁾の一例は、風説の流布や世論の操作も可能な「第4権力」²⁰⁾だ。「軟目標」^{ソフト・ターゲット}の鍵言葉を大寫した外国物流企業の貨物機の被弾は、ケネディ暗殺40周年の出来事だが、曾て初の日米間テレビ衛星中継で其の訃報が大洋を越えて飛び込み、脳味噌が飛び散る光景が後に世界で再生・拡大されて来た事は、電波の伝播の「柔力」^{ソフト・パワー}を思わせる。

証拠物件・書類の封印が2039年に解かれても、其の超「硬標的」^{ハード・ターゲット}を消した黒幕は判明する保証が無い²¹⁾が、取り沙汰された「邪の枢軸」²²⁾の範囲内だろう。軍産複合体やCIAに纏わる噂の真相はともかく、ケネディ大統領就任30周年の3日前に勃発した湾岸戦争では、利権と利剣、殺戮の利器と情報の利器が見事に相乗した。精密誘導装置が付いた導弾^{ミサイル}の標的撃破に到る軌跡を示す内蔵カメラ映像は、古典的遊撃戦と対照的に科学幻想風の「遊芸戦」²³⁾を見せた。20世紀の戦争観を破った其の奇観は、新世紀の劈頭で一矢を報いられた。

2機目の突入も2棟の摩天楼の炎上・倒壊も、テレビ中継で天下の視聴を集める中で起きた。「意図」の文字通り恐怖組織の意の儘の図と成ったが、煉獄の「活動写真」²⁴⁾は余りにも超日常的な故に、此は映画ではありませんと放送側が随時断った程だ²⁵⁾。衆人環視の中の白昼堂々の犯行は、「意・図」に対応した激情・劇場型と言える。此の図式・命題を絵に描いた様に、翌年10月23日(水曜)のモスクワ文化宮殿劇場に、迷彩服を纏い銃・爆薬を持つチェーン決死隊²⁶⁾が雪崩れ込む際に、一部の観客が芝居の一部と錯覚し拍手した。

米ソ「覇覇」(二大覇権)が米「独覇」(単独覇権)²⁷⁾に取って代られただけに、東西陣営の雄として角逐していた両国の中枢への襲撃は意味深長な対を成す。片方は出勤時に金融街の象徴と軍事指揮機関が狙われ、犯人の遣り放題で瞬時に結末を迎え被災側は呆気を取られた。片

方は余暇時に国の文化の「顔」が単発の打撃を食い、密室状態で58時間に亘る占拠が特殊部隊の突入で呆気無く幕を落したが、人質129人を死なせた催眠剤入りの特殊ガスの違法化学兵器容疑に因り、鮮烈な制圧で辣腕を振った当局は悪い後味を遺した²⁸⁾。

後者の方で現れた冷戦時代の遺伝子には、大統領の国家保安委員会²⁹⁾要員と在外諜報活動の経歴³⁰⁾も有る。冷戦後の最初の米大統領も中央情報局長経験者³¹⁾で、其の老ブッシュの湾岸戦争の圧勝はプーチンの躍進と共に、「情報を制す者は天下を制す」原理を立証した。1991年に米は超絶の軍事力・情報技術力で中東への快進撃を遂げ、ソは理想主義者の領袖の決断で自滅的解体をした。其の伏線の意味を現わす様に、国力が衰退気味の露^{ロシア}のチェン占領も文民政治家・小ブッシュのイラク征服も、不如意の「渋勝」^{とど}³²⁾に止まった。

湾岸戦争では米軍の戦死者は限り無く無に近かった³³⁾が、10年後の9.11の民間人多数死亡は、言わば江戸の仇が長崎で討たれた代償にも思える。イスラム過激派が満を持して放った其の驚天動地の仕業は、「十年磨一剣」(十年^{ひとふり}の^{つるぎ}と^と磨ぐ)の結果と視て能い。賈島の此の句³⁴⁾は隠忍精神の格言としても名高いが、狂人が揮った凶刃も善悪を超える強韌さを見せた。下の句は「霜刃未曾試」(霜^{しもの}刃^{ごとき}未^や曾^{はい}試^まさず)と言うが、湾岸戦争で米が顕示した未曾有の「天兵」³⁵⁾めく神業も、長年^と研^いだ^り利^じ剣^と³⁶⁾を試しに実戦に投じた物だ。

其の「試鋒芒」(矛先の鋭さを試す。腕を見せる)は「開刃」(刃を立てる)、「開刀」(斬刑にする。血祭りに上げる。手術する)を連想させる。「開刀」の比喻や類義の「開殺戒」(殺戮の戒律を破る)と言えば、同じ1989年の冷戦終結に逆行した天安門事件の武力鎮圧が思い浮かぶ。「非正常死亡」者数が8桁と推定される「文化大革命」の「紅色恐怖」(赤いテロ)³⁷⁾と共に、前代未聞の首都戒厳と戦車出動・軍隊発砲は、「禍匣」(パンドラの^{はこ}匣)の開封とも形容できるが、20世紀の世界史に於いて究極の「禍匣」の炸裂は2度だけだ。

奇しくも仇討ちに関する上記の諺の長崎と江戸が舞台と成ったが、其は他ならぬ1945年の原爆投下と恰度50年後の東京地下鉄サリン事件だ。死者10人、重軽傷5000人余りの2回目は、規模こそ前者の両地被災に遠く及ばぬものの、禁断の兵器で無辜の市民を無差別に殺傷した点が一緒だ。半世紀を隔てて大戦終盤と世紀末の人々の度肝を抜かせた両者は、「末日之門」(末日[終末]への扉³⁸⁾)の彼方を覗かせたが、20世紀の初頭を飾ったノーベル賞の登場も、炸薬の発明者が贖罪を兼ねて案出した科学・文化創造と平和維持の顕彰だ。

彼の化学者・工業家の逝去と其の名を冠す桂冠の創設(1896年)から、半世紀毎に科学者が造った「禍匣」が国家や邪教に由って開かれた事は、技術・実力万能の風潮が益々強まり、倒錯や錯乱の亢進に伴い精神的制御^{コントロール}が一層難しく成る21世紀には、不吉な暗示と愚えて成らない。9.11襲撃の直後ノーベル賞は授与百周年を迎えたが、未だに動乱の渦中に居るパレスチナ解放機構議長・アラファトの平和賞受賞(1994年)や、1969年新設の経済賞の意義に抱く関係者の疑念は、善良な願望の限界に気付かせる指摘として傾聴に値する。

2002年ノーベル平和賞をカーター元米大統領に授けた選考委員会は、米現政権のイラク政策を批判する意図を表明した。ノーベル賞の選考は主に故人の祖国・スウェーデンの王家科学院等が司り、平和賞は諾威の議会が委託するが、北欧や永世中立国の属性は米国の独善・「独覇」への対抗を成す³⁹⁾。最高の理知の結晶を表彰する其の冬の儀典の対として、最高の感性の開花を展示する米国映画アカデミー賞の春の祭典⁴⁰⁾が思い浮かぶ。俱に「学院」所縁の両者は領分の違いだけでなく、価値観に於ける米国色の濃淡でも対照的だ。

2003年3月21日の米英聯軍イラク侵攻に抗議して、2日後のアカデミー賞授賞式で批判が飛び出、更に3日後に紐育の示威行進で2人のノーベル平和賞受賞者が逮捕された⁴¹⁾が、力・欲に敵わぬ理・情の非力を印象付けた。20世紀前半の熱戦と後半の冷戦を経て、新世紀の平和・繁栄への期待が高まったが、相変わらず力・欲が歴史の枢軸を為している。カーターの懇切な斡旋に拘らず、朝鮮半島の「悪の枢軸」の矛先は弱まらず、彼の平和賞受賞決定の翌日(10月12日)、バリ島でイスラム過激派が豪^{オーストラリア}の観光客等184人を爆死した。

21世紀の基調に影を落した9.11襲撃は、奇想天外の様ながら前世紀的特質が濃い。祖型と思われる太平洋戦争末期の「神風」特攻は、中世的蛮性に於いて歴史の沈澱とも未来の狂気とも繋がる。9.11犯行集団は初めに米・日への同時攻撃を計画した⁴²⁾が、2回の世紀的「禍匣」の開封と共に日本の受難の宿命を思わせる。米国の対外攻略と日本の内憂・内乱の連鎖を象徴する様に、「沙漠の嵐」^{デザート・ストーム}作戦開始日の恰度4年後に阪神大震災が起き、同年3月20日の地下鉄サリン事件は、8年後の「高貴な鷲」^{ノーブル・イーグル}⁴³⁾作戦発動と日付が隣り合う。

春分頃の其の災厄は秋分前後の「多事之秋」に対して、多難の春の蠢動と言えようが、オウム真理教が露^{ロシア}で武器を購入し軍事訓練を受けた事で、其の猛毒ガスの撒布は巡り巡って、昨秋のモスクワ事件の特殊ガス投入と重なる。「蘇東波」(蘇聯・東欧の社会主義崩壊の衝撃波)⁴⁴⁾は、斯くして思わぬ方向へ飛び火して^{しま}了った。1998年の米国ヘッジファンド破綻危機も、露国債への無謀な投資が失敗の元だった。敵の「和平演变」(平和的変質)⁴⁵⁾を導いた米国は「平和の配当」⁴⁶⁾を享受した後、不当な享受の代償を支払う番に成った。

米国は1991年に「兵不血刃」(兵刃に血塗らず)の理想に近い形⁴⁷⁾で、湾岸戦争の快勝とソ連消滅の宿願を無血で実現させたが、敵失も手伝った完全無欠の神話や靈験の実績は長続きしなかった。干支の一小循環(12年)後の今次のイラク侵攻は、速戦速決の青写真の通り忽ち全土制圧を遂げたものの、敗者の粘り強い抵抗で犠牲者が続出し有志連合の他国まで損害を蒙った⁴⁸⁾。二匹目の泥鰌を狙った強攻はソ連のアフガン出兵の二の舞いに成る恐れも出たが、湾岸戦争と同じ12年離れた両者の類似は歴史の振り子原理を感じさせる。

其の反転を物語る事象の1つは、アフガン侵攻の翌月に天井を付け後に価格の低迷が続いた金の復活だ。米国株の「根拠無き熱狂」⁴⁹⁾相場が続いた1990年代に、金は利息や配当が付かぬ故に人気離散したが、一躍脚光を浴びた契機は他ならぬ9.11襲撃だ。「安心の配当」を含ん

だ「質への逃避」先として選好される傾向は、2003年のイラク戦争の直前や中東連続恐怖活動中の高騰で鮮明と成った。11月26日に紐育地下鉄の異臭発生が米国版サリン事件と疑われた事から、先物1ダウ = 400ドルの大台が7年8ヶ月ぶり突破された⁵⁰⁾。

噂は幸い「虚驚」(空騒ぎ)に終わったが、地下鉄世界貿易中心ビル駅再開⁵¹⁾の直後の事だけに、廃墟再建の「好事多磨」(好事魔多し⁵²⁾)を実感させた。市場に付き物の此の種の根拠無き驚異は、實在の脅威を映し出す鏡なのだ。金の蘇生は戦争と恐怖活動に怯える心理の所産であり、虚業への不信に因る実物への再評価と言える。湾岸戦争後も信奉され続けた「有事のドル」の常識の崩れ、対抗軸の「有事の金・瑞西フラン」の浮上は、米国の独り勝ちや情報技術万能の信仰を疑問視し、世界秩序の再構築を催促する信号に思える。

ノーベル賞と米国の基準は違いながらも共に欧米の枠内に収まるが、金とドルや株の相場の逆相関は世界と米国、伝統と現代、実と虚の対を成す。人類最古・万国共通の代替貨幣なる金の最大原産国が南アフリカ・露で、国際価格を決める業界談合の場が倫敦である⁵³⁾事は、米国の絶対的優位の裏付けの相対的不足を思わせる。新・旧国際基軸通貨の連動・両立は、経済面でも「独覇」を図る米国が打破したのだ。1971年8月15日に打ち出された米の新経済政策の目玉は、ドル防衛策の一環として金・ドルの一時交換を停止する事だ。

ノーベル経済賞の新設は経済の難題が前面に出た時代の要請と言えるが、其の年に大統領に就任したニクソンは、遂に経済の自律調節の持論を曲げて国家介入に踏み切った。世界大戦終結26周年の時機が象徴する様に、武力衝突の解決よりも経済秩序の維持が難しい。其の恰度1ヶ月前の別の「ニクソン衝撃」は、キッシンジャー秘密訪中で合意した米中接近の公表だ。米国の核実験初成功の26周年の前日に当たる時機は、対立と和解の反転を鮮明に告げたが、国際収支の不均衡の改善を狙う米国の経済防御は世界に金融混乱を輸出した。

1973年2月、西独のドル売り・マルク買いに端を発した国際通貨危機で、ドルは前回の暴落に次いで1割切り下げと成り、各国の為替市場の閉鎖や変動相場制への移行で再び激震が走った。30年後の今や又ドル安政策が人為的に施され、逆に米国発の人民元引き上げ圧力が高まった。栄枯盛衰の推移を言う中国の諺には、「三十年河東，三十年河西」と有る。覇者が30年毎に黄河以東から以西の方へと交替する意で、盛者必衰の教訓として知られるが、人生の「而立の年」に当る此のスパンから振り返れば、多くの巡り合わせに気が付く。

2. 安全保障の盲点：「防山中賊易，防心中（身辺）賊難」

1973年3月29日、ニクソンは米軍撤退完了・越南戦争終結を宣言した。同年のノーベル平和賞はキッシンジャー国務長官に与えられたが、其の「忍者外交」で実現した米・南北越の平和協定は結局反故にされた。翌々年4月30日の共産軍サイゴン攻落で、退場済みの米国は不名誉

な烙印を又も押された。越南の30年内戦の結末は其の後も不変の儘だが、5万人弱の戦死と千4百億ドルの戦費を払った12年間の介入の敗北は、米国民に心的外傷と厭戦情緒を植え付けた。ところが、30年後の同じ3月下旬に米国はイラク侵攻を断行した。

湾岸戦争で膨らんだ自信に因る反転は、サイゴン陥落の日付と隣り合う5月1日のブッシュの勝利宣言にも示された。只、尖端兵器を過信し兵力を過度に抑えた裏目で統治が手薄と成り、抵抗の続発で越南戦争の様な泥沼に陥る懸念も出た。歴史は風車の様に緩慢ながら循環的波動を繰り返すが、2003年の中東連続自爆襲撃と世界的商品相場上昇は、30年前の10月の第4次中東戦争と第1次石油危機の残像と重なる。商品市況の好転は実物経済の復権の賜物だが、「世界の工場」なる最大の実需国の今日も30年前に伏線が敷かれた。

カーターのノーベル平和賞受賞決定の翌日のバリ島爆弾襲撃は、平和の理想と動乱の現実の背中合わせを示唆したが、石油輸出国機構(OPEC)加盟の波斯湾岸6カ国が原油価格を21%引き上げ、石油危機の引き金を引いたのも、キッシンジャーの同賞受賞決定の翌日(10月17日)の事だ。一方、キッシンジャーの国務長官就任の2日後の1973年8月24日、林彪事件後の初めの中共大会が開幕した。同じ22日で69歳に成った鄧小平が晴れて登場した事は、中国の長い雌伏を経て其の2世代後の胡錦濤体制の至福⁵⁴⁾の起点と思える。

同月8日に東京で韓国中央情報部に拉致された金大中は、南北首脳会談の貢献で2000年ノーベル平和賞に輝いた。時代の波浪式の前進や螺旋状の上昇に符合して、韓国は其の15年後にオリンピック開催で民主化・高成長を展示し、更に15年後に金大中の対北寛容を継承する新大統領が就任した。与野党の逆転も含む其の変貌に対して、半島の北側は韓国要人暗殺('68,'74年・ソウル,'83年・ビルマ⁵⁵⁾)、日本人拉致(1970年代中期以降⁵⁶⁾)、大韓航空機爆破('87年)等の越境恐怖活動、及び近年の核開発恐喝で、凶悪⁵⁷⁾の道を走り続けた。

盧武鉉政権への支持率は発足時の8割から半年で2割まで下がったが、清新な形象を裏切った選挙中の側近の贈収賄醜聞^{スキャンダル}が大きな痛手だ。韓・米・日の現代史の連環を現わすかの如く、金大中事件1周年の1974年8月8日に米大統領が選挙絡みの水門^{ウォーターゲート}事件で引責辞任し、其のニクソンが新経済政策で衝撃を起した恰度^{ちょうど}3年後の同8月15日に、朴正熙大統領が光復節記念式典で在日韓国人青年に狙撃された。夫人の身代りで難を逃れた彼は5年後の10月26日、曾て日本で金大中を誘拐した中央情報部での夕食会で同部長に射殺された。

其の背景には諜報部中枢と大統領側近の確執、経済失速に対する社会の不満、独裁体制に抱く米国の不快が有った。同じ独裁開発途上の台湾でも、諜報機関の独走に由る米国在住作家・江南の暗殺(1984年)が導火線で、1970年の訪米で台湾青年に狙撃された蔣経国は米の圧力で民主化を決断した。一連の出来事で思い付いた逆説は、「防山中賊易、防家中賊難」(山中の賊は防ぎ易く、家中の賊は防ぎ難い)だ。「寧贈友邦、不賜家奴」(家来に下賜するよりも、友邦に贈呈する⁵⁸⁾)も、部下の反逆を考えれば売国の論理とは言い切れぬ。

朴正熙の実権掌握の起点は1961年5月16日の軍事政変だが、5年後の此の日に中国で「文革」が始まった。毛沢東が大乱を覚悟して発動した一種の政変は、「我々の^{そば}身辺で寝ているフルシチョフの如き人物」の政変への警戒が動機だが、政権篡奪の野心で「清君側」(君主の側近の肅清⁵⁹⁾)を進め、政変や領袖暗殺を企てたのは、皮肉にも党・軍の副統帥・林彪の一味である。林は失脚後に蒋介石と同じ「～賊」の蔑称と呼ばれたが、身から出た錆の「林賊」の「灯下黒」(灯台下暗し)は、熟語の「家賊難防」(家[内]の賊は防ぎ難い)の通りだ。

「文革」の全面的内戦は1967年夏に頂点に達したが、同年6月の第3次中東戦争と6年後の第4次中東戦争は、時期的に中国と世界の相関を示唆する。^{エジプト}埃及・シリアがイスラエルに奇襲を掛けた後者は、ユダヤ教の浄めの儀式的祭日を狙い虚を突いた事が有名だ。同じ10月6日は3年後の「4人組」失脚で、20世紀中国史にも鮮やかに刻み込まれた。第3、4の四半世紀の交の同じ日付の2つの劇変を経て、中東の火薬庫は間歇的爆発が止まらず今日に至ったが、「文革」派肅清後の中国は人為的動乱や地政学的危険を回避できた。

其の無血革命で健全な転変が始まったのは天意の妙だが、毛沢東が懸念した「宮廷政変」は皮肉にも彼の死の直後に起きた。軍を後ろ盾とする中央警備部隊の出動で、極左派の首領が抵抗できず権勢を失った展開は、毛の「槍杆子里出政権」(鉄砲から政権が生まれる)の持論に合う。「明槍易躲、暗箭難防」(見える^{やり}槍は躲し易く、見えぬ^や箭は防ぎ難い⁶⁰⁾)の通り、会議招集を装った電撃逮捕は身内を疑う毛の正しさを証明した。因みに、朴正熙射殺は此の成語に当て嵌れば、密室の中の「手槍」(拳銃)使用につき「暗槍」劇と言えよう。

第4次中東戦争の^{エジプト}埃・シの不意討ちは「暗箭」の部類に入るが、^{イスラエル}以は「明槍」の応戦で制空権を握り戦車戦でも優勢を占めた。アラブ側8ヶ国の増援も米国の武器供与に恵まれた敵に敵わず、16日に侵攻側の停戦の申し入れが^{イスラエル}以に拒否された。翌日に湾岸6ヶ国が伝家の宝刀を抜き原油価格を引き上げたのは、自慢の資源力に物を言わせる必殺の一撃であり、軍事力が足りぬ故の窮余の一策でもあったが、巡り巡って、3年前の同じ10月17日に^{エジプト}埃及大統領に就任したサダトは、開戦8周年に身内の「明槍+暗箭」で命を落とした。

^{エジプト}埃は^{イスラエル}以が占領地を更に広げた結果にも関わらず、同じ古代文明大国の中国・イラクと似た自負からか勝利を主張した⁶¹⁾。其の後10月6日に戦勝記念の意を付与したから、弱小や敗北を^{ごまか}誤魔化す阿Qの「精神勝立法」(勝者を以て自任する流儀⁶²⁾)を超えて、本心で善戦を喜ぶ節も有った様だが、1981年の此の日の戦勝記念軍事パレードの最中、サダトは対戦車部隊の過激派イスラム教徒将兵に射殺された。外交政策や宗教対立の絡みこそ異なるが、不満を買った独裁体制や経済不振、部下の絶対忠誠を信じた脇の甘さは朴正熙と似通う。

「文革」の発動に関する党内の5・16通達に対して、国民に「文革」を煽動する党中央総会議決は、1966年8月8日に採択された⁶³⁾。中国の「吉祥数」(ラッキー・ナンバー)の6と8が重なった縁起と、10年続いた民族の災難とは揶揄的対照を成した。禍福^{こもごも}交々の8月8日は1970

年の中東に於いて、第3次アラブ・イスラエル^{イスラエル}以^テ戦争後の久々の停戦の始まりと成ったが、緊張緩和の方向を作ったアラブ連合国初代大統領・ナセルは、直後の9月28日に急死した。其の後任の和平の努力も内部の破壊で中断されたので、好事こそ邪魔が多いと思われる。

サダトに向けた凶弾は観閲席の外国使節に及び、「平和国家」・日本の大使も被弾した。1997年11月17日、ルクソールで原理主義過激組織が欧・米・日等の観光客62人を虐殺した。2002年秋のインドネシアの観光地で起きた無差別爆殺より質が悪い⁶⁴⁾が、国家が恐怖活動^{テロ}に関与しない処が救いだ。共に第4次中東戦争の急襲を仕掛けたシリアは、「悪の枢軸」や「無頼国家」の一員と睨まれているが、両国の待遇の差は米国の許容範囲を浮き彫りにする。埃及^{エジプト}の其の後の小康は或いは、サダトの惨死の代償に対する返報と言えよう。

9.11襲撃や政変、大統領射殺の文脈と30年前の歴史の節目との交差点に、1973年9月11日のチリの軍事政変が大寫しに成って来る。サダト大統領就任の1週間後に西半球初の社会主義者大統領と成ったアジェンデは、マルクス主義政権の実験を3年以上続けられず、陸海空3軍と警察の叛乱で潰された。自ら銃撃戦で応酬した末の死亡は、「明槍」に因る「死於非命」(非業の死を遂げること)の典型だが、同じソ連絡みの政変・元首処刑として、1979年12月27日のアフガンと、'89年12月25日のルーマニアの事例が思い浮かぶ。

10年を隔てた死滅劇の前者は親ソ派の台頭とソ連の侵攻に直結し、後者は特に中国で「蘇東波」への恐怖を増幅させた⁶⁵⁾。2つの日付の間の12月26日が誕生日である毛沢東は、物故のスターリンに政治的処刑を施したフルシチョフを毛嫌いした。彼が1957年に起した「反右派闘争」の思想弾圧は、戦後第1次「蘇東波」の自由化を阻む闘いに他ならぬ。同じ1894年に農村で生まれた2人は、俱に大衆の人気を集め政敵を倒す事に長けた。中ソの長年の「1陣営2軌道」の対立・統一に合致して、彼等の激突も近親憎悪の性質が強い。

降誕節^{クリスマス}を軸^くに件の2回の処刑と対称の分布を成して、フルシチョフは1953年12月23日にベリヤの命を絶った。彼の秘密警察の長は其の前の政治局会議で突然断罪されたが、前代の恐怖政治の急先鋒を消す宮廷政変⁶⁶⁾は、「以眼還眼」(目には目)の類義語の「以血洗血」(血を以て血を洗う⁶⁷⁾)と別の意味で、血を以て血の肅清の伝統を洗い落とした。両党の反転を象徴する様に、中共の建国後の血の肅清は翌日に幕を開けた。政治局会議で毛沢東に「反党分裂」と糾弾された中央政府副主席・高崗は、翌夏に自殺に追い込まれた。

50年後の第4世代指導部は開国世代の政争の教訓を汲んで、政治局・総書記活動報告の新設を始め党内民主化を鋭意推進中だ。胡锦涛・温家宝体制が誕生した2003年の全国人民代表大会は、朱鎔基が首相に選出された前回(1998年)と同じ3月5日に開幕した。周恩来生誕百周年に合わせた5年前の時機への踏襲⁶⁸⁾は、実務優先や穏健志向の意志表示と見て能い。社会主義陣営の両雄の逆相関を暗示する様に、共産党中国の「大儒」宰相の誕生日はソ連の「鉄人」独裁者⁶⁹⁾の命日で、スターリンの死は正に1953年の此の日の事だ。

其の4ヶ月後の朝鮮戦争終結を織り込む形で、軍需の特需「神風」で潤った日本は即ちに株^{ただ}の暴落に見舞われた。半世紀後のイラク戦後の世界的株高が抵抗の続行で軟調に転じたのは、百年単位の歴史循環の折り返しに映る。隔世の観は1世代と共に1世紀の隔たりも有るが、長短はともかく連環の律儀さが好く現れる。曾て中央委員会での多数を以て政治局での少数を凌いだフルシチョフは、再び裏技を弄じる余裕も無く宮廷政変で失脚した⁷⁰。1953年9月12日に総書記と成った彼は、奇しくも18年後の9月11日に世を去った。

彼の盛衰の一巡に付いた終止符^{ちゆうとど}の恰度30年後の9.11襲撃は、迂回ながら「三十年河東、三十年河西」を思わせる。原爆開発で遅れを取ったソ連は天外への進出で一日の長が有り、1961年4月12日の初有人宇宙飛行で優位の挽回を主張できた。米国は翌月2月20日に漸く同じ土俵に登れたが、ソ連空軍少佐の「地球は青かった」が世界中を感激させた30年後、「改革・透明性」の合言葉で清新な印象や初心^{うぶ}な期待を膨らませ、フルシチョフ再来の改革派旗手と目されたゴルバチョフ書記長の逆噴射に因り、ソ連は74年の歴史の幕を閉じた。

米国は競争相手^{ライバル}の初有人宇宙飛行の5日後、CIAが集めた反カストロ勢力のキューバ侵攻でも敗北を喫したが、翌年10月22日に勃発したキューバ危機で逆転勝ちを遂げた。1991年の湾岸戦争の快挙は30年来の雌雄の決定的格差を最大限に見せ付け、引いては50年前の真珠湾襲撃の雪辱も再び果した。同時代中国の場合も1世代や半世紀毎の変易を觀れば、1997、99年の香港・澳門^{マカオ}返還は、30年前の「文革」内乱と中ソ武力衝突、50年前の国・共内戦と建国、百年前の「維新变法」の失敗と民族主義の台頭⁷¹、等の総決算と思える。

ケネディがキューバでのソ連導弾^{ミサイル}基地建設の事実を暴く3日前、中・印辺境戦争が全面的に勃発した。11月21日に中国は余裕の勝利で停戦を導いたが、弱い印度が相手なので自慢に値しない。海上封鎖で世界を核戦争の瀬戸際に追い込みソ連を譲歩させた米国に比べるまでもなく、大飢饉のどん底に苦しむ最中の中国は世界の枢軸から遠く離れていた。其の30年後の1992年に鄧小平の南巡で改革・開放が再点火され、宇宙航空開発計画が策定された等、新世紀の飛躍への助走が一気に加速したが、「三十年磨一劍」の原理も思い当る。

ソ連初の有人宇宙飛行の日付は中共にとって、1927年の同じ4月12日に蒋介石の政変で国民党と決裂した忌々しい記憶が付く。其が象徴した受難の宿命に対して、米国初の其の10周年の翌日のニクソン訪中で、中国は内乱・鎖国から脱し世界進出の途に着いた。前年の4月24日に中国も宇宙へ頭角を伸したが、毛沢東賛歌・『東方紅』の名を冠す人工衛星の発射の前年に、米国は月での小さくて大きな一歩で天下を圧倒した。老大国を照らした「紅太陽」(赤い太陽)の光輝も、新帝国の「太陽神」(アポロ)の威光に及ばなかった。

月面に着陸した米国飛行士が国旗を立て、「人類を代表して平和に遣^やって来た」と刻まれたプレート^{プレート}を置き、衛星中継で自国の覇者の絶対性を印象付けた。其の1969年7月20日の余りの異彩に因り、4日前の打ち上げは影が薄れたが、米の初核実験の24周年に当る時機は制覇の執念を

隠し持った。其の野望と意地を張る様の中・北越・北朝鮮・キューバは、人類が初めて他の天体に足跡を印した此の壮挙を伝えなかった⁷²⁾。世界人口の4分の1を情報封鎖の壁の内に閉じた其の「孤立の枢軸」⁷³⁾は、10年も経たずに大分化・大変貌が起きた。

1969年9月に立て続け現れた其の前触れの第一弾は、1日にリビアで青年将校集団が起した王制打倒の政変だ。革命評議会議長・カダフィ大佐の恐怖活動の実施・支援に因り、「孤立・悪の枢軸」は北アフリカ・西亜細亜へ集中した。其の直後⁷⁴⁾、彼が心酔したナセルと同じ心臓発作で胡志明^{ホーチミン}が逝った。越南は建国の父の死を境に急速に中国と疎遠に成り、キューバと同様ソ連に軍事基地建設等の優遇を与えた。一方、中国は国際孤立と経済不振を打開すべく1979年に改革・開放を始めたが、同年2月17日に「対越自衛反撃戦」を挑んだ。

中ソは俱に越南の対米戦争を支援しつつ吳越同舟には成らず、周恩来が胡の弔問に一番乗りのモノ連代表団との対面を避ける為であった⁷⁵⁾。但し、数日後に一転してハノイから帰国中のソ連首相を招き⁷⁶⁾、半年來の国境衝突の解決に就いて会談した。9月11日に北京の首都空港で行なった首脳折衝は、戦乱から和解への急展開として劇的色彩が濃い。32年後の此の日の米国の不意な被害と同時期の中国の順調な発展と合わせて、中国と世界の逆相関を思わせるが、国際関係の変幻の常として中ソの接近も分離の裏返しに他ならぬ。

建国の1949年に始まった2国の蜜月は、恰度^{ちやうど}10年後にソ連の経済援助停止で破局を迎え、更に10年後に武力衝突まで発展した。全面戦争が回避された後に小康状態が続き、10年後の中越戦争終結の直後に腐れ縁は正式に解消された。中ソ友好同盟相互支援協定が満30年を迎える前に、中国は其を更新しないと発表した。日本を仮想敵とする条項が含まれた条約は、前年に締結した日中友好条約の障碍をも為しており、途中の有名無実化は日中関係の将来像にも成りかねない⁷⁷⁾が、中ソは又10年後の1989年に歴史的和解を遂げた。

毛沢東はキューバ危機終息後の詞^{うた}⁷⁸⁾でソ・米への敵視と蔑視を吐いたが、結びの「要掃除一切害人虫、全無敵」(掃除するを要す一切の人を害する虫、全て敵無し)の豪語は、彼の闘争心の正直な発露と共に国力の裏付けが無い「空砲」⁷⁹⁾なのだ。冒頭の「小小寰球、有幾個蒼蠅碰壁」(小さき小さき寰球に、幾個かの蒼蠅有りて壁に碰^{あた}ち)は、彼と中国人が好む「白髮三千丈」的誇張であり、中国の領袖に相応しい地球規模の眼光であるが、氣宇壮大な啖呵が自らへ撥ね返って来る様に、中国は其の頃も其の後も壁に碰^{ぶつ}り続けた。

毛は「國門」(国の門戸⁸⁰⁾)が未開放だった1950年代に、中国の「球籍」(地球に於ける戸籍。国際社会に於ける存在資格)に就いて懸念を吐露した。50～60年経っても米国に追い付かぬ様では「開除球籍」(地球から除籍)されて了^{しま}うと言う警告は、鄧小平時代末期の1988年の「球籍」論争⁸¹⁾で現実味が増した。「生存・発展」を鍵観念とする長期高成長戦略の策定と共に、物価体系改革の「禍匣」^{パンドラのはこ}が開かれ金融動乱が誘発された。其の'88年8月の凶変⁸²⁾は'66年6月の「文革」始動⁸³⁾と共に、「吉祥数」^{ラッキー・ナンバー}の非絶対性⁸⁴⁾を証明した。

国際社会との「接軌」(軌道の接続。基準の共有⁸⁵⁾)で障碍に遇う事は、翌年のゴルバチョフ訪中の際にも現れた。鄧の中ソ和解宣言の時機が5月16日に設定されたのは、23年前の同日に「文革」を起した毛の過激路線への清算も意図されたとろうが、人民大会堂の外で民主化請願の人海が溢れ、異国の党首・元首に人気が集まった異常事態は、彼と中国の折角の貫禄発揮を台無しにした⁸⁶⁾。中国史の法則の通り外憂よりも内患が深刻だが、秩序回復の為の実弾鎮圧は前年の経済戦争の空振りよりも酷く壁に碰る事になった⁸⁷⁾。

キューバ危機での後退が下降帰趨を作ったソ連は、ゴルバチョフの「一念之差」(一念の違い。決断の誤り⁸⁸⁾)で解体した。価格体系改革の「闖関」(強硬突破⁸⁹⁾)や「政治風波」平定の「開刀」等、経済自由化・政治民主化の時流に対する鄧の対応は、一步も退かぬ頑固さでソ連との力関係を逆転に至らせた。2001年の江沢民訪露と中ソ善隣友好条約の締結⁹⁰⁾は、両国関係の10年毎の更新の道標と成ったが、其の頃の露は内発・外来の経済危機で元気を失い、中国は独裁開発・移行経済と亜細亜金融危機の防衛に成功し勢いが付いた。

「瘦死的駱駝比馬大」(駱駝は瘦せて死んでも馬より大い。腐っても鯛⁹¹⁾)の通り、露は猶も軍事大国で「資源の枢軸」⁹²⁾の強味も持つが、胡錦濤訪露の'03年に中国は軍事面で比肩の程に迫った。ソ連様式を手本に世界3位と成った有人宇宙飛行は、「青は藍より出でて藍より青し」の可能性を示した⁹³⁾。其の凱旋日が初核実験の39周年に合わせられた⁹⁴⁾事には、初核実験と同じ日付けでアポロ11号を発射した米国と通じる気負いが漂った。有人月面探査で2番手に成る見込みと共に、21世紀の新強豪の出現が予感される⁹⁵⁾。

3. 「酷」(cool)の冷徹・精彩の両面と「硬実力・軟実力」の相乗

毛は1965年5月に38年ぶり赤軍根拠地の江西・井崗山の土を踏んだ時、「可上九天攬月，可下五洋捉鯨」の豪語を詞⁹⁶⁾の中で発した。九天に上って月を攬る事も五洋に鯨を捉える事も可能だとは、中国の人工衛星や潜水艦の地球内外での活躍を觀れば納得できる。本歌取りが好きな毛の此の句の下敷は、李白の「俱懷逸興壯思飛，欲上青天攬明月」(俱に逸興を懷いて壯思飛び、青天に上って明月を攬らんと欲す)⁹⁷⁾だ。彼が「酷愛」(越よ無き愛好)を示した李白・李賀・李商隱は、俱に壯麗な奇想と茫洋たる風格が特長を為す鬼才だ。

其の「酷」は「越ゆ無し」と同じ善悪を問わぬ極限を表わす⁹⁸⁾が、直近の中国でcool(格好いい)の音訳として流行語に成ったのは、西洋で嗜虐趣向と誤解された「痛快」に似た正・負同居の発想が根底に有る。毛が自讃した詩作は長征中に党首と推された遵義會議⁹⁹⁾の翌月の『憶秦娥・婁山関』で、結びの「蒼山如海，残陽如血」(蒼き山海の如く、残陽血の如し¹⁰⁰⁾)は、戦争中の長年の觀察で脳裡に蓄積した自然景色と戦闘の勝利の突然の交合の所産だと述懐した¹⁰¹⁾が、其の絶唱は正に「酷」の冷徹+見事の重奏である。

国家の文化的影響力を言う Gross National Cool は、日本では「国民総精彩」の訳し方が有る¹⁰²⁾。対概念の「国民総生産」とは字面に「生・彩」の対も含むが、中国語で素晴らしい様を表わす「精彩」は cool の美的一面として、「硬実力」と対立・統一の関係に在る「軟実力」の特質を言い得て妙だ。「酷」の両面性と通じて「柔」も「矛+木」の字形の通り硬質性を秘め¹⁰³⁾、非即物的「柔力」は生産力と成り得る。形而上の領分に属する「着想・構想・発想」の文字が示唆する様に、着実な構築や発信の可能性が基点に仕組んである。

「物質は精神に変わり、精神は物質に変わる」¹⁰⁴⁾と唱えた毛は、浪漫の「逸興・壮思」へ傾斜した余り現実から逸脱した。治世の壮大な実験が壮大な失敗に終わったのは、建設的「精彩」を欠く破壊的「酷」の結果に他ならぬ。「文化大革命」も大義名分とは裏腹の武闘・政争に化した処が酷く、「残陽如血」の茶化の様に陽気・血気の氾濫で無残な廃虚を遺した。但し、其の反面教師は寧ろ文化力の重みを浮き彫りにし、次の命題の妨げにも成るまい。即ち、偉大な創造は偉大な想像から生まれ、偉大な現実は大偉大な理想を母胎と為すのだ。

1964年10月16日、大学在学中の胡錦濤は人民大会堂で大型音楽舞踏史詩・『東方紅』に出演した後、毛沢東と共に観覧した周恩来に由る核実験成功の宣言を聞いた¹⁰⁵⁾。39年後の同じ日に有人宇宙飛行が彼の立会いで凱歌を奏でた事は、文化力が熟成し生産力に転化した好例だ。周の母校・天津南開中学を初代首相より43年後に出た¹⁰⁶⁾温家宝が新世紀の初代首相に成った事も、原点や原動力と為せる理想の創成力の証だ。「時勢は英雄を造り、英雄は時勢を造る」¹⁰⁷⁾と併行して、「時勢は時勢を造り、英雄は英雄を造る」も有り得る。

「航天英雄」¹⁰⁸⁾と命名された有人宇宙飛行士の空軍中佐・楊利偉の出自も、時代や地政学・人類地文学の因縁を思わせる。彼は中国の「核倶楽部」入り¹⁰⁹⁾の翌年の6月に生まれたが、其の前月に赤軍の揺り籠を再訪した毛は斯く詠んだ。「久有凌雲志，重上井崗山。(略)三十八年過去，彈指一揮間。」長らく凌雲の志を蓄えて再び井崗山に上った彼は、38年間の経過を弾指の間と感じたが、「上九天攬月」の夢は奇しくも38年後に実現した。楊が其の直後に此の世に遣って来たのは、「天遣」(天の手配)¹¹⁰⁾の所産とさえ思える。

「天遣洪荒」(天が洪荒を遣らす)と言う様に天は混沌・蒙昧をも造る¹¹¹⁾が、天は絶えず禍福の反転を導くのだ。1965年に毛は劉少奇打倒を決意し中国は越南で米国と対決したが、「文革」の惨劇と対米交戦の代償の結果として、38年後に初めて平和的党首交代が果され、米英のイラク侵攻を横目に国力を着々と増強している。中国に降り掛かった新型肺炎を退治する「硝煙無き戦争」で、人災の元なる元老院政も解消され、同じ頃に中国が米・朝・韓・日・露を集めて朝鮮核開発を巡る協議を主催したとは、正しく隔世の観が有る。

抗日戦争勝利20周年に当る1965年9月、国防相・林彪の名に由る論文・「人民戦争勝利万歳」¹¹²⁾は、内戦時代の「農村から都会を包囲する」戦法を世界に用いるよう¹¹³⁾と主張した。海外では革命輸出の野望や前近代的発想への固執と捉えられたが、38年後の中国は「世界の工場」の異

名の通り、国際社会の辺地から中心への移行を急速に進めている。草創期の粟 + 歩兵銃^{あわ}¹¹⁴⁾ 建国後の高射砲 + 核兵器¹¹⁵⁾ 21世紀の電脳^{コンピューター} + 宇宙飛行船、という中共軍の約38年毎の2段階びめく躍進は、熱戦 冷戦 冷戦後の時代の大勢にも合致する。

38は中共の軍・国の歴史に於いて、実に因縁の深い数字である。建国世代には抗日戦争勃発の翌1938年に入党・入隊の者が多く、其の異名も日本軍の38式歩兵銃に因んだ「38式幹部」だ¹¹⁶⁾。38度線の両側が争う朝鮮戦争で立てた殊勲に因り、第38軍が最強「王牌」(エース)の地位を不動にした。其の一部隊に異例の「万歳」の賛辞を贈った¹¹⁷⁾ 志願軍総司令・彭徳懐は、建党38周年の1959年に国防相在任中に肅清された。建国10周年に当る其の年は毛沢東独裁の起点に当り、中ソの決裂と大飢饉の到来で受難の序幕と成った。

38歳の楊中佐が初代宇宙飛行士に選ばれたのは、其の年功から最適と言われる¹¹⁸⁾ が、黄金分割率の38.2¹¹⁹⁾ は此処で天数の妙を示した。極めて短い時間を形容する「弾指」は仏教用語として、許諾・歡喜・警告の為に指を弾いて音を出す事にも言う¹²⁰⁾。38年は毛の感嘆の通り歴史の大河の一滴と見做せるが、悲喜交々の人間劇や様々な葛藤で織り成された重厚な年輪に違い無い。最終「梯隊」(梯団¹²¹⁾)から楊が一足先に抜きん出た¹²²⁾のは、人為的努力に因る抜群な資質^{たまもの}の賜物と共に、風土の遺伝子の結晶とも考えられる。

同じ領分の人類初の先駆者の返還後第一声の地球礼讃を意識したのか、彼は天外から妻子と交信する際、「景色非常美」(景色は非常に素晴らしい)と地球の印象を述べ、「我看到咱們美麗的家了」(我々の美しい家が見えた)と付け加えた。司馬遼太郎は『この国のかたち』の「^{くに}国」を当初「^{くに}土」と表記したかった¹²³⁾が、此の「家」も国家・郷土の両義が取れる。地球を表わす「星球」(天体)の出番が無かったのは、毛沢東の浪漫主義や江沢民の美辞麗句¹²⁴⁾と補完する中国人の素朴な現実主義を垣間見せた。「感覺良好」(気分は良好)と言う発射後の第一声も、中国的自我意識を如実に現わした¹²⁵⁾。

経済の泡沫^{バブル}・敗戦期の数人の改憲派首相が心酔した¹²⁶⁾ 司馬は、前世紀日本の最大の歴史小説・「大説」¹²⁷⁾ 家の名に値する。其の史観は親台湾や脱亜細亜の政治・文化志向¹²⁸⁾ に拘らず、民族主義や英雄主義で中共・中国人と波長が合う。複雑な地形を持つ日本の各地の文化の多様性こそが此の「土」の形だと考えた彼は、地方文化の色彩が薄れた1980年代以降¹²⁹⁾、母国の狂騒と「漸退」¹³⁰⁾に苛立ったが、出身地の「国」の特徴が稀薄化した日本に対して、宇宙飛行で民族英雄と成った隣国の「^し土」¹³¹⁾の「^{くに}土」は深意を持つ。

神舟5号^{シェンヂョウ} は内蒙古の草原に着地したが、司馬は蒙古語を専攻し草原を好んだ¹³²⁾。遼遠の空間・境地への憧れを込めて筆名に付けた「遼」¹³³⁾は、巡り巡って楊利偉の広域故郷・遼寧省の略称だ。此の地名は隣の吉林省や楊の名と同じ「取(図)吉利」(縁起を担ぐ)の色を帯びるが、域内の中朝国境の重鎮・丹東の旧称・「安東」¹³⁴⁾と合わせて、中国的安寧願望・安定志向を窺わせる。江沢民は同音の「神州」^{シェンヂョウ}に因んで宇宙飛行船を命名したが、日本と似て非なる此

の「神の国」¹³⁵⁾の意志・意思¹³⁶⁾は其の名・実に凝縮された。

宇宙飛行の完遂は「利偉」の通りに成ったが、其の「旅途順利」(旅行順調)は類義の「一路平安」と共に、遼寧・旅順の地名の寓意に他ならぬ。「順利」の「利」は鋭利・営利の両面を兼ねるが、今次の偉業は虚栄だけでなく「順便」(次いで。附帯)の実利も多い¹³⁷⁾。中国の事象や原理に好く有る対や連環を現わす様に、内外で有名な遼東半島の軍港・旅順に対して、楊中佐の生地・葫蘆島¹³⁸⁾は遼西の隠し玉めく軍港だ。湾岸で突出した「瓢箪」から駒ならぬ「千里駒」¹³⁹⁾が出た事は、歴史の隠し味を含んだ興味津々の一齣だ。

旅順が日露戦争の戦場に化し後の半世紀で日、ソの軍事基地と成り、丹東が朝鮮戦争中も半世紀後の今も対朝の軍事・政治・経済の要衝を成す等、遼東は中・朝・日・露/ソ・米の権益・利害が絡み易く地政学的危険が高い。上記の3つの38は正に此の地域と周辺の紛争と関わるが、世界史で滅多に脚光を浴びぬ遼西は別の38が象徴する様に、数多い滅亡劇・残酷史を有している。中華民国38年に国民党が大陸から撤退したのは、遼(西)瀋(陽)戦役での大敗が最初で最大の決定打だ¹⁴⁰⁾が、主戦場・天王山¹⁴¹⁾は遼西に集中した。

両党の軍事的強弱を逆転させた戦役の鍵は、錦州へ向う国民党の援軍を阻止する塔山防衛戦だ。東北野戦軍総司令・林彪は戦争演義の故事に倣って¹⁴²⁾、万一守れねば警備兵が私の首をぶら提げて毛主席に会いに行くと誓約した、と言う¹⁴³⁾。攻落できねば軍法で裁くと蒋介石に厳命された¹⁴⁴⁾敵の精鋭部隊は、6昼夜も突撃・爆撃を繰り返した後に撥ね返された。其の死闘は中共軍史上「最も精彩に満ち最も輝かしい防衛戦例」¹⁴⁵⁾を遺したが、蒼き山が血の海と化した無残な光景¹⁴⁶⁾と共に、非情+精彩の「酷」の好例に成る。

「模範の力は無限なり」と言う今も健在する毛沢東時代の言葉¹⁴⁷⁾を証す様に、頭を担保とする古人の「軍令状」(戦勝を確約する誓文¹⁴⁸⁾)は林彪の脳裏に刷り込まれ、彼の麾下の「塔山英雄団(聯隊¹⁴⁹⁾)」の伝説は全軍で勇猛精神を再生産して来た¹⁵⁰⁾。「一將功成りて万骨枯る」¹⁵¹⁾の法則に通じて、弱冠で其の戦功に因り林に表彰された張万年は、半世紀後に党中央軍事委員会常務副主席と成った¹⁵²⁾。英雄と歴史の相互創出を思わせて、江沢民時代の国防相・遲浩田¹⁵³⁾も20歳の時、上海奪取で軍史上空前の殊勲を立てた¹⁵⁴⁾。

塔山に近い葫蘆島から宇宙航空英雄が出た事は、地縁と「史縁」(歴史の縁。筆者の造語)が相乗した結果と思える。此の両「縁」は地文化学或いは人類地文学¹⁵⁵⁾で横・縦軸を織り成し、更に広義の「血縁」でも貫かれる。「酷」の原義の「冷厳」、転義の「精彩」と其の対概念の「生産」,「酉+酷」の字形の「時報」等の寓意¹⁵⁶⁾と重なるが、「血」は此处で熱血・冷血の両面を持つ。狭義の血縁は水より濃い血の繋がりを指すが、中国語の「縁」と「原・源・援・円・遠・怨」の同音と符合して、繁殖も破壊も血の縁に帰着できる。

墨で綴る文章に対して歴史は血で記す物で、天下の生死流転は血の熱(意欲・闘争)と冷(自然・残酷)の相剋相生に尽きる。日本軍に爆殺された生母の墓に「以血洗血」の誓いを刻ん

だ蒋経国は戦後、中共に対抗すべく日本に接近した。中共は米国への敵愾心から朝鮮戦争に介入したが、毛沢東の長男の爆死を含む代償で結ばれた中朝の「鮮血で凝結した友誼」¹⁵⁷⁾も、何時の間にか凍解に至った。其の同族嫌悪と表裏一体の文化的同根性として、蒋介石の「千里駒師団」¹⁵⁸⁾も金日成の「千里馬運動」¹⁵⁹⁾も漢籍に祖型が在る¹⁶⁰⁾。

中・日の「語縁」(言語の縁。筆者の造語)を示す様に、淵源の「淵」は両国の言語で「縁」と同音だが、淵に行き付いた後に反落へ転じる光景は「周縁・終焉」の文脈に暗合する¹⁶¹⁾。楊の故郷の隣で塔山と反対側に在る遼西の端の山海関で、曾て遼瀋戦役後に軍を率いて此处を通り平津(北京・天津)戦役の戦場へ赴いた林彪は、海軍航空兵基地からソ連へ亡命し蒙古の草原に墜落し命を亡くした。東北と華北の分水嶺と成る山海関では抗日戦争終結の301年前に、守備軍将領・呉三桂の寝返りで満族軍の侵入が許され明が滅ぼされた。

清朝の寿命は中華民国の大陸時代の7倍に当り¹⁶²⁾、少数民族に由る全土征服は又も遼の地政学的重みを窺わせる。遼西で特に熾烈だった国共内戦や満漢抗争は、中共や康熙の観方の通り中華民族の大家庭内の兄弟の争いで、遼東紛争に絡んだ対外折衝に比べて、恩讐は激化し易く「淡化」(稀薄化)もし易い¹⁶³⁾。康熙の権限削減策で雲南に飛ばされた呉三桂は再び裏切り帝を称えたが、同じ漢族が主体を為す中共の史観でも国家への反逆と視られ¹⁶⁴⁾、明太祖の後裔と言われる朱鎔基も前清3帝の統治術に興味を感じた様だ¹⁶⁵⁾。

抗戦勝利後の蒋経国は経済不正取締の指揮で「雍正帝」の異名を得たが、半世紀後の朱鎔基も類似の理由で「経済沙皇」(経済ツァーリ)と呼ばれた。「沙皇」は西域の沙漠の厳酷と皇帝の聖域の威厳が字面に出た妙訳で、「酷」の破壊と建設、物質と文化、「乾燥無味」と「富麗堂皇」(絢爛・立派)も連想される。中ソ友好条約の望ましい姿を「好看又好吃」(見た目が好くて又美味しい)とした毛沢東の比喻も、「酷」の生産・精彩の両面である。其の真意が即座に解った唯一のソ連首脳は、「酷」の権化たる秘密警察の長・ペリヤダ。¹⁶⁶⁾

鄧小平は建国35周年祝典で大学生から「你好」(今日は)と祝福され、5年後の天安門事件で「你好狠」(お前は何と悪辣だ)と罵倒された¹⁶⁷⁾。威信超絶の後の人気離散は正に頂点からの反転¹⁶⁸⁾で、崖っ淵で放った禁じ手が招いた「狠」は「好」と共に「酷」の両面だ。1926年頃モスクワ中山大学で蒋経国と同窓だった彼は、37年後の中ソ思想論争での活躍¹⁶⁹⁾も含めて、「新沙皇」¹⁷⁰⁾のソ連と縁が深い。一方、「盛清」(清の強盛期。筆者の造語¹⁷¹⁾)の康熙・雍正・乾隆と毛・鄧・江の対応では、彼は蔣の件の^{くだん あだな} 綽名に当て嵌まる。

建国後第1～3世代指導部の多くの方策は、山海関の南の隣の北戴河(河北省)で生まれた。避暑を兼ねて要人が其処で党・国の青写真を描く流儀は、首都や事務から超脱した高次の生産性が合理性に成るが、清末に避暑地として開放された観光地¹⁷²⁾の利用は、党中央と指導者が紫禁城内に本拠を構える事と共に、「改朝換代」(王朝・政権の交替¹⁷³⁾)を超えた政治文化の不易を示す。北戴河が属する秦皇島市の地名は中国初代の帝の巡視が由来で、現代の秦始皇と自任

した中共開国の「祖龍」¹⁷⁴⁾も此の地に足・筆の跡¹⁷⁵⁾を遺した。

毛は1954年夏の『浪淘沙・北戴河』で、「往事越千年，魏武揮鞭，東臨碣石有遺篇」(往きし事千年を越え，魏武鞭を揮い，東に碣石に臨みて遺せし篇有り)¹⁷⁶⁾と詠んだ。彼の独特な歴史観・英雄観の典型は，秦始皇の偉業・非情と曹操の武功・文才への肯定¹⁷⁷⁾だが，秦皇島で曹に思いを馳せた詞では3覇者が合流した。其の恰度1800年前に生まれた魏武帝¹⁷⁸⁾は，「治世之能臣，乱世之奸雄」の評¹⁷⁹⁾の通り「酷」の両面を持つ。光と影を相容れ善と悪を相対化する中国的「対」の発想¹⁸⁰⁾も，重層的「酷」の趣向の根底を成す。

毛の資質の遺伝子を用意して置いたかの如く，千載前の曹操は戦災の発動 鎮火を繰り返す，豪快で繊細な「芸術細胞」(文芸の天分)を見せた。其の激烈・風流を現わした「揮鞭・遺篇」は，北征途中の連作詩・『歩出夏門行』(207年)の第2首である。別名・『觀滄海』の由来と成る「東臨碣石，以觀滄海」(東のかた碣石に臨み，以て滄海を觀る¹⁸¹⁾)の他，「秋風蕭瑟，洪波湧起」(秋風蕭瑟，洪き波湧き起る)も本歌取りの種と成り，毛の「蕭瑟秋風今又是，換了人間」(蕭瑟たる秋風よ今又是にふきくれど，人間を換え了ぬ)を生んだ。

自然の不易と世相の変易を謳う其の結びは，「年年歳歳花相似，歳歳年年人不同」(年年歳歳花相似て，歳歳年年人同じからず)を連想させる。劉希夷が墨で書き血で塗った此の名句¹⁸²⁾は，時・事の変数の環を思わせる。『北戴河』 「秋風」 「年年」の延長で，毛が好きな李賀の「不見年年遼海上，文章何処哭秋風」(見ずや年年遼海の上，文章は何の処にか秋風を哭す)¹⁸³⁾を想起する。其の述懐は「遼海・哭」に縁って，金昌緒の「啼時驚妾夢，不得到遼西」(啼く時妾は夢を驚かして，遼西に到るを得ざらしむ)¹⁸⁴⁾と繋がる。

憤怒から詩人が生まれる古今の常理に通じて，地政学的危険は地文化の起爆剤と成り得る。地・血・言・文の縁の広さを示す様に，唐にも戦乱が多発した遼海へ思いを馳せた李賀の詩の丸1100年後に辛亥革命が起き，後に其の中華民国の大陸統治を終らせた毛は，遼西が登場した金昌緒の『春怨』と似通う『新婚別』を含む杜甫の「三別」¹⁸⁵⁾を評価した。彼は杜の『北征』を姪に薦めた¹⁸⁶⁾が，北方軍閥を打つ国・共初期連合の北伐，三国時代の魏を撃つ蜀の北征，烏桓を討つ曹操の上記の北征は，其の題に既視感が埋められた。

曹の「酷」の両面が端的に現れた物語は，『夏門を歩み出ずる行』を書いた翌年の赤壁大戦の前夜，自作の中の「月明星稀，烏鵲南飛。繞樹三匝，何枝可依」(月明き星稀，烏鵲南に飛りぬ。樹を繞ること三匝におよぶも，何の枝にか依る可き¹⁸⁷⁾)を不吉とした部下を，酒の勢いで刺し殺した事¹⁸⁸⁾だ。結びの「周公吐哺，天下歸心」(周公哺を吐きたければ，天下心歸せたりとかや)を否定する暴拳だが，其の『短歌行』の価値は些かも損なわれまい。天が更に用意した皮肉な反転として，彼が忌み嫌った件の苦言の通り南征は頓挫した。

呉蜀聯軍が弱を以て強に勝った戦例と敗者の秀作が千年近く発酵した結果，哲学・歴史・詩歌の滋味に満ちた蘇東坡の名文・『赤壁賦』が生まれた。作者が左遷先・黄州(今の湖北省黄冈)

の赤壁を廻ったのが前・後2篇の機縁だが、実際の赤壁会戦の戦場は辛亥革命勃発の地・武昌に近い¹⁸⁹⁾ので、或る意味では「合成の誤謬」と対蹠に在る「創造的誤解」と言えなくもない。其の誤解の創造性を正当化するかの如く、曹操の「東臨碣石・南下赤壁」から正に1700年後の1907年暮れ、黄岡で「奸・雄」両面俱有の名将・林彪が生まれた。

(未完、以下次号)

2004年1月28日

注

1) 米国の911や英国の999の一本化に対して、多くの国・地域では内容に因って番号が違う。仏蘭西の17(警察)・18(消防)・15(救急)は、分業化と2桁の両方で米・英と対蹠に在るが、此の2種の其々の3桁番号と3本立ては世界の主流の様だ。

東北亜細亜の方を点検すると、大同小異から地文化圏の存在と内部の断層が目につく。中国の110(警察)・119(消防)・120(救急)・122(交通事故)は、中身は^{フランス}仏に近く番号は日本に近い。日本の110(警察への事件・事故の急報)・119(火災・救急・救助)・118(海の事件・事故の通報)は、海洋国家の特質を浮き彫りにする。台湾の110(警察・交通事故)・119(火事・救急・救助)は、大陸との同根性を窺わせる一方、2本立ては韓国の112(警察)・119(消防・救急)と通じる。北朝鮮では電話帳は国家機密扱いで、国外への持ち出しは極刑の対象にも成るらしいが、此の「^{エフのカーテン}鉄幕」自体は周辺国との断層を構成する。

興味深い事に、日・中・台・韓共通の119は米の911と逆様で、日本の警察総合相談室の9110は米国との接点を見せる。更に、俱に少数派と成る英米の共通は、今次のイラク攻略での同盟関係や相対的国際孤立に符合する。但し、此の2国の仕組みは繋ぎ先を確認する手間が掛かる反面、利用者には憶え易い利点も有る。穿った^{うが}観方をすれば、他所で3本化が多いのは其だけ事件・事故が多く、別々に捌く体制を明確化する必要が有る事か。

2) 新聞等で多く報道されているが、体系的に叙述した日本語文献として、『ニューズウィーク』日本版 紐育支局長経験者で米国在住の作家・青木富貴子の『FBIはなぜテロリストに敗北したのか』(新潮社、2002年)が挙げられる。

3) 所謂「^{いわゆる}悪の枢軸」(Axis of Evil)を^{もじ}擬った筆者の造語。ブッシュ大統領は2002年初の一般教書演説で、此の名称でイラク・イラン・朝鮮を呼んだ。レーガンがソ連を非難した「悪の帝国」と、第2次世界大戦中の枢軸国と3重写しに成る処は、1992年旧ユーゴ紛争の際にペーカー国務長官の示唆を受けて、米国大手PR会社が「民族浄化」の殺し文句を編み出し、依頼主のボスニア・ヘルツェビナの敵に甚大な打撃を与えた一幕(高木徹『ドキュメント 戦争広告代理店 情報操作とボスニア紛争』、講談社、2002年)と同様に、米国一流の老獪な宣伝戦略、巧妙な情報作戦の好例であり、古今東西を問わぬ言説の「寸鉄殺人」(寸鉄人を殺す)の威力の^{あかし}証である。

「枢軸国」(the Axis)は中国語で「軸心国」と言うが、固有名詞の「邪悪軸心」から直ちに悪の^{イメージ}形象が湧き拒否反応を起す中国人は、「悪心」(吐き気がする)を字面に含んだにも関わらず少ない。第1、中国では「軸心国」よりも「徳意日」(独伊日)の総称が馴染まれ、中共の史観でも「枢軸国vs.同盟国」より「ファシズム陣営vs.反ファシズム陣営」が普通だ。其の上、「悪の枢軸」の諸国は枢軸国や同盟国の様な連合関係が薄く、大義を虚構する為の方便の匂いが嗅ぎ取れ

る。本稿筆者が別の論考で米国を「欲の枢軸国」の代表格と規定したのも、左様な反撥が根底に有る。当の米国でも民主党の重鎮は、副大統領と國務長官・副長官を「戦争の枢軸」と糾弾した(『日本経済新聞』2004年1月16日)。

「～の枢軸」は中国的語感では余り手垢が付いておらず、日本語の「癒し系・出会い系」等の「～系」と似た概括力が有るので、筆者は是非・善悪を度外視して此を重宝し、本稿で「邪の枢軸」(註22参照)、「孤立の枢軸」(註73参照)、「資源の枢軸」(註92参照)、「覇道の枢軸」(註170参照)等の造語を使った。何れも中樞・中軸・中心を表わす中性的意味であり(日本では「Axis」という小・中・高校生指導塾[全国会員数9千人,『読売新聞』2004年2月11日広告]が有り、元々「枢軸」に対応する英語にはthe centerも有る)、米国の独善を揶揄する意図も其の政治的必要が理解できる故に中性的だ。論座・視点の基軸の一部を成す方法論は、拙論・「儒商・徳治」の道:理・礼・力・利を軸とする中国政治の統治文化」(本誌14巻4号～15巻2号[2002年]連載)の論座と通じる。

- 4) 中国語の「事無巨細」に当る表現。日本語にも「巨細」は有るが、「巨細漏らさず」ならぬ「細大漏らさず」が日本流だ。微妙な違いではあるが、語順に象徴される出発点の相異が興味深い。実際にも、中国的発想は巨視から始まる故に細部に行き渡らぬ場合が儘有り、日本的発想は逆に細部に囚われる余り全体に及ばぬ事が多い。
- 5) 「網絡」(ネットワーク)に引っ掛けた筆者の造語。「隠形」(形[姿]を隠す)の熟語には、「隠形眼鏡」(コンタクトレンズ)、「隠形戦闘機」(ステルス戦闘機)、「隠形人」(透明人間)等があり、地下経済を「隠形経済」と形容する用法も有る。
- 6) 「合成の誤謬」は昨今の日本の新聞に好く出る経済学者の用語で、個々の合理的行動が全体的に間違った結果を招く事を指す。自衛の為の個人・企業の支出・設備投資の抑制が景気を停滞させ、通貨緊縮を加速させた直近の日本が好例とされるが、中国の社会現象も此の逆説で色々考えさせられた。曾て複数の教え子の日本人は北京駅の切符売り場で、我先に窓口へ殺到する人々の姿に文化的衝撃を受け、仮に逸早く買っても出て来られぬ不便を何故自覚しないのか、と筆者に疑問をぶつけた。「醜い中国人」の無秩序・自己中心の縮図とも見て取れるが、1人1人の利己心が共倒れに繋がる図式は正に「合成の誤謬」だ。近來の家電メーカーの値引き合戦も日本と同じ「利益無き繁忙」に陥ったが、「合成の誤謬」から脱し難いのは「心中賊」(本文参照)の所為でもある。
- 7) 米国はソ連解体後super power (超大国) から hiper power (ハイバイ超大国) になったと言われるが、其々此の2つの言葉に対応する中国語の「超級大国」と「極超大国」は、同音文字の反転に其の変貌を表わす妙味が有る(徐勝・松野周治・夏剛編『東北アジア時代への提言 戦争の危機から平和構築へ』,平凡社,2003年,220頁,本稿筆者の訳注参照)。
- 8) 2つの事例は別々の角度から、米国の安全神話に頼った故の安全対策の弱点や盲点を示した。前者は本稿で後述する(註127参照)新世紀の戦争の「超限」(限度への超越)性への想定の不十分に他ならず、「鳥籠構造」の構造的脆弱は大震災で露呈した上辺重視の神戸開発の不備と重なる。後者は世界一の金融・情報技術王国の名を泣かせ、米・加大停電事故と似た途上国並みの粗末(本文・註11参照)が表面化した。曾て毛沢東時代に或る田舎の郵便局が洪水に襲われた際、職員が必死に帳簿類を持ち出し後に表彰された。現金よりも取引記録が金融機関にとって遥かに価値が大きいと言う常識は、専門外の筆者でも鎖国時代の少年だった頃に其の報道で教えられた。猶、分散投資を勧める欧州の金言とウォール街の鉄則は、「全ての玉子を1つの籠に入れるな」

と言う。中国流の「不在一類樹上吊死」(1本の樹に首を吊る[1つの可能性に全てを賭ける。独りの人物や勢力に頼り切る])^{リスク・ヘッジ}も、同じ危険分散を諭す警句である。後者の事象は米国の「大樹」を過信した故に、此の東西共通の知恵に反した。

- 9) 被害が米・加や日・中・韓に特に集中した事は、9.11 犯行集団の当初の米・日への同時襲撃計画(註42 参照)と共に、北米と東北亜の地政学的危険を物語っている。筆者が昨秋購入した新型の個人用パソコンも第1波で被害を受けたが、起動も出来ぬ其の2日間には別の中古品で急場を凌いだ。「時代遅れ」の固定形家の裏のアナログ的物の利点(拙論・時間観念を巡る日中の「文化溝」^{カルチャー・ギャップ}の実態とデジタル時代に於ける伝統回帰の展望(上))[本誌16巻2号]参照)と共に、国際社会との「接軌」(註85 参照)の落とし穴を実感させられた。註8に対応する本文で取り上げたデータ保全と関連して、筆者は「国際インターネット」^{イメージ}との遮断を防波堤と考えて、大事なデータを古い文字処理機専用機にも取っている。
- 10) 金儲けを止めてソフトを改善せよと言うメッセージを書き込んだ犯行者は、データの破壊や改竄を伴わず只パソコンを再起動の循環に陥らせたので、善意的愉快犯とも見られなくはない。「網民」(インターネット利用者)の立場から言えば、此の一件でマイクロソフトは被害者と加害者の両面が有った。誤植の不可避を説く『夢溪筆談』(北宋]沈括)の「校書如掃塵」(書を校するは塵を掃うが如し)と通じて、「軟件」(ソフトウェア)も病毒が付き物で「軟標的」^{ソフト・ターゲット}に成り易いが、対策広報の不十分は同社の吝嗇と言われても仕方が無い。
- 11) 米・加政府の合同調査委員会は11月19日、134頁に上る事故原因究明報告書を発表した。其に拠ると、オハイオ州の電力会社が保安規則に反して木の定期剪定を怠った為、伸び過ぎた枝が同社の送電線に接触しショートと連鎖的遮断が発生したが、同社の^{コンピュータ}の監視用ソフトや警告装置は機能せず、中西部の送電状況を監視する別の機関でも設備故障の故に対応が取れなかった。停電を連鎖的に広げた人為的ミスに就いて米エネルギー省長官は、「大部分は予防可能だった」として電力会社を非難した。(『読売新聞』2003年11月20日夕刊)
- 其の漫画的不条理劇から汲み取れる安全管理の教訓は、「千里之堤、潰於蟻穴」(千里の堤も、蟻の穴に潰れる)の警句(出典=『韓非子・喻老』の「千丈之堤、以蟻蝨之穴漏」)が先ず思い当る。又、「万能」の過信から防波堤に用いられる^{コンピュータ・システム}の落とし穴、即ち広域連動(註85「掛鉤」参照)故の災禍波及の裏目も実感できた。
- 12) 曾てマルクスも此の格言を引いた事は、マルクス主義史観の深層の循環論と共に、西欧共産主義と西洋古代文明との内在的繋がりを示すが、此の2点は中共の史観や中共領袖の発想と東洋古代文明の伝統との相関にも通じる。
- 13) 中共がマルクス主義に共鳴した深層的理由として、其の弁証法的思考の^{もと}基に有るヘーゲルの「正反合」が中国の陰陽原理に合う事も考えられる。
- 14) 「軟」は中国で否定的・肯定的の両面を持ち、「軟弱」と「柔軟」が其々の代表例である。Microsoftの中国語訳・「微軟」は、男の性器短小・勃起不全を揶揄する俗語にも成ったが、其の名称や「軟件」(software)、「軟科学」(soft science)等の用語に因り、最近は肯定的色彩が増した。

民間企業や守備軟弱の両義で思い浮かぶ「軟」は、大手ソフトウェア企業の「東軟集団」(本社=瀋陽)の社名や、特許問題や技術には余り金を掛けぬ事を中国の情報技術産業の弱点とした指摘だ。後者の一例は豊島信彦(藍沢証券リサーチセンター部長)の苦言(『宝島別冊943 中国株投資で大儲けできる!』, 2003年, 73頁)で、複製商品で儲かり国際競争力が付かないと言っ

た主旨も同感できる。但し、製品の完成度に極度に拘る日本の企業も、特許や安全等の「軟領域」では甘さが内外から好く槍玉に上がる。

其の五十歩百歩は措て置き、日本人が西洋流の表現の真似で言う「アキレス腱」に対して、中国語には独特な「軟腹部」の比喩が有る。工業が密集し台湾の軍事的脅威を直に受ける東南沿海地域は、中国版図の鶏めく形の下腹部に当り、富の蓄積も脂が載った下腹・大腿部に似ている事から、国防上の「軟腹部」と見られる。因みに、中国では鶏肉は栄養豊富とし長らく重宝されて来て、特に腿肉に人気が集まる物だ。

猶、鶏の部位に譬えた価値判断で人口に膾炙する例は、『三国演義』第72回・「諸葛亮智取漢中曹阿瞞兵退斜谷」の故事だ。戦闘の膠着で進退を決めかねる曹操が「鶏肋」を合言葉にした処、行軍主簿・楊修は「鶏肋者、食之無肉、棄之有味」(鶏の肋骨は、食べようとしても肉が無く、ししか棄てるには味が有る)と、彼の迷いと撤退の気持ちを喝破した。楊は結局「惑乱軍心」(軍気を惑乱した)の罪名で処刑されたが、赤裸々な真実を突いた其の言は血の代償の甲斐も有って、「進退兩難」(ジレンマ)の比喩として語り継がれて来た。

中国は生産性の低い西域を何故切り捨てないのかという疑問が海外に有るが、国家主権や民族自尊の問題はともかく、資源や軍事等の「硬実力」に繋がる利用価値も、鶏の肋骨と類似の棄て難い隠し味に思える。此も楊修の「鶏肋」論と同じ禁忌の部類に入ろうが、各地域を版図の形に依って鶏の部位に見立てれば、一味違った価値判断が出て来よう。

例えば、東北と華北は其々「頭」と「胸」に当るが、東北が基礎と成り北京が基準を為す標準語発音の構造は、「喉舌」に当る2広域の位置に合致する。本稿で光を当てた軍事戦略要地・遼西と政治発信基地・北戴河も、領分の違いに関らず「咽喉」らしい役割が一緒だ。其の反面、2003年に中央が東北を第4極として開発する方針を打ち出した事は、毛沢東時代の重工業・農業の「帯頭」(牽引)役だった当該地域の弱味を示した。重厚長大の故に方向転換が鈍く時代に取り残されてしまい、厄介な難題が山積し国民経済に於ける寄与度が低い現状は、旨味が乏しく食べるのに面倒な鶏の頭部に似通うと観れなくもない。因みに、一步先行した経済成長第3極の北京・天津・唐山地域は、第1,2極の珠江三角洲、長江三角洲に遅れているが、中国人の鶏肉の格付けで腿・腹部に劣る胸の位置に符合する。

- 15) 「非攻」は『墨子』巻5の題として攻伐を非とする意で、他国への攻略・兼併を不義と非難するのは墨家思想の重要な一部だ。系列論考で湾岸戦争以降の武器の「慈化」(仁慈化)を考える予定だが、慈悲の「悲」の「非+心」の字形は此の文脈で「非攻の心」と解すれば面白い。但し、1990年代中期の日本で起きた連続列車顛覆事件(未遂)の犯人が「墨子」と名乗った事(系列論考で後述)が象徴する様に、墨子一門は高度な規律・技術力を持つ武装集団の側面も有った。

其処で連想した「非」絡みの字として、「排」は軍隊の単位(小隊。註149参照)や排除の意で墨家の在り方に通じ、「輩」は軍隊の序列や社会の秩序の意で「排」に繋がる。因みに、和製漢語の「年功序列」に当る中国語は、「論資排輩」(「資歴」[キャリア]を重んじ「輩分」[世代]で序列を決める)と言う。天安門事件で軍が先ず徒手で排除し最後に戦車の出動に踏み切ったが、其々「排手」「車」偏が付く此の2字との相関は、漢字の「天網」の広大を思わせる。猶、周恩来がニクソンに紹介した通り、国民党と共産党は長年に亘って相手を「匪」と罵り合ったが、此の侮辱語は形・意俱に「非」を内包し、「排・輩」や「悲」と違って「非」と同音だ。

- 16) 和製漢語の「挨拶」の字面を見て中国人が吃驚するのは、「拶」は中国語で「押し迫る」の他に、5本の小木で編み指の間に挟み引き絞める拷問道具の指詰めをも指し、「挨」(遣られる)との組

み合わせは其の刑を受ける意と成る故だ。少なくとも国民党時代に有った左様な拷問法は、「十指連心」(10本の指は心[心臓]に繋がる)の原理に合う。此の4字熟語自体は負の意味が無く、人と人の絆の緊密さ、特に子女に対する親の情の深さを表わす。後者に関連する成語の「手心手背都是肉」(手の平も手の甲も皆我が身の肉)は、複数の子女を平等視せねば成らぬ事に言う格言である。

日本語の「手の甲」と中国語の「指甲」(爪)は、両国の言語の似て非なる関係の例に挙げられるが、1番・上等の意を持つ「甲」が手の表面に集中するのは面白い。「甲」の兵器・軍人(鎧、又は其を着けた兵)の含みと「十指連心」の接点で、毛沢東の「傷其十指、不如断其一指」(敵の10本の指を傷付けるよりも、其の1本の指を断つ[方が打撃が大きい])の持論が思い浮かぶ。中共軍の殲滅戦志向は其の発想に基づくが、政争や粛清の「残酷闘争、無情打撃」も根底が通じ合う。

17) 鄧小平も天安門事件後の1989年11月23日、「没有硝煙的第三次世界大戦」の比喻を以て、帝国主義の「和平演变」(註45参照)への対抗を表わした(「堅持社会主義、防止和平演变」、『鄧小平文選』、人民出版社、1993年、344頁)。敵の「兵不血刃」(註47参照)の顛覆に因る変質への懸念は、偏執的虚構と視られ天安門事件後は余り唱えられなくなったが、胡錦濤が自国発の怪病災厄の退治を「硝煙無き戦争」と称したのは、表紙を変えず中身を変えた平和的変容の結果と言えよう。

18) 17世紀仏蘭西の哲学者・数学者・物理学者のパスカルの命題(『パンセ』、1670年)。人間は神の恩寵を通じて現れる愛の世界に憧れるのが主旨だが、彼の重んじた反理性の体験や直感的「繊細の精神」と結び付けば、不条理の戦災で瞬時に滅ぼされる人間の繊細さも考えさせられる。

19) 石川達三の長篇小説『風にそよぐ葦』(1949～51年)の題を下敷きにした表現。横浜事件(1942年)等の知識人弾圧に触れ、戦中・戦後を生きる人間像を描いた此の作品は、内容と「そよぐ」の当て字・「戦」に因って、「戦」の闘争と恐怖の両面を思わせる(註50「戦戦兢兢[恐恐]」、註146「悪戦」参照)。

20) 立法・司法・行政の3権に因んで報道機関は「第4権力」と呼ばれ、記者も「無冠の王」の異名が付き其を気取る輩も居る。言説の威力を形容する「寸鉄殺人」(註3参照)や「刀筆」(註69参照)の通り、社会の空気や時代の流れを造り上げる報道機関の「柔力」は極めて大きい。本稿筆者は中国の現状と日本語の「輿論・世論」(「世論」は「輿論」の代替表記として同じ「よろん」と読み、独立した語彙として「せろん」と読む)を手掛りに、21世紀の「第4権力」の二重構造を指摘して置きたい。

毛沢東は建国後初の本格的言論弾圧(1955年)で、文芸評論家・胡風等の逮捕を命じ其の自由化の主張を糾弾した。報道が全て党の指針に従う「輿論一律」の堅持も毛が強調したが、中国語で「世論」は余り聞かず専ら「輿論」の表記と成る事も、「輿論一律」の素地と捉えられる。

中国語の「輿・御」の同音は、御用の制御道具に成り易い輿論の宿命を思わせる。此の2字の組み合わせは日本語で「御輿」(「神輿」とも書く)に成るが、輿論操作は御輿を担ぐ事にも見立てられよう。「輿論」の日本流俗字・「与論」と和製漢語の「与党」(中国流は「執政党」)の接点は、巡り巡って「輿・御」に通じるが、「第4権力」も政治と同じ統治・祭祀の両面を持つ。

但し、胡風逮捕の40年後に始まった「国際インターネット」の普及に伴って、中国では官の輿論管理の対蹠に民の言説主張が急速に台頭した。個人のネット取引が市場を大きく動かし、市井の発信が巨大組織をも潰し得る日本の現状は、中国でも見られている。「風に戦ぐ葦」(註19参照)に引つ

掛けて言えば、「考える葦」の風説・風評の威力こそ、『詩経・鄭風』が出典の「人言可畏」(人の言葉は無視できぬ。噂は畏るべし)の通りだ。系列論考では「N(ネット)世代」の勃興や、「網上(ネット上)民族主義」の「猛状・盲情」(「網上」の音読みに因んだ筆者の造語)を材料に、「新人類」の言行が新世紀に及ぼす影響を分析したい。

- 21) 大統領の命を受けて事件を調査したウォーレン委員会の全文書・証拠品は、ジョンソンの指示で2039年(下院調査委員会の分は2029年)に完全に封印を解く事と成っている。情報公開の先進国を標榜している癖に76年もの経過が要るのは、其の半分の38年を「弾指一揮間」と観た毛沢東(本文・註110参照)の感覚からすれば、大した事ではないかも知れないが、当事者の他界を待つ意図も邪推される。尤も、「文革」や天安門事件の徹底解明の壁にも当事者の生存が有るので、歴史の暗部の宿命と言えよう。

技術の進歩に因り証拠品散逸の危険が少ない故、米国では殺人事件(及び遺伝因子証拠が保管された場合の強姦事件)の時効は此の頃無くなり、日本でも其に共鳴する向きが出て、遺族の心には時効が無いと言う声も上がった(『読売新聞』2003年12月21日)が、本稿で指摘した「身内賊難防」の通り、ケネディ暗殺事件の証拠物件はニクソン時代に国家記録保存所から多く盗み出された(落合信彦『決定版2039年の真実』[小学館、1993年]等)。国家の管理下にも拘らぬ怪事と言うよりも、国家の管理下だからこそその結果と観るべきかも知れない。但し、仮に完璧な保存が出来ても中身の無欠を意味しない。元英国皇太子妃・ダイアナの変死(1998年)に関する仏当局の調査報告書も、各方面から疑念が持たれて来て、2004年頭に遂に英司法当局が再調査に乗り出した次第だ。

折しも中国外交部は04年1月に民衆奉仕の主旨で、建国~1955年の外交文書を約1万点公開した。先進国を真似た情報開示は歴史の進歩に違い無いが、「竹幕」(竹のカーテン)の裏に隠れる部分も猶多いはずだ。1954,55年のジュネーブ会議、亜細亜・アフリカ会議関係が中心と成るので、朝鮮戦争の内幕の解明は先ず期待できない。一万歩譲って、過去の公文書が全て無修正で日の目を見るに至っても、深層の真相の完全把握には直結するまい。

1965年12月の上海会議で総参謀長・羅瑞卿が逮捕された(註66参照)契機は、林彪が妻・葉群を派遣し毛沢東に彼を誣告した事だ。後に中央警備団の責任者は回想録(『張耀祠回憶毛沢東』、中央党校出版社、1996年)で、途中3回入室した際に聞いた断片を綴ったが、5時間に及んだ密談の中身はもはや明るみに成れない。林夫妻は先見の明が有って「口対口」の告発方式を取り、如何なる文字の「档案」(ファイル)も遺さなかつた所以だ(羅点点『紅色家族档案 羅瑞卿女兒的点点回憶』、南海出版公司、1999年、183頁)。

林彪は「文革」発動を可決する政治局拡大会議での演説(註59,70参照)で、古今中外の例を挙げて宮廷政変を警戒しようと述べた。古代の宮廷暗殺疑獄に由来した「燭影斧声、千古之謎」(蠟燭の影、斧の音、千古の謎)も引いたが、現代史でも林彪事件前後の疑獄に永久の迷宮に入った例が有る。1970年12月にビルマから帰国中の周恩来が昆明で戦闘機に緊急着陸を強制され、撃墜命令を受けた雲南軍区政治委員・譚甫仁が直後に警備隊長に暗殺された(系列論考で後述)が、此の破天荒な一件も当初から「千古之謎」と成った。羅瑞卿の娘は当事者の「作古」(物故)を真相解明の決定的障壁に挙げたが、死没すれば歴史の彼方に逝くと言う「作古」の発想は、和製の婉曲語・「他界」に類似する。

- 22) 軍産複合体やCIAの他、ジョンソン副大統領やマフィア、キューバ等が取り沙汰されたが、恐怖活動支援の所為で30年後に改めて米から「不法国家」と指定されたキューバを除けば、外敵の「山中

賊」ならぬ国内の「家中賊」ばかりで、而も米の「欲の枢軸」(註3参照)の国柄に似合う野望が動機と推測される。犯人とされた元海兵隊員が諜報工作の為ソ連に渡り自国の情報を提供した経歴にも関わらず、ソ連の関与を信じる向きが最初から余り無いのは、大義を虚構する小細工に関係者も大衆も厭気が差した故か。オウム真理も露西亜で軍事訓練を受けヘリコプターを購入したが、問題の国は「悪の帝国」(註3参照)時代から、「世界憲兵」(国際警察)の心・技・体を持っていない。ソ連解体後の「中国脅威論」に就いても、同じ事は言える。

因みに、事件30周年の際に一層浮上した副大統領主謀説は、林彪に抱いた毛沢東の警戒の支援材料にも成るが、ジョンソンの遺族の反論は林彪の遺族の不服とも通じる。林彪集団は毛に対する「架空」(有名無実化の棚上げ)工作が失敗した後に暗殺を計画した、と公式に断罪されたが、架空(虚構)の要素を疑う観方も水面下で濃厚に成りつつある様だ。

- 23) 「遊芸戦」は其の戦のテレビ遊戯風の印象に即して、中国語で「遊芸」同音の「遊弋」に引っかけた筆者の造語。
- 24) 早くに死語化した「活動写真」は、「映画」や中国流の「電影」に比べて、映画の本質の一端を表わす妙味が有る。
- 25) 本稿筆者は当日の夜9時過ぎ、教授会を終えて帰宅後NHKを観た処、そんな光景と解説が飛び出た。
- 26) 死の決意を抱いた点で此の名称が相応しいが、「決死隊」は中国流で「敢死隊」と言い、正義か不義かとは関係無く使える。国民党軍には「奮勇隊」も有り(註144参照)、イラクのフセイン政権を守る「挺身隊」は戦争中の日本にも存在したが、何れも名称には「必死」(必ず死ぬ)の明示が無い。
- 27) 日本語に無い「独覇」は「独占」よりも横着な語感で、今の米国の「単独主義」・覇権志向に妙に吻合する。
- 28) 此的一幕で最も不可解な当局の対応は、解毒剤の準備が無かった事である。中国的「対の思想」(註180参照)を引き合いに出すまでもなく、「以毒攻毒」(毒を以て毒を制す)に対する安全装置が欠けた事は、大変な片手落ちと言わざるを得ない。当局にも不本意な市民の犠牲を多数招いた天安門事件の武力鎮圧の事例と共に、危機管理の不備の教訓と受け止めたい。ソ連時代に開発した新型特殊ガス兵器の使用が事実なら、恐怖活動平定の勝利の裏に隠れた平気な人命軽視の発想は、将来の禍根として警戒すべきである。
- 29) 此の組織がスターリン死後の翌1954年に設立された事は、個人独裁から集団独裁への移行を物語る事象と思える。略称が有名過ぎる故に影が薄れた全称は、「ソ連邦閣僚会議国家保安委員会」と言う。1983年に新設した中国の中央省庁・国家安全部(俗称「国安部」)も、其の「蘇連部長会議国家安全委員会」(全称の中国語訳)の「翻版」(焼き直し)の性格が一部有る。
但し、専ら字面に不気味・強硬の形相が濃い「克格勃」(KGBの音訳)と呼ぶ処に、恐怖政治に対する中国人の「同圈嫌悪」(同じ共産圏の故の嫌悪。「同族嫌悪」を擬った筆者の造語)が滲み出る。一方のCIAは中国で「美国中央情報局」の全称表記が普通だが、音訳や略称を付け難い技術的要因はともかく、米国を真似た蒋介石時代の特務機関・国民党中央執行委員会統計調査局の悪名を想起させる効果がある。
- 30) ブーチンは1975年にレニングラード法学部卒業、'91年の辞任までKGBで対外情報収集や諜報員養成を担当し、'85年から旧東独に駐在しベルリンの壁の崩壊の時も現地に居た(『読売新聞』2003年3月10日等)。其の後の経歴で興味深いのは、地方行政の責任者を経て'98年に連邦保安局

- (KGBの後身の1つ)長官と成り、翌年に首相に任命された事である。2000年に彼は大統領に選出されたが、内外の安全保障こそ此の国の最大な問題だから必然性がある。其の2日前の3月24日に台湾の「総統」選で野党党首・陳水扁が当選したが、彼は2歳年上の陳と違って、前年末に健康上の不安で辞任したエリツィンや、彼が生まれた年に逝ったスターリンの様な独裁性を隠し持つ。
- 31) ブッシュは1971年に国連大使、2年後に共和党全国委員長、'74年に駐北京連絡事務所所長、翌年に中央情報局長官、'81年に副大統領、'89～'93年に大統領を担当したが、権力の頂点に至るまでの国連 党務 中国 情報は、21世紀の国家戦略の指向性を先取りした様に思える。安全保障に対する超大国の超重視(註29参照)を反映して、「忍者外交」で国務長官に成ったキッシンジャーも米大統領国家安全保障補佐官の出身だ。
- 32) 「渋勝」は日本語の「辛勝」と中国語の「惨勝」に因んだ筆者の造語。「惨勝」ほど「惨重」(悲惨で重大)な代償を伴うわけでもなく、辛勞の末の辛うじての勝利とも若干違う。「渋」は予想外の抵抗に因る苦渋な渋滞と共に、湾岸戦争の華麗さを欠いた渋味も有る。
- 33) ほぼ百時間で終わった湾岸戦争の地上戦では、米軍は僅か148名戦死の代償でイラク軍を完膚無きまでに打ちのめし、数万人の軍隊、其々3千余りの戦車・火砲を無力化した。第2機甲師団タイガー旅団の戦闘支隊が敵を263人殺害し4千人俘虜にしたが、自隊の損害は戦死2名、負傷5名に止まった。(F.N.シューベルト・T.L.クラウス編、滝川義人訳『湾岸戦争 砂漠の嵐作戦』、東洋書林、1998年、252頁)其の頃の解放軍総参謀長・遲浩田は42年前の内戦で、2人の戦友と共に千人以上の国民党軍を降伏に追い込んだが、中共軍史上の大殊勲の持ち主(註154参照)だけに、米軍の離れ業の凄さを膚で分ったのであろう。
- 34) 賈島の七絶・『剣客』の冒頭の句。後半の一聯は、「今日把示君，誰為不平事。」(今日把り君に示す，誰ぞ不平事を為る。)訳 = 竹内実・吉田富夫『志のうた 中華愛詩選』，中公新書，1991年，121頁。小室直樹は『史記』の刺客列伝に中国人の行動原理の原点を見出し、本稿筆者はシリーズ考で其を掘り下げる予定だが、此の詩は序説の伏線と成る。
- 35) 「天兵」は天(神)が遣らした兵の意で、日本語では「神兵」(神の兵士。神の加護有る兵)が其に対応する。湾岸戦争で米国が放った利器は厳密に言えば、「天兵」ならぬ「天遣神器」(天が遣らした神掛りの兵器。註36，111参照)だが、其に対する人々の畏服は古の「天兵」神話の効果に似ている。因みに、ソ連の初有人宇宙飛行士・ガガーリンは空軍降下部隊の操縦士教官であり(註118参照)、米軍や日本自衛隊の最強兵種に空挺部隊が有る事も「天兵」に符合する。
- 36) Americaの中国語訳は「美国」「阿美利加」の他に、「～合衆国」の場合に使う「美利堅」が有る。中国人は外国(特に強国)の訳名に美的配慮を施す傾向があるが、音訳の此の3文字は考案者の意図はともかく、其々彼の国の強い文化力・経済力・軍事力の表徴に成る。湾岸戦争で米国が映像で見せた精密破壊導弾の神業は、「剣・堅」の同音に因んで「美利堅」の「美利剣」とも言え、世界に与えた衝撃も軍事・経済・文化の総合力の賜物だ。
- 37) 「文革」初期に紅衛兵が提起した標語。無辜の人々に対する殴打・非合法的自宅捜査等の暴力行為は、此の大義名分の下で行われた一時期がある。陳東林・苗棣・李丹慧主編『中国文化大革命事典』(西紀昭等訳、中国書店、1996年)では、毛沢東が「砲打司令部 我的一張大字報」(司令部を砲撃せよ 私の一枚の壁新聞。1966年8月5日)の中で劉少奇批判に使った「白色恐怖」が背景に有り、'66年8～9月に特に「紅色恐怖」の風潮が強く、西安等で「紅色恐怖隊」が成立した、と解説された(388頁)。

付け加えるなら、毛の「白色恐怖」云々は蒋介石が大陸時代と台湾統治初期に行なった弾圧・肅清の俗称だ。反革命的「白」を革命的「紅」に換えた同工異曲の反転は、紅衛兵運動勃興の40年前に毛が唱えた「革命は暴動なり」に源流が遡れる。其の『湖南農民運動考察報告』（1926年）の「痞子（成らず者）運動」礼讃は、昨今の米国の「無頼（無法）国家」糾弾と対で捉えれば興味深い。西安が「紅色恐怖隊」結成の典型例に挙げられたのも、2003年秋に同市で起きた反日暴動を思い起せば、地政学・地文化学的蓋然性が感じられる。

筆者は1966年秋の上海の外灘^{バンド}辺りで、ビルの壁に書かれた「紅色恐怖万歳」の標語を見たが、1平米^{スクエア}も有る大字の殴り書きは、血の裏付けが有るだけに強烈な印象を遺した。其の「紅色恐怖」現象の表層と深層、大衆の暴走と当局の制御を、系列論考で詳解したい。

38) 「末日之門」は、本稿で後に論じる『超限戦』（註127参照）の筆頭著者・喬良の近未来戦争^{シミュレーション} 模 擬 長篇小説（解放軍文芸出版社、1995年）の題。

39) 但し、此の見解はあくまでも米国と欧州、欧米の中心と辺境の二極図式に基づく。政治や文化の東と西（東側と西側、東洋と西洋）に基軸を移せば、北欧と北米の「地文化縁」（註155、161参照）や価値観の共有も目に付く。1964年ノーベル文学賞の受賞を辞退した哲学者・作家のサルトルは、同賞は西側の文化を意図的に擁護し東西対立を推し進めていると批判した。同賞を偏見の塊と断じる事自体は色眼鏡に成るが、米国映画アカデミー賞（註40参照）と共通する西側文化の擁護の意図も、共産圏作家への授賞が促した東西対立の結果も、同賞の瑕疵として否定し難い。

猶、次の仏作家受賞（1985年、シモン）まで21年も経った事は、サルトル辞退に懲りた選考側の俗物性の現れと邪推する向きも有る。同賞受賞者の国籍に仏が最も多い（21人）だけに、其の長い断絶は不自然と言わざるを得ないが、西洋の文化老大国を自認する仏の異端の学識者と欧州の周縁の権威的機関との葛藤は、多重の捉え方が有り得る奇観だ。

40) アカデミー賞授賞式は最近3月下旬が多く、春分と新学年開始の間に当る点で日本的季節感に妙に合うが、初回は1929年5月16日に行なわれたのだ。37年後の此の日に「文革」が幕を開けた（註63参照）が、「文革旗手」の毛沢東夫人・江青は元映画女優で、建国後の最初の職務も党中央宣伝部映画局次長だった。毛が三流女優に魅せられ中国が此の2人に翻弄されたのは、不条理劇的悲劇映画と観られなくもない。

アカデミー賞の俗称・「オスカー賞」の由来は、金像は自分の伯父・オスカーに似ていると言う或る図書館司書の一言だった。北京大学図書館で管理係を務めた頃の毛の欲求不満は、知識階級に対する彼の歪んだ感情の根底とされる。其の羨望と憎悪が混じり合った「情結」（コンプレックス）は、今の中国も様々と抱いているが、最大の対象として御三家を挙げるなら、一に米国、二にノーベル賞、三にアカデミー賞であろう。

現代中国の其の「情結」に関する論考は後に譲るが、北朝鮮の国家犯罪にも然様な動機が窺われる。1978年1、7月に韓国の映画監督・女優が香港から平壤に誘拐され、数本の作品を作らされた後85年にウィーンで奇跡的脱出を遂げた。申相玉・崔銀姫夫妻が手記・『闇からの罅^{こだま} 拉致・監禁・脱出』（池田書店、1988年）で暴露した金正日の素顔には、自国の映画の芸術性を高める為の拉致を素直に認めた処が印象的だ。世襲の領袖に成る前の彼の実績は映画製作の指導ぐらいいしか無く、故に同時代の中国人には往年の「文革旗手」と二重映しに成りがちだが、精神物質の転化（註104参照）を促す意識形態工作の効用は、政治と文化の相関を思わせる。「国民総精彩」（註102参照）の生産力を図る金王朝2代目の暴挙は、「酷」の非情・見事の両面と「羨憎相織」（羨望・憎悪が織り混じる。註167参照）の葛藤を内包した故に興味深い。

猶、ノーベル賞授賞式を「冬の儀典」と表現したのは、創設者に律儀に義理を立てた開催日・開始時刻（逝去と同じ12月10日午後4時30分）、主な開催場所（^{スウェーデン}瑞典の首都）に引っ掛ける意図も有るが、対概念としてアカデミー賞授賞式を冠した「春の祭典」は、ストラビンスキーのバレエ音楽の題を借りた形容である。1913年の初演で観客の拒否反応に遭った此の作品は、やがて20世紀の新古典の声価を欲しい儘にしたが、此处で引き合いに出した理由は別の領分に在る。^か彼の露西亜作曲家の3大名作の先駆けは『火の鳥』（1910年）だが、周恩来は中国の究極の防衛利器なる戦略導弾を「火鳥」の美称で呼んだ（後述）。

- 41) 銃社会批判の主題でドキュメンタリー部門賞を受けたムーア監督は、アカデミー賞授賞式の挨拶^{スピーチ}で毒舌を巻いた。「我々はノンフィクションが大好きなのに、今はイカサマ選挙で決まったイカサマの大統領を^{いた}頂いて、作り物の世界に生きている。」「イカサマの理由に抛って戦争が始まり、イカサマの情報が流れている。」「ブッシュよ、恥を知れ。お前の持ち時間は終了だ。」会場でブーイングと拍手が交錯したが、イラク攻略後も大量破壊兵器が発見されず今日に至った現実を観れば、米国の「虚構の大義」（自ら中国東北で体験した日中戦争を描いた五味川純平の長篇小説[文藝春秋、1973年]の題[副題=関東軍私記]）、ブッシュ政権自体の「偽」性に対する痛快な喝破と思える。中国の初核実験 有人宇宙飛行の時期と重なるが、戦争の口実を捏造する米国の常習犯ぶりを示す一例は、北爆の本格化を狙って1964年8月2、4日にトンキン湾で北越の魚雷攻撃を受けたと虚報を打った事だ。

猶、3月26日に^{ニューヨーク}紐育の反戦示威行進で逮捕された2人のノーベル平和賞受賞者は、暴力追放デモ等の非暴力運動の実績で1976年に受賞した北アイルランドの女性平和運動家・マグワイア（旧姓=コリガン）、対人地雷禁止活動に因り1997年に受賞した米国のウィリアムズだ。

- 42) 複数の報道に抛れば、左様な計画は9.11のみならず1990年代にも計画された。具体的に米・日で各6機の旅客機乗っ取り計画まで有ったと言うが、日本の方で不発と成った理由に、若し円高や排他的人種の壁が有ったならば、発展格差や「文化溝」^{カルチャー・ギャップ}が地政学的危険^{リスク}を緩衝し得る例証に成ろう。
- 43) 重要な作戦に立派な名称を付ける流儀は米国に有る様で、大統領が自ら公表する例として記憶に新しいのは、2001年10月8日に対タリバン政権掃蕩開始を伝える演説で作戦名の^{エンデュアリング・フリーダム}「不朽の自由」を宣言し、'03年5月1日の対イラク戦争の終結宣言で 自由イラク作戦 の名を出した事だ。中国でも「名」の文化」に因り「師出有名」（出征するには必ず大義名分が付く）の伝統が有る（系列論考で詳述）が、米国に比べて命名・宣揚に余り熱心でない理由として、老子の「名可名、非常名」（名付けられる名は、恒常不変の名に^{あら}非ず）や、俗諺の「会咬の狗不叫」（吠えぬ犬ほどきつく噛む。能有る鷹は爪を隠す）等に通じて、名称が勝って結果が見掛け倒れに成る事を防ぐ実用主義も考えられる。

高貴な鷲 の寓意を説明する資料は見当たらないが、小ブッシュが'03年3月19日の対イラク開戦宣言で出征部隊に語り掛けた言葉に手掛りが有る。「君たちが対決する敵は、君たちの手腕と勇気を思い知る事に成ろう。君たちが解放する人々は、高貴で礼儀正しい米軍精神を目の当りにする事に成ろう。」中国の智・勇・仁「三達徳」が揃った点で、筆者にも共感し易く且つ論考の好材料に成る礼讃・顕示だが、其の攻略と統治、非情と仁慈の対立・統一は、半月前の4日から始まった米韓合同軍事演習の名・^{フォール・イーグル}禿げ鷲 と此の^{ノーブル・イーグル}高貴な鷲 の対にも見られる。泥臭い前者と優雅な後者は正に、「^ク酷」の冷厳・精彩の両面を構成する。

- 44) 「^{スウェーデン}蘇東波」は「^{スウェーデン}蘇東坡」の語呂合わせ。「日本語は洒落と駄洒落を構造的に内に秘めた言語であ

り、日本は“駄洒落”によって生れた国と言っていいほどだ」(石川九楊『二重言語国家・日本』、日本放送出版協会、1999年、154頁)が、中国語と中国も全く同じである。「蘇東波」の考案者と思想傾向き不明だが、中国的「幽默」(ユーモア)の伝統に沿う軽妙な諧謔と思える。

「日本語は、洒落や駄洒落、地口落ちや、“ ”と掛けて××と解く。心は “ ”という、謎謎など言葉遊びによって生れた言葉であり、いわば日本は“吉本興業”立国なのである」(同上、154頁)が、中国人の思考・言説にも左様な知的遊戯が一杯有る。風馬牛の様な「蘇東波」と「蘇東坡」を連想遊戯的に考えれば、ソ連・東欧の平和的変質(註45参照)は、長時間の弱火で出来た「東坡肉」(蘇東坡が考案した肉の煮込み料理)の「漸老漸爛」(徐々に煮詰まり徐々に爛熟すること)に似ている。猶、本稿で蘇東坡の『赤壁賦』を取り上げたが、「蘇東波」の表徴と成るモスクワの赤い広場とベルリンの壁は正に其の字面に対応する。

- 45)「和平演變」は「平和的顛覆」や「平和的变化」とも訳せるが、筆者は激しい前者と穏やかな後者の中間を取って、「平和的變質」「平和的變容」「平和的移行」を好む。

此の用語は天兇慧・朱建榮等編『岩波現代中国事典』(岩波書店、1999年)で、次の様に説明されている。「1980年代末より中国共産党が主張している、西側資本主義勢力による社会主義体制の平和的顛覆という論理。46年米国の駐ソ大使ジョージ・ケナンは封じ込め戦略を提起し、“非軍事手段”によって社会主義国家を変質させることを主張した。」(執筆者=伊藤信之、1339頁)基本的主旨は其の通りであるが、毛沢東の「文革」の動機には既に「和平演變」の防止があった。『毛主席語録』の「29 幹部」に収録された1964年の言説は、「帝国主義の予言者たちはソ連に生じた変化に基づいて、“平和的变化”の希望を中国の党の第三代または第四代の上に託している」と言う(竹内実訳、平凡社ライブラリー、1995年、254～255頁)。1992年初の鄧小平南巡以降は「和平演變」は余り言及されなく成ったので、「1980年代末より」よりも「1980年代末まで」の方が実情に合おう。因みに、中国ではダレス國務長官の発想と認識する向きが多い。

- 46) 冷戦終結・湾岸戦争勝利後の米国株式市場の10年近くの上昇は、「平和の配当」と形容された。平和と繁栄の相関を思わせる此の比喩は、同時期の中国にも適用できる。2000年春の米・欧・日の情報技術産業株の暴落は、株式市場の先見性を以て1年半後の米中枢襲撃を予見した様にも見えるが、中国の安定成長が其の後も続けて来たのは、地政学的危険の解消に因る平和の果実と言える。

猶、中共は建国後の私営企業の「公私合営」国有化の改造に際して、所有権を買い取る代償として資本家に「定息」(資産評価に応じた固定利息配当、一般的に年利5%)を一定期間に亘って払う事を約束した。1956年から実施後10年経って、「文革」の動乱に伴い'66年9月に中断した事が示す通り、此も「平和の配当」の類いであろう。

- 47) 血戦を経ずに勝利を収める意の「兵不血刃」は、出典の『荀子・議兵』の「故近者親其善，遠方慕其德，兵不血刃，遠邇來服」の通り、徳を以て敵を制するのが原義であるが、戦術の巧者が兵器に血を塗らずして勝ちを得る比喩として好く使う。其の転義と選好は王道の衰微と覇道の強盛を映し出すが、中共軍の「不戦而勝」(戦わずして勝つ)の快挙には、仁・勇の両方が見られる。米国の湾岸戦争の勝利は直接の交戦がほぼ無く、神掛りの利器の投下で決着した事から、兵器の強者の「兵不血刃」(兵隊が武器に血を着けず)の結果と思える。対して今次のイラク占領は、現地の多くの民衆の解放感が示した様に、国際社会の道義的懐疑論に関わらず、無血の日本本土占領と通じて、徳の「隱形」戦力(註5参照)も見過ごせない。

猶、「兵不血刃」と対照的に、熾烈な戦場で死傷者が多数出る様を言う成語には、「血流成河」

(血流れて河に成る。註146参照), 「血流漂杵」(血流れて杵を漂わす) 等がある。類義の「血雨腥風」(血の雨が降り血腥い風が吹く) は、「白色恐怖」(註37参照) の類の虐殺・肅清の形容に好く使う。

- 48) 武装襲撃に因る死者は欧米先進国の軍人に止まらず、泰の復興支援部隊や日本の外交官、国連機関の幹部・職員まで及んだ。朝鮮・越南戦争やアフガン侵攻に対する抵抗も其まで至らなかったが、イスラム世界の信仰の力が思い知らされた。
- 49) 米国連邦準備制度理事会議長・グリーンズパンが1996年12月5日の講演で発した警告。皮肉な事に、合理性が無いと見られながら熱狂は其の後も数年続き、「市場制御の神様」と尊ばれる本人が強気相場の持続に合理的講釈として、百年に1度の情報技術革命の神通力を認めた(2000年3月6日の講演等)直後、9年続きの上昇は終止符が打たれた。
- 50) 金先物 1 罇 = 400 ドルの大台は其の数日前にも一瞬付けられたが、26日の再度突破が特筆されたのは其の誘因の故だ。紐育地下鉄の異臭発生は単純な事故に過ぎないと直ぐ判明したが、恐怖活動発生への警戒は一過性の問題ではない。折しもブッシュが軍の士気と自分の人気を浮揚すべく秘密裏バクダッドに飛び、空港内で進駐軍兵士と感謝祭の夕食を共にした(27日)が、同じ感謝祭休暇中の偶発事件に対する市場の過剰反応は、敵地での襲撃を恐れた大統領の蜻蛉帰りの電撃訪問の極度な厳戒と共に、「戦戦兢兢」(日本語では「戦戦恐恐」とも書く)の字面が示唆する戦勝者の代償を思わせた。

米国は12月13日のフセイン拘束で氣勢を揚げたが、米国の弱含みに対する市場の想定は全く変わるまい。国際恐怖組織「アル・カーイダ」の首領・ビンラーディンの肉声とされる談話が放送された事から、紐育商品取引所の金相場は2004年の初営業日(1月5日)に一段と騰勢を強め、1988年12月以来の高値(1罇 = 425ドル)を記録した。同日の米ドルは対ユーロで通貨導入(1999年元日)来の最安値(1罇 = 1.26ドル台)、対円でも3年4ヵ月ぶりの106円台まで下落した。「米国売り」の帰趨の強さと共に、金と米ドルの逆相関関係は再び確認できた。其にしても、1996年3月の水準の久々の回復から僅か1ヶ月余りで、更にほぼ同期間の7年4ヵ月前の高値が再現されたとは、歴史の振り子の振幅の激しさを物語る壮大な巻き戻しと言えよう。尤も、ヘッジファンド等の投機筋の資金投下に因り、規模の小さい市場が大きくぶれた節も看過できぬ。

- 51) 2003年11月23日、9.11襲撃に因るビル崩落現場の「グラウンド・ゼロ」の地下に、世界貿易中心ビル駅が再オープンし列車の運行が再開された。事件後2年以上も歳月を費やした事は復興の困難さと共に、同時代中国との政治・文化の相違を思わせる。仮に北京で類似の被害が発想した場合は、恐らく国家が威信に掛けて突貫工事を推進し、而も統制的祭祀の効果を計算し尽し、満を持す時機に蘇生を宣揚するだろう。ニクソン等は中国指導者の巧緻な演出に東洋的繊細を感じたが、逆に中国的感覚では11月23日の意味は掴めない。尤も、ケネディ大統領暗殺30周年の翌日に当たる点も、当事者の意図と関係無く再生の象徴性を有す。
- 52) 『辞苑』の「好事魔多し」の語釈は、「[琵琶記・幾言諫父]よい事、うまくいきそうな事には、とかく邪魔がはいりやすいものである」だが、『西廂記』が出典の「好事多磨」は、特に縁談の波乱を形容する事が多く、「磨」は人生の磨練・試練の寓意を持つ。
- 53) 国際金価格(ドル/罇)は倫敦に在るロスチャイルド銀行の通称・「黄金の間」で決まり、参加メンバー5社が午前と午後の2回其々の顧客の注文を突き合わせ、売買が折り合った処で価格を決め世界に発信する。業者間の利権の盤回しの観が強い日本流の談合と違って、市場の実勢に基づく国際協議の性質が濃いのが、電脳で繋ぎ刻々と動く為替・株式等の市場に比べて、格式張った古

典的印象が目立つのは無理も無い。英国は欧州通貨発足後5年経った今も加入せず、老帝国の矜持と島国の孤独を思わせる。英国が金の基準価格の決定・発信の基地と成るのは、欧州で米国の対立軸の表徴の一部を為し得る資格に相応しいが、ドル建ての表示は金も欧州通貨も崩せぬ「米国内通貨 = 国際基軸通貨」の構図を浮き彫りにする。

此と共に世界の多極化を象徴する事象として、国際標準時間が倫敦附近のグリニッジ天文台の所定を尺度としており、情報技術革命を導く米国も超精密時刻の発信元に成る努力をしつつ、其に従わざるを得ない。国際孤立を恐れず今次のイラク侵攻を敢行した同志だけに、其々19、20世紀の世界覇者だった両国の競合は興味深い。

54) 鄧小平は天安門事件後の国際孤立を凌ぐ為に隠忍の方針を示し、江沢民時代の安定・成長は其を貫徹させた成果に他ならぬ。同時期の米国が享受した「平和の配当」(註46参照)に対して、長期投資の返報を形容する「忍耐の報酬」と思える。内外に言われる胡錦濤の好運の証として、党首就任の翌年の有人宇宙飛行の成功、予定任期内の北京五輪・上海万博開催、人民元「昇値」(引き上げ)に因る国民総生産・所得成長目標の早期実現の可能性、等が挙げられるが、何れも先々代・先代の辛抱・蓄積の御蔭だ。

日本語の「雌伏・至福」の語呂合わせに因んだ筆者の此の見解は、日・中の深層原理の解明に於ける言語遊戯の洒落の有効性(註44参照)の例証に成る。此の2語は中国語では同音ではないが、中華民族を象徴する想像上の動物・龍が蛇を原型と為す事は、「雌伏 至福」の飛躍に吻合する。

中国語で「至福」と同音の「制服」は動詞として制圧を表わすが、鄧の武力鎮圧の禍が転じて福と成ったのも此の文脈に合う。因みに、毛沢東政権末期の第1次天安門事件では首都民兵が大衆を弾圧したが、当時の党中央政治局委員候補・首都労働者民兵総指揮の倪志福の名も、「制服・至福」と同音である。中国人の「諧音」(語呂合わせ)好きを物語る様に、彼は其の頃にも巷で「呢制服」(ラシャ制服)と巫囁て呼ばれた。

「呢制服」は蒋介石時代と毛沢東時代に於いて、「身分標志」(ステータス)のイメージが強かった。代表格の「将校呢子軍官服」に纏わる悲喜劇は、蔣が校長を務めた黄埔軍官学校の1期生で毛の愛将・林彪に起きた。開国世代の征服欲と「暴発戸」(成り上がり)心理の事例として、系列論考の本体部分に回すが、「諧音」(語呂合わせ)と高官の意に引っ掛けて「呢制服」と呼ばれた倪志福に対して、筆者は揶揄の心算も無く否定的捉え方もしない。

只、名前と同音の「至福」が彼にも見られた事を指摘して置く。全国労働模範から「文革」後期の風雲児に成った彼は、新体制の「文革」否定の影響を受けなければかりか、「4人組」失脚後に上海、北京のNo.2と天津のNo.1を歴任し、78年に全国总工会主席(全国労働者組合委員長)に就任し、5年後に政治局委員に昇格された。第1次天安門事件の鎮圧で首都労働者民兵の指揮者は副総指揮・馬小六であり、彼は寧ろ極左派の牙城・上海の政治的空白を埋める手柄が遺ったので、自然な成り行きと言える。其の処遇は政治家個人の運・不運を超えて、無産階級の前衛部隊を自任した中共らしい。「産業労働者大軍」の基地・上海に地元労働者出身の彼を送り、準軍事管制的為に市党委第1書記を兼務する海軍政治委員・蘇振華を輔佐させた中央の采配も、地の利・人の和を計算した妙が有る。

倪は87年に世代交替の流れで政治局から退いたが、15年後の党大会で其の「先鋒隊」の所属は中華民族に変わった。彼と入れ替る形で政治局に入った全国労働模範経験者の李瑞環は、政治局常務委員・全人代委員長の職を退いたが、無産階級の付加価値の剥落も感じ取れる。工業革命に

次く情報技術革命の潮流に対応する様に、政治局常務委員の9人衆は理科出身の高学歴者の集団だ。「文革」中「臭老九」(9番目の鼻撮み者[悪名高い人種])として軽蔑された知識人(連載次回分参照)も、雌伏の末に至福の番に成った。

猶、「志福」の「志」は「士・心」から成り知識人の精神の理想を成す(註131参照)が、「志」と「心」を共有し画数が同じの「忍」も、「雌伏 至福」の文脈に現れる(後述)。

- 55) 1968年1月21日、朝鮮特殊部隊がソウルの大統領官邸から数百^ルの処で警官隊と銃撃戦を展開し、休戦以来の最大事件として韓国に衝撃を与えた。翌日に逮捕された人民軍少尉は記者会見で、第1の目的は朴大統領の暗殺だと述べ、韓国陸軍情報部隊と偽って38度線の検問所で難無く通過したと説明した。本稿筆者は昨年観光バスで青瓦台の正門前を通った際に、周辺の嚴重な警備ぶりを観て3分の1世紀前的一幕を実感できなかった。侵入を輕易に許した南側の「心中賊」の慢心と共に、簡単に白状した北側の「山中賊」の「心中賊」の恐怖も、本稿では重要な意味を持つ。

但し、本質的示唆は言うまでもなく敵の頭の首を取る執念だ。歴史の螺旋状的展開を思わせる波状攻撃として、1974年の在日韓国人青年に由る朴大統領暗殺(未遂、夫人死亡。本文参照)に続いて、1983年10月9日に全斗煥大統領も訪問先のビルマで狙われた。国立墓地内の殉難者廟で閣僚多数を爆死した蛮行は、国際社会に対する朝鮮の挑戦と断じ得る。米国はクリントン時代の1994年初に朝鮮を、イラン・イラク・キューバ・リビア・シリア・スーダンと共に「無法(成らず者)国家」に数えたが、年央に死去した金日成の時代の彼の国は、「恐怖活動支援国家」の定義を超えた恐怖活動実施も目に余る。

本稿筆者は此の事件で韓国側への同情を禁じ得ないが、朝鮮の仕業と断定した彼等の「北傀」の表現が腑に落ちない。毛沢東政権も韓国を合法国家と認めず、米国の代理人の意で「南朝鮮傀儡政権」と呼んだので、冷戦時代の左様な蔑称はお互い様で一笑に付すが好いが、北朝鮮をどの国の傀儡と視たのが気懸りだ。若し中国を指したのなら全くの買ひ被りで、「枉担虚名」(徒に虚名を負う)と言いたく成る。『紅樓夢』第77回・「俏丫鬟抱屈天風流 美優伶斬情歸水月」に出た「担了虚名」(浮名を立てられた)は、賈宝玉との恋情を勸繰られ追放の身に成った晴雯が臨終の際に、其なら成る様に成れば好かったのにと言う後悔を込めて吐いた恨み言だ。中国は「実惠」(実利)志向に徹する今も、其の類いの「枉担虚名」の誤認を免れ切れていない。仮面を脱いで離縁するわけには行かぬ宿命であり、「中国脅威論」と同じ過大視され易い老大国の悲劇である。

- 56) 朝鮮の日本人拉致工作の全容は明らかではないが、越南統一の刺激で武力統一の意欲が湧き、中国の支持を取り付ける為に対韓顛覆工作を強化するのが契機だった、と言う説(重村智計。『現代用語の基礎知識、2004』、自由国民社、2004年、11頁)は、共産主義運動内の“左翼主義”小児病(註86参照)や「窮鼠」の冒険(註57参照)を思わせる。但し、欧州まで越境した行動力や日本語教育係の需要は、善悪は別として国際社会との「掛鈎」(連結。註85参照)の変種に思える。其の意味では此の国は国際社会に於いて、「孤児」と共に「畸形児」の性質も有る。

- 57) 「悪の枢軸」「成らず者(無頼)国家」のレッテルは、和製漢語の「極悪非道」を連想させるが、此の熟語に当る中国流の「窮凶極悪」(凶暴・邪悪の限りを尽くす。王莽を評した『漢書』の贊が出典。類義語に「窮極凶暴」「窮極凶虐」)は、「窮極凶悪」に直せば朝鮮の極貧 冒険の実態に合う。

- 58) 「寧贈友邦、不賜家奴」の出処は調査中だが、外国に屈した領土割譲を正当化する為の西太後の言とされ、蒋介石の対日譲歩の発想も中共側の文献で斯く記述されたりした。筆者が文化的見地

から興味を覚えたのは、「寧～不～」の発想と「贈・賜」の表現である。

事を決断する中国人の基準には、「両害相衡取其輕」(2つの害を天秤に掛けて其の軽い方を取る)と有るが、其に沿う様な「～より寧ろ～」は、消去法的「避惡」(「選好」と表裏一体の危険回避^{ヘッジ}。筆者の造語)だ。

一方、「贈・賜」は自他の優劣・親疎に関わらず、待遇表現として中国社会の原理の基軸の一部を成す「礼」の働きを思わせる。俱に「貝」偏が付く字形は「礼物」(贈り物)の字面・語意と共に、中国の礼法感覚の即物的側面を示唆するが、其々の右の「曾・易」は「滄海之變」(後出本文参照)と結び付けて吟味すれば面白い。

- 59) 『辞海』(上海辞書出版社)の語釈に拠ると、君主の側近の悪人を意味する此の熟語は、『公羊伝・定公13年』の「此逐君側之悪人」が原型だ。李商隱『有感』詩の「古有清君側,今非乏老成」,『新唐書・仇士良伝』の「如奸臣難制,誓以死清君側」が古例に挙げられたが、李は毛沢東が好きな詩人で『新唐書』は彼の愛読書だ(逝去直後の『人民日報』に載った蔵書写真は、其の「中国のマルクス・レーニン主義」の二重性を写して、『資本論』と『新唐書』の組み合わせだ)。

林彪は「文革」初期に此の成句も用いて、古今・中外の例を挙げ宮廷政変への警戒を唱えた(註21, 63参照)。歴史の鑑は最後に彼自身の「奸臣」(註179参照)の正体を照らし出したが、古典の引用は中国の言説の頂点と基盤に有る政治思想の影響力を思わせた。

- 60) 正面からの攻撃は防ぎ易く闇討ちは防ぎ難いと言う此の熟語は、多くの俗諺と同じく元曲が出典である。「槍」は近代以降に鉄砲の意が持たれ、現代の「火箭」(ロケット)も「箭」の派生語なので、漢語の戦鬪的激情を増した塞外の騎馬民族(註132参照)の影響が感じられる。
- 61) 第4次中東戦争の勝敗は諸説が有り、専門外の筆者は当然ながら断定し難いが、埃及の勝利は初期の奇襲効果ならともかく、敵の占領地拡大を許した最終結果から観れば鵝呑みに出来ない。
- 62) 阿Qの「精神勝立法」は造形者・魯迅の意図の通り、国民性の弱点として認識されているが、本稿筆者は其の体面に拘る自己欺瞞の部分と共に、字面が示唆する精神主義や勝利願望の側面にも注目したい。
- 63) 1966年5月16日に政治局拡大会議が採択した『中共中央通知』(通称・「5.16通知」)は、「文革」の思想的綱領に当る。8月8日に中央総会が可決した『中共中央の無産階級文化大革命に関する決定』(通称・「16条」)は、具体的実施指針の性格が強い。
- 64) 多数の観光客の命を奪った点が一緒であるが、即死しなかった者を1人1人至近距離から止めを刺す形で処刑した手口が特に残忍だ。犯行現場のハトシェブスト女王葬祭殿を訪れた事が有るだけに、筆者は其の古代文明の遺蹟との落差に戦慄を禁じ得なかった。猶、近年インドネシアで起きた特に質が悪い恐怖活動として、1998年の中国系住民に対する現地人の集団虐待が真っ先に思い浮かぶ。衆人環視の中の懲罰的輪姦の同時多発は、コソボ内戦中の「民族浄化」の大義を掲げた強姦よりも卑劣だ。
- 65) 張濤之『中華人民共和国演義(6)毛沢東時代の終焉』に拠れば、「4人組」逮捕直後の政治局会議で、党中央弁公庁(事務局)主任で要人警備の総責任者・汪東興は、「4人組」の政変計画や肅清予定者の一覧表を示し^か斯く述べた。「此処に居る委員の皆さんは、処刑予定の一覧表に載っているのです。彼等の反革命政変が成功したら、貴方たちは1人残らず断頭台上る事に成っています。」此の情報には全員が怒りに震え、お蔭で誰もが我先に態度を表明し逮捕が満場一致で支持された、と言う。(海江田万里監修、伏見茂・陳栄芳・陳宝慶訳、冒険社、1997年、141～142頁)

著者は中国新聞史学会副秘書長も務める教授だから、演義の体裁を取った記述とは言え完全な虚構とは考え難い。他の書物にも散見される(青野・方雷『鄧小平在1976 下 懐仁堂事変』, 春風文芸出版社, 1993年, 353頁)が、公式発表ではないし具体性も乏しい(青野・方雷の記録小説では、関係者の告発を基にした「在座的全得上断頭台!」の殺し文句が出たが、処刑予定表の提示云々は無い)ので、信憑性に疑問が付く。仮に事実であるならば、自ら陣頭指揮を執った政変を肯定する情報操作として理解できるが、処刑計画とは大義を虚構する細工であろう。党中央が「4人組」逮捕後に出した断罪の通達の中で、彼等に対する毛の非難が断片的に織り込まれたが、断章取義とする批判が江沢民時代に出た(青野・方雷『鄧小平在1976 下』, 267頁)。

尤も、処刑は林彪が提案し毛沢東が却下した王光美処刑の様な銃殺刑とは限らぬ。王の夫・劉少奇の軟禁後の獄死は、「軟刀子殺人」(軟らかい刀で人を殺す。真綿で首を絞める。陰謀で人を殺す[陥れる])の通り、実質が変わらない「軟処刑」と言える。其の陰湿な「殺人不見血」(人を殺して血を見せぬ)も、「兵不血刃」(註47参照)の変種に数えられる。故に上記の嚇かしは真偽はともかく、恐怖心を煽り自衛本能を擽る効果が十分有ったはずだ。

風説に拠れば、汪の前任として党中央弁公庁主任を務め、「文革」中「中国のペリヤ」と糾弾された楊尚昆も、動乱が成功すれば我々は1人残らず断頭台上に上る事に成ろう、と天安門事件の際に党中央軍事委員会のNo.2として言った。噂かも知れないし言葉の綾に過ぎぬ可能性も有るが、上記の台詞と共に被害妄想を誘発する既視感が窺われ、ルーマニア共産党党首の処刑への「冤死狐悲」(冤死すれば狐これを悲しむ)心理の理解に役立つ。

66) 汪東興等は「4人組」一掃の方策として、ペリヤ肅清の方法で会議を名目に極秘に逮捕しよう、と華国鋒に提案した(註65文献, 108頁)。曾て毛沢東はソ共党史の研究を提唱したが、中共が「老大哥」(兄貴)と尊んだ世界初の社会主義国家の歴史は、此の様に諸々の形で中国の鑑と成った。毛も1965年に上海で会議を名目に総参謀長・羅瑞卿を拘禁したが、ペリヤ逮捕劇が無くても老大国自身の歴史に手本が幾らでも有る。猶、羅瑞卿肅清と「4人組」逮捕は、先ずは悲劇で次に喜劇の形で現れる歴史の再演(本文・註12参照)に映る。

67) 「以血洗血」は『旧唐書・源休伝』が語源で、類義語には「以血濯血」(血を以て血を濯う), 「以血還血」(血を以て血の仇に還す), 「以血償血」(血を以て血を償う)が有る。英語の“Blood will have blood”(血は血を求める)も同じ発想だが、殺戮を以て殺戮に報いる事を主張する此の種の成句は、血腥さを嫌う日本人の感覚には馴染まない。「血債要用血來償(還)」(血の債務は血で償還せねば成らぬ)の熟語は勿論、「血債」の語彙も日本語には無い。

戦争の匂いがする「血債」は巡り巡って、円建て外債の異名・「サムライ債」を連想させるが、此の頃に有力視された人民元立て外債の愛称案・「熊猫(パンダ)債」は、敵を造らず憎みを買わぬ憎らしい微笑戦術の知恵が滲み出る。

猶、サムライ債の初登場は1970年12月の亜細亜開発銀行の発行だが、'87年に世界銀行が最初に発行した特別円貨債券の別名・「大名債」は、高度成長期の猛烈さに似合う「サムライ債」と比べて、泡沫経済期の優越感を漂わせた観が有る。此も筆者の個人的感想であるが、人民元立て外債が2004年中に世界銀行の発行で初めて世に出る見通しは、日中の約3分の1世紀ほどの発展時差の一例に成る。

68) 年1回開催の全人代の開幕日を調べた処、興味深い発見が有った。第7期第1~5回(1988~'92年)は3月下旬に集中し(其々25日, 20日, 20日, 25日, 20日), 第8期第1, 2回('93, '94年)の3月15日を経て、'95年以降は1回('97年の3月1日)を除いて全て3月5日と成った。

周恩来所縁のこの日付は定番として今後も定着していきそうだが、鄧小平が表舞台から身を引いた後に中旬へ繰り上げ、江沢民体制の完全自立の直後に実務派名宰相の名残を強調したのは、漸進的脱皮（拙論・「共産党中国の4世代指導者の“順時針演变（時計廻りの移行）”」（1） 理・礼・力・利を軸とする中国政治の統治文化新論」[本誌16巻1号, 2003年]参照）を映す変遷に思える。政治的祭祀の時機設定は此の様に深意を持つ場合が多く、其の符号の読解も演出者の心底を覗き得る効果が儘有る。

- 69) 「4人組」は1974年の林彪・孔子キャンペーンで、周恩来を「当代の大儒」として槍玉に上げた。極左派が貶す意で用いた「大儒」は本来、非凡な教養・度量を礼讃する言葉だ。本稿でも「周公吐哺，天下帰心」（本文参照）と呼応して、原義を以て其の名宰相ぶりを賞讃するのだ。一方、大戦・冷戦時代に跨ったソ共党首を「鉄人」の異名を付けたのは、本名を変えて自ら命名したStalinの「鋼鉄の人」の意と、共産党員は特殊な材料で造られた者だと言う彼の主義に因る。

剛と柔の対に映る2人は対立・統一の弁証法を現わす様に、独裁者の「裁」と「宰相」の「宰」は通じ合う。スターリンは靴屋の息子で周は官僚家庭の出身だが、後者の「刀筆」（筆で人を斬る。官吏や法曹者の辣腕の形容）は、靴屋や独裁者の刃物と同じ鋭さを持つ。

猶、東北亜細亜の共産圏内の相剋を象徴する類似の「天数」として、朝鮮民主主義人民共和国の建国（1948年）記念日（9月9日）と毛沢東の命日（1976年）の重畳も思い浮かぶ。逆に、中国の国慶節と韓国の建軍節が同じ10月1日である事は、国交樹立（1992年）後の2国の親和の必然性を思わせる。

- 70) 其の逆転勝利と「油断大敗」（「油断大敵」に因んだ筆者の造語）は、中共の指導者に貴重な経験と強烈な教訓を遺した様だ。毛沢東も「文革」発動の際に政治局での劣勢を懸念し、林彪の軍隊の力を借りて優位に立った、と言う観測が有る。鄧小平は葉剣英に「4人組」逮捕を提案する際に、正常の手続きを踏んで政治局会議で評決に掛け彼等を罷免するのを、逆に敵の陰謀に掛かった了いかねない「下策」とし、フルシチョフが中央委員会でマレンコフを倒したソ連の教訓には目を背けぬと言った（張濤之『中華人民共和国演義（6）』, 101頁）。

胡錦濤の総書記就任後に側近集団は江沢民の院政を打ち破る為、フルシチョフの成敗を研究し中央委員会と政治局の勢力図を分析した、と海外で報じられた。「他山之石，可以攻玉」（他山の石以て玉を攻むべし。出典＝『詩経・小雅・鶴鳴』）の伝統や、中共・ソ共の同根性を思えば、事実だとしても大袈裟な事ではない。一方、神舟号の名付け親で党中央軍委主席の江が有人宇宙飛行の発射現場に現れず、党首・国家元首の胡が民族の盛典の画龍点睛の主役と成った一幕は、海外の指摘以上の意味が有ろう。江胡の権力移行の順調や政治民主化の進展を示す事例として、シリーズ論考で後に改めて取り上げるが、歴史の既視感に重点を置く本稿で注目したい現象は、39年前のソ共の権力闘争でも有人宇宙飛行の出征式が暗示的役割を果たした事だ。

1964年10月11日の有人宇宙船 ポストーク 発射の直前、フルシチョフがクレムリンからテレビ中継で飛行士・カマロフ大佐に壮行の辞を送った処、第2書記・ブレジネフが側で突然割り込んで、地上に戻って来る時には私が迎えに行くよと口を出した。不快そうに其の場を後にした党首は2日後、軍・KGBに別荘から中央委員会臨時総会に連行され、劈頭の党中央書記・スースロフの問答無用の動議で解任された。当人も動転の余り挙手し満場一致の賛成と成り、歴史の笑い種を遺した。此的一幕を冒頭（8～10頁）に飾った張濤之の『中華人民共和国演義（4）文化大革命』（註65文献と同シリーズ、1996年刊行）は、新華社と外交部はフルシチョフ退陣の数日前の其の出来事から、ソ連指導部に地滑りの交代劇が起るだろうと踏んでいた、と言う。

自国の洞察を誇る最後の記述は後講釈の可能性も有るが、歴史物語や人間劇は好く然様な「細節」(細部)に鍵が隠れる物だ。林彪は1966年5月18日の政治局拡大会議で宮廷政変の危険を警告し(註21, 59参照), 蘇洵『辨奸篇』の「月暈而風, 礎潤而雨」(月に暈が掛かると風が吹き, 礎が湿ると雨が降る。事が生ずる前に必ず徴候が有る譬え)を引いた。彼も5年後に「奸」と辨別されたのは誠に歴史の諷刺だが、「蘇東波・蘇東坡」の連環(註44参照)と絡んで、蘇聯(ソ連)の件の異変の前触れは蘇東坡の父の此の命題を裏付けた。

1969年の党大会の主席(議長)団選挙で毛沢東は、林彪を主席に推し自分は副主席に成ると唐突に提案し、林は慌てて辞退した。此の逸話は演義小説の効用(註74参照)を示す様に、多くの「大説」(註127参照)に典型例として盛り込まれたが、No. 2に掛けた忠誠試験と捉えれば、上記のソ共の政争の一駒も1つの誘因に思える。林彪の自己防衛とブレジネフの自己顕示は、中国的老成と露西亜の単純を物語る事例に成るが、既視感や擬似既視感の再生・拡大が被害妄想の台頭・増幅に繋がる危険と共に、系列論考で詳解したい。

71) 1898年、明治維新に倣った「变法」(制度・体制変革)運動が起き、維新派の宮廷政変は守旧派の逆宮廷政変で百日足らずで頓挫した。翌年、梁啓超が「中華民族」の概念を打ち出し、民族主義の高揚を点火した。

72) 其を裏付ける資料は手元に無いが、1969年7月下旬、恰度15歳を迎えた筆者は当局の禁令を顧みず、「敵国放送」のVoice of America(中国語名 = 米国之音)を秘かに聴いた処、彼の歴史的出来事と共に此の諷刺的論評に接した。

同時代の中国人が其の出来事から受けた衝撃や、情報封鎖に愚弄された悔しさの証言として、内蒙古の生産建設兵団に在籍した或る紅衛兵が後年の自伝で斯く書いた。1969年の夏・秋の交に我々は烏梁素海畔に赴き、無類の情熱と盲従を發揮し血と肉で「修正主義を阻止する鉄鋼の長城」の建設に取り掛かった。後で知った事だが、其の年に米国の阿波羅が月に登った。地球の此方側で我々は未だ嬉々として、「刀耕火種」(焼き畑作業)を遣っていた。(曉峰・明軍編『毛沢東之謎』, 中国人民大学出版社, 1992年, 322頁)

本稿筆者は黒龍江省小興安嶺の営林所に行かされる前に其の情報を耳にしたが、中国最大の都会・上海に居ながら月面着陸の光景と意義が実感できなかった処に、当時の鎖国「防火牆」の厚さが窺われる。農村での住み込みを強いられた「知識青年」は其の時代でも、左様な原始的畑仕事を「修地球」(地球の修理)と自嘲した。毛沢東の「地球籍」維持の掛け声(註81参照)は所詮、敵と己の両方を知らぬ「空砲」(註79参照)に過ぎなかった。

猶、学術的に「火耕農業」と言う「刀耕火種」は、『旧唐書・嚴震伝』の「梁漢之間、刀耕火耨」が語源だ。其の記述は梁・漢時代の陝西省南部の有様だったが、毛沢東時代の同地域も原始的耕作方式から余り脱していなかった。陝西の中心・西安で2003年10月に起きた反日暴動の背景には、近代化・全球化の潮流に落伍した窮乏も指摘された(註37参照)が、中共開国世代の負の遺産と言わざるを得ない。逆に、内蒙古の草原が同月の有人宇宙飛行の離陸・着陸の舞台と成った事は、米国の有人飛行船月面着陸の頃の同自治区の生産建設兵団の「修地球」を思い起せば、大変な飛躍と言えよう。

73) 「孤立の枢軸」は筆者の造語だが、曾て「鉄(竹)幕」(鉄[竹]のカーテン)と呼ばれた共産圏や、今の所謂「悪の枢軸」諸国だけでなく、「栄光有る孤立」を志向せぬ国・地域も切り口に因っては、此の範疇に入れる。日本も孤島の属性や文化の特異性、一国平和主義の故に、「世界の孤児」の性質を一部帯びている。

74) 公式的に9月3日と成っている胡志明^{ホーチミン}の逝去は、実際は建国記念日の2日であり、越南^{ベトナム}は祝典と弔問が同日に出来ないと考慮し、意図的に死亡日を1日ずらした、と言う(張涛之『中華人民共和国演義(5)』, 14~15頁)。著者の経歴・立場(註65参照)や中国での許容(原典は1995年本国で刊行)から、事実無根の「国際玩笑」(飛んでもない冗談。天下の笑い草)とは思えないが、中国や世界では越南の公式発表が定説として認識されている。

小説より奇なる事実に基づく故「大説」は次元が高い、と筆者は別の文脈で仮説を立てた(註155参照)が、「大説」(註127参照)にも伝奇小説的部分が儘有る。毛沢東は野史小説の受け止め方として、「不可全信, 不可不信」(全て信じても行けず, 全く信じぬのも行けない)と唱えたが、正史にも「不可全信」の節が多い。

2000年南北朝鮮首脳会談の歴史的合意文書も、実際の調印は6月14日23時30分の事だが、「北朝鮮が縁起を担いで“4”が入っている14日を選び、15日に拘った為」、日付けは通称・「6.15共同宣言」の通りに成った(崔源起・鄭昌鉉著, 福田恵介訳『朝鮮半島のいちばん長い日』, 東洋経済新聞社, 2002年[原典=2000年], 111頁)。

歴史は然様に虚実皮膜の処が多いが、忌避理由の「四・死」の同音は中国語も一緒だ(註84参照)。司馬遼太郎は亜細亜的専制の根強さを説いた(註128参照)が、地文化の面では亜細亜的「言霊」も変り難い。復帰後の日本初登場の面会人に彼を指名した張学良(註155参照)も、張作霖が1928年6月4日に関東軍に爆死された後は自分の誕生日(6月3日)祝いを止めたが、親子の生死の日付の連環は演義・縁起の相関を示唆する。71年後の天安門事件の日付とも成った6.4は、中国語の語呂合わせで「路死^{ルース}」を連想させるが、2回の惨劇の形態と不気味に符合する。阪神大震災の死者数の6433も「三・散」の同音から、中国的感性でも不憫な印象が湧き易い。日本の政治の世界でも大安を選び凶滅を避ける傾向が強いが、縁起担ぎの動機には滅亡の既視感に囚われた被害妄想も有り得る。政治的「凶強」(強盛を図る)と文化的「凶吉利」(縁起を担ぐ)は、不安と健気^{けんげ}の同居が共通する。

75) 中国医療チームが胡^ホ主席の臨終に立ち会った関係も有り、周は逝去の情報を即時に把握した。直ちに毛と相談した結果、ソ連首相を避けるよう自分が先ず告別式に赴き、葬儀には李先念副総理を派遣する事に成った。訃報が正式に発表された(註74参照)翌日にハノイへ飛び、遺体との対面を済ませると直ぐ帰国した。因みに、葬儀は9月9日に執り行なわれたが、7年後の同じ日に毛沢東が死去し、此の日は東北亜細亜の2つの共産党国家の葛藤が絡む因縁の日と成った(註69参照)。

76) コスイジン首相はハノイを離れる前に、北京に寄って周恩来と会談する用意が有ると中国駐越大使に伝えたが、経由地のドゥシャンベ(タジク共和国首都)で同意の電報を受け、急遽東へ折り返した。東南亜細亜 中央亜細亜 東北亜細亜の迂回は、広くて狭い亜細亜の中の近くて遠い両国の離・合を示した逸話だ。

77) 中日平和友好条約締結の2日前(1978年8月10日)、鄧小平副総理(当時)は園田直外相に対して、中ソ友好同盟条約は早くに効力を失っているとの見解を正式に表明し、翌年4月の廃棄宣言の予定を披露した。此までに失効の実態を言明していないのは、当条約を重視していない事の証拠だ、とも語った。(外務省極秘公電。石井明・朱建栄・添谷芳秀・林暁光編『記録と考証 日中国交正常化・日中平和友好条約締結交渉』, 岩波書店, 2003年, 190~191頁)

当時の外務省アジア局長で、後に駐中国大使(1984~87年)を務めた中江要介は、此の一齣を振り返って次の様に述べた。日本側は平和友好条約締結の前提として、日本を敵視する中ソ友好

同盟の破棄を主張したが、中国側は此の理屈を素直に認めながら、廃棄の手続きを取ろうとせず、逆に露わにソ連を標的とする「反覇権条項」の挿入を強く主張した。左様な二重基準・二枚舌は許せないと言う日本の反論に対して、中国側は到頭「名存実亡」を唱え、日本側も残存期限の僅少や長年の中国の反ソ政策を勸案して、其を公式記録に止めて置こうとの事に落ち着いた。「しかし、しかし、である。この論法は、将来某年某月某日、中国が突如として日中平和友好条約の反覇権条約は今や“名存実亡”であると言い出し、覇権主義に走る余地を残してはいないか。約束はあっても(名存)、守らなくてもよい(実亡)、という手前勝手を是認した訳ではないことを肝に銘じておく必要がある。」(「日中平和友好条約締結交渉の頃 4つのエピソード」同上、299頁)

誠に鋭い見解ではあるが、其の認識を持ちながら何故もう少し待ち切れず敢えて「禍根」を遺したのか、と聞きたく成る。更に指摘したいのは、本当の有名無実化の危険は部分的「反覇権条項」よりも寧ろ、自ら容認した中ソ間の前例の様に日中平和友好条約の方ではないか。日本人は全体を断片の堆積と視る傾向が有りそうだが、常識の枠内で几帳面に思考・行動しがちな其の気質は、「超限戦」(註127参照)を生んだ中国の精神風土と対極に在る。

78) 『満江紅・和郭沫若同志』(1963年1月9日)。日本語訳 = 竹内実(武田泰淳・竹内実『毛沢東 その詩と人生』、文藝春秋新社、1965年、385～386頁)。

79) 毛沢東はニクソンとの会見で、革命を呼び掛ける自分の色々な標語を「空砲」と自嘲した。

80) 『周礼・地官』が出典の「国門」は、古代では都の城門や其を司る神、其を守る官を指し、今は専ら国の境・入口を表わす。毛沢東が「冒険主義」として批判した赤軍時代の「御敵於国門之外」(敵を国門の外に阻止する)戦略は、中共が江西省に創設した「中華蘇維埃(ソビエト)共和国」を基にしたので、日本語の「国境」と同じ地方を指す場合も有るが、東・南の国防要地(註134参照)を「東大門」「南大門」と言う形容の様に、全土の門戸が一般的である。

日本でも「開国」「門戸開放」の表現が有るのに、「国門」の語彙が無い事は、島国故の国境意識の曖昧さの証と取れる。島田雅彦の『美しい魂』(新潮社、2003年)の主人公は、先ず家庭内での背徳行為に因り家から勘当され、更に後で皇太子妃に選ばれる事に成った不二子との禁断の恋の所為で権力から海外に追放された。前者では親が「二度とこの家の敷居を跨がないように告げるつもり」(247頁)と有るが、後者の場合は「国の敷居」云々は出て来ない。因みに、「国門」と一對の「家門」は日本語にも有るものの、一家一門を表わす抽象的用法が多い様だ。

81) 1988年春節頃に上海の『世界経済導報』が論説キャンペーンを張り、中華民族の最も喫緊の課題は依然として「球籍」の維持だと主張した。改革・開放が9年経ったのに窮乏の解消に至らず、国民所得水準が依然として世界の最下位層に在る現状に苛立って、多くの識者が呼応し改革・開放の加速を呼び掛けた。

猶、50、60年経っても米国に追い付けない様では地球籍を剥奪されて了う、と言って毛が定めた米中比肩の期限は、中共建党百周年の2021年の前後に当る。其の頃を人口減少に入る転換期とした観測が昨今の持続高度成長の国家戦略の大きな根拠だが、国力が2030年頃に米国並みに成るとの論調が最近台頭した事は、謀らずも毛の強迫観念に合致する。

82) 「球籍」論争(註81参照)で改革加速の気運が高まる中で、鄧小平は趙紫陽等の発案に由る価格体系改革を決断した(註89参照)が、改定案が新聞に発表された途端に全国的に買い占め・取り付け騒動が起きた。強硬突破の計画は結局頓挫したが、金融機関が預金の引き出しに応じぬ非常事態の同時多発で、国家破綻の様相さえ呈した。本稿で論じた現代中国史の38年周期を念頭に置

いて眺めれば、建国39周年を目前にした此の試練は存亡に関わる分岐点と言えよう。

'66年6月の「文革」動乱に対して'88年8月の金融動乱を大寫しにしたのは、筆者の文学的想像・表現ではない。同月15～17日に北戴河で挙行された党中央政治局会議で、価格・賃金改革に関する初步的案が採択された。16日に中国人民銀行は通貨膨脹を退治すべく、建国来最大の幅で各種金利を引き上げる（9月1日より実施する）事に踏み切った。此等の政策発動を受けて「搶購潮」（換物騒乱）が一気に高まり、8月の通貨膨脹率は空前の23.2%に跳び上がった。9月26日に開幕した第13期第3回中央総会で、物価高騰・通貨膨脹を抑制する為の経済環境整備等の調整策が打ち出され、事態は漸く沈静化に向った。

83) 「文革」は党の内外の別に因り複数の始動点があった（註63参照）が、党の「喉舌」たる報道機関を使って全民に発した最初の総攻撃の信号は、1966年6月1日の『人民日報』社説・「掃除一切牛鬼蛇神」（妖怪変化を一掃せよ）と、同日夜の中央人民広播電台（放送局）で流した聶元梓の「大字報」（壁新聞）だ。後に首都紅衛兵5大領袖の1人に成った北京大学哲学学部講師の「造反」言説を、毛沢東は「全国初のマルクス主義の壁新聞」と褒め称え緊急放送を決めたが、「各地人民広播電台聯播節目」（各地放送局ネットニュース）で聞いた事が、色々な意味で本稿筆者の現代中国史研究の原点と成った。

84) 毛沢東が初めて天安門広場の紅衛兵大集会（1回目は百万人参加）に臨んだ年月日の1966.8.18は、語呂合わせで「一久禄禄発一発」（俸禄・賞禄が長続きし一儲けする）と講釈し得て、最高の吉日とも見做せるが、其の日を境に造反の気焰が爆発し災禍が猛烈に拡散した。8は「発財」（財成）の「発」に発音が近い故に、「一路発」や「発一路」を連想する168や816等、「吉祥数」組み合わせを多く派生しているが、其の附加価値に余分な金が掛かる「牌号」（プレート・ナンバー）を取り付けた車も、「車禍」（自動車事故）を免れ切れない。江沢民時代に流行した運転席の毛沢東バッジの御守りも、走行安全に必ず繋がる奏効は有るまい。

「吉祥数」が万能に程遠い事の例証として、太平天国の「命数」（寿命の数）も思い浮かべる。1851年1月11日の一揆で始まった其の反逆の終焉は、一般的に天京（南京）陥落の1864年7月19日（同治3年6月16日）とされ、捻軍が山東・徒駭河で敗北した1868年8月16日（同治7年6月28日）の説も有る（『辞海』『中国歴史紀年表』の註解）が、両方の旧暦・西暦が含んだ616、816は、中共が意識形態から礼讃して止まぬ其の激動劇の顛末を諷刺している様だ。

尤も、毛沢東の「文革」構想で言う「天下大乱を経て天下大治に達する」終息と見做すなら、其の「吉祥数」は不相応とも言い切れない。捻軍の山東戦敗に因る太平天国の完全終結の恰度120年後の1988年8月16日、建国後最大幅の金利引き上げ決定が通貨膨脹を加速させた（註82参照）。干支の2巡の経過は歴史の連環を思わせるが、抜本的外科手術に由り新たな「発一路」を導く起点とも見て取れる。

数の講釈の恣意の可能性を示す様に、史上最盛の版図を記録した王朝の唐と清（註171参照）は其々、縁起の好い618年と不吉な1644年（「四・死」の同音は日本語と一緒だ。註74参照）に発足した。更に翻って思えば、清に滅ぼされた明の1368～1644年の数は榮 枯の表徴にも見える。

85) 「接軌」と関連する中国語の「掛鉤」は、「連結器で列車を連結する」「関わりを持つ」「コネ（渡り）を付ける」「（為替レート）連動する」「（列車車輛等の）連結器」等の意が有る。中国が初めて自力で鉄道・（北）京 - 張（家口）線の建設（1905～09年）の責任者・詹天佑が考案した「掛鉤」は、長らく「天佑鉤」の名で中国の鉄道史の誇りとされて来た。其の創意工夫は『辞海』に

特筆されていないが、1912年に中国工程師（技師）会会長に就任した彼の存在感はやはり歴史に残る。初代鉄道技師の彼は百年後の中国の軌道を敷いた様に米国留学組だが、人民元と米ドルの「掛鉤」（連動）も「国際接轨」であり、逆に亜細亜金融危機を凌いだ要因の国際資本との遮断は其と合わせて、鉄道事情の落後で複線が未だ贅沢な中国の形而上の「双軌（複線）制」の一例に成る。

- 86) ソ連の若い党首を北京に向かせた処に、老大国・中国と古参世代の鄧小平の貫禄が發揮された。折角の晴れ舞台がぶち壊された鄧の憤懣は、武力鎮圧の決断の一因と成ったのなら筋違いだ、人情の常を考えれば察するに余り有る。因みに、日本語の「折角」は字面でも双方の激突 妥協の容易ならざる様に合致し、「台無しにする」は中国語の「拆台」（土台をぐらつかせる。失敗させる。梯子を外す）に通じる。

筆者が此の一齣に拘る理由は先ず、天安門事件の最大な転換点と観る故だ。歴史の回顧ではifの仮設は禁句とされるが、若し若者が血性に任せず知性で自制していたなら、戒厳・流血が回避された可能性も有ろう。レーニンが『共産主義内の「左翼主義」小児病』（1920年）で批判した「左派」幼稚病」は、ゴルバチョフの天真爛漫な「新思考」と軽率妄動の急進も一緒だったが、少壮派の焦燥と老大国の貫禄は系列論考で重要な対立軸に成る。

外交に於ける貫禄の効用を示す例として、翌年と同じ東北亜細亜を舞台にした一幕が連想される。「90年9月、自民党の当時の“実力者”金丸信が北朝鮮を訪れ、金日成の貫禄に食われたのと、あえて酒宴の後の深夜に交渉を持つという北朝鮮側の外交的数策に翻弄されたのとで、いわゆる“戦後賠償”を含む、朝鮮労働党、社会党、自民党の“三党共同宣言”に署名した。」（関川夏央『司馬遼太郎の「かたち」「この国のかたち」の10年』、文春文庫、2003年[単行本=2000年]、54～55頁）

自民党の二重権力構造で院政を敷いた金丸は側近から、「日本の鄧小平だ」「否、鄧小平が中国の金丸先生」と提灯を付けられたが、買い被りも「国際玩笑」（註74参照）に成れば流石に滑稽だ。幸田露伴は「支那人は老成で、日本人は若い」と断じた（系列論考で詳述）が、貫禄は別に国土の大小、歴史の老若と正比例しない。13年後の同じ9月17日に訪朝した小泉首相も、彼より1ヵ月若い金正日（註118参照）の交渉術に嵌まった。其の日は奇しくも金丸信の誕生日に当たるが、同世代の金日成（1912～94年）に意の儘に操られた金丸（1914～96年）の二の舞いの観も有る。究極の処やはり血は墨より濃く（註157、182参照）、滅亡体験の多寡が決定的であろう。国民総生産との別の「国民総精彩」（註102参照）には、此の様に道徳的に中立な智慧も有る。現代世界の戦国時代でも昔の中国と同じく、小国は「軟実力」で大国を負けし得る。日・中共通の「若・弱」の同音（中国語では俱にruo）は此处で、若さでなく初心さの脆弱を示唆する。

- 87) 張涛之『中華人民共和國演義（6）』に拠れば、鄧小平は葉劍英に「4人組」逮捕を提案する際に、政治局会議で罷免を動議する正攻法を下策と見做し（註70参照）、上策は華国鋒等の協力で電撃逮捕し政治局の承認を取る手だとしたが、此处では「中策」に注目したい。曰く、「貴方が軍事委員会を代表して軍隊を指揮し、問題を解決するよう行動する。更に服従しない者には、兵を擁して服従するよう迫る事だ。然し此の方法は、当面は問題は少ないけれど、逆に後が面倒だ。」（101頁）鄧の「4人組」逮捕画策の事実関係は後の系列論考で、上・中・下3本同時献策の伝統と絡めて追及したいが、物価体系改革や天安門事件平定に当たっても、彼は色々な得失の想定に基づいて、理想的解決から本意な対処まで複数の選択肢を用意したはずだ。

- 88) 「一念之差」は『景德伝灯録』が出典であり、一寸した考え違いで重大な結果・誤謬を引き起す

事を指す。「一念」は佛教用語として極めて短い瞬間・刹那を言い(註120参照),「~之差」の成語も其処に由来した。興味深い事に、日本語には此の警句は無く(漢語専門の『角川大辞源』でも未収録),代りに中国では馴染まぬ「一念天に通ず」が『広辞苑』に項を持つ(『角川大辞源』の「一念通天」と同じく出典不明)。

89) 鄧小平は1988年5月19日、人民武力部長(国防相)・呉振宇大將が率いた朝鮮政府軍事代表団との談話で、5つの関を突破し6人の將を斬る関羽の故事を引き合いに出して、價格体系改革の強行突破の決意を語った(「理順物価、加速改革」、『鄧小平文選』第3巻,262頁)。彼は「過五關斬六將」以上の困難を予想したが、実際にも急進が失敗と怨嗟を招き、1年後の同じ5月19日の首都戒嚴令布告の遠因の一部とも成った。謀らずも証明された先見の明は聞き手の選択にも現れ、其の伝授を受けた朝鮮も2002年夏に物価給与体系の大手術を敢行し、当年の中国以上の通貨膨脹が惹起された。

90) 1989年の和解から2001年の善隣友好条約締結の間の変化として、1994年の「建設的パートナー関係」の結成、2年後のエリツィン大統領訪中と「戦略的パートナー関係」への昇格があった。

91) 『紅樓夢』第6回・「賈宝玉初試雲雨情 劉姥姥一進榮國府」が出典の此の熟語は、権勢・經濟力が衰えた家でも並みの家より持っている意だ。鮮度に価値を置く日本流の「腐っても鯛」に対して、規模や構えを重んじる中国人の感覚は好く出る。毛沢東は清の満族作家・曹雪芹の此の名作を世界に誇る中国文化の至宝としたが、馬を尺度とし西域の駱駝が登場する処に、中華民族に於ける騎馬民族の側面や康熙の「華夷一家」論の定着の傍証に成ろう。

92) 「資源の枢軸」は筆者の造語で、主に中東産油国や露・豪・加・南アを指す。資源は「硬實力」の総合国力の中で、軍事力に比べて「軟」の形象も有るが、立派な資本や「王牌」(切り札)に違い無い。瘦せて瀕死に成っても馬より大い駱駝の底力(註91参照)を体現する様に、此等の資源強国は沙漠地帯に在ったり外部に裁かれたりしても、駱駝めく忍耐や其の「瘤」の蓄積のお蔭で不死身の儘だ。

米国も石油や金等の資源が豊富なものの、消費や準備に回す分が産出量を凌ぐし、資源需要国の筆頭とするのが相応しい。2003年に米国株式市場の復活(紐育ダウ工業株30種平均、ナスダック総合指数は其々25.3, 50.2%上がった)にも関わらず、米ドルは軟調(中国流では「疲軟」、註14参照)に陥り、対照的に豪・加・南ア等の資源国の通貨は突出した堅調(中国流では「堅挺」)を見せた(豪ドル対米ドルの年間上昇幅は38%)が、其の二極の対立軸を物語る事象に思える。

同年の世界商品相場の騰勢の要因の1つは、「世界の工場」・中国の「黒洞」(ブラック・ホール)的需要だ。毛沢東時代のお国自慢には「地大物博、人口衆多」があったが、国土の広大の故の物産の豊富も人口の過多に因り、相対的不足と認識されるに至った。經濟大国の日本は森林面積が国土の7割に上り、同14%の中国に比べて「癒し」の資源が多いが、工業・戰略資源では絶対的窮乏と言って能い。中・日がシベリアの天然ガス確保を巡って熾烈に争い、露が両国を手玉に取っている展開も、21世紀の世界史を占う動向である。

斯くして、資源の多寡と實力の強弱は一定の相関を持つ。「資源の枢軸」は「悪・欲の枢軸」と違って本来は無色だが、貪欲が膨らみ末に悪道へ走りかねない危険は、自然資本の「瘤」が累と成り国際社会の目の上の瘤(中国流では「眼中釘、肉中刺」)に化したイラクが示した。

93) 『荀子・勸学』が出典の「青出於藍而勝於藍」の下の句は、「氷水為之而寒於水」(氷は水が之を為して水より寒し)と言う。俱に弟子が先生を凌ぐ可能性を説く名言だが、嚴寒・出色の両義は正に「酷」の「冷厳・精彩」の両面だ。「神舟5号」は外觀こそソ連の「聯盟号」(ソユーズ)に似

ているが、中身は中国独自の物で性能も先発のソ・米より優れていると言った自讃は、正に「出藍之誉」(出藍の誉れ)の宣揚だ(註109文献30~31頁の他、多数の言説の中で特に目を引いたのは、2003年10月17日『人民日報』に載った中国載人航天工程総設計師・王永志の談話だ。[中国飛船]と題する長い取材録の相当部分は、ソ連モデルを超越した点の主張である)。

- 94) 有人宇宙飛行成功に関する日本の報道・論評には、此の日付の符合に注目した向きは見当たらない。筆者は土地勘・言語感・歴史鑑の効用を論じる他の論考で、此の事象を当世日本の中国観察の弱点の例証に挙げる予定だ。興味深い事に、『産経新聞』が翌月14日に伝えた此の事実に就いての指摘は、米国海軍大学のジョンソンフリーズ教授の論評だ。曰く、「中国の神舟計画は(略)一貫して人民解放軍によって独占的に進められ、象徴的にも同5号の回収が、中国初の原爆実験成功の記念日(1964年10月16日)に合わされた程だった。」更に意味深長な事に、中国の政府筋の報道も此の符合には余り言及していない。世界の「有人宇宙飛行倶楽部」入りを誇っても、「核倶楽部」と一線を劃す姿勢(註109参照)と併せ考えれば、意図の奥秘を意図的に包み隠す韜晦が見え隠れする。
- 95) 中国の月面探査計画は有人宇宙飛行の成功で弾みが付き、2010年代の実現を目指す発言が目立った。他の国は左様な意欲を見せていないので、2番手に成る見込みが高いが、此の事象は最盛期のソ連も敬遠した程の絶大な贅沢を浮き彫りにした。21世紀の世界史の主軸と成り得る米中の競合と「双赢」(共に勝つ。註109参照)、及び両国の政治文化や国民性の共通性も窺える。ブッシュが2004年1月14日に打ち出した月面、火星への有人探査(其々2015、'30年以降)、恒久的月面基地の建設の計画は、大統領選挙の支援材料にする政治利用の魂胆が見え見えだ。米高官は曰く、「火星探査車 スピリット 魂 の着陸成功を受け、野心的宇宙開発計画を公表する好機と受け止めた。」(『読売新聞』2003年1月9日夕刊)但し、世論の支持率が5割に止まった事から、8日後の一般教書演説では逆に一言も触れず了了だった。
- 96) 『水調歌頭・重上井崗山』(1965年5月)。
- 97) 『宣州謝朓楼餞別校書叔雲』。日本語訳=目加田誠(蘅塘退士編、目加田誠訳註『唐詩三百首』1、平凡社、1973年、184頁)。
- 98) 『広辞苑』の「こよなし」の語釈:「(“越ゆなし”の意か。よい場合にも悪い場合にもいう)程度がこの上ない。格別である。他と比べてことのほかに違っている。かけ隔たっている。甚だしくすぐれている。かけ離れてまさっている。甚だしく劣っている。かけ離れて劣っている。」
- 99) 1935年1月に貴州省遵義で開かれた中共中央政治局拡大会議。毛の正式な党首就任は其の後の事だが、軍事指揮の最終決定権が与えられた事は中共の公式見解の通り、事実上の党首に推された事を意味する。
- 100) 日本語訳=竹内実、註78文献、166~167頁。
- 101) 中共中央文献研究室編『毛沢東詩詞集』、中央文献出版社、1996年、54頁。作者の述懐を引いた解説は此の2句を、「他自以為頗為成功」(頗る成功したものと彼が自認した)と紹介した。他の作品の講釈には見当らぬ異例な自讃から、毛の偏愛ぶりが露わに現れる。猶、「以為」は「認為」と同じ「~と認識する(考える。見做す)」意の他に、思い込むや錯覚の意味合も有るので、当人の思い入れや選好を表わすのに恰度好かろう。但し、本稿筆者も墨と血で出来た此の対句及び詞全体は大変素晴らしいと思い、評伝・『毛沢東』(岩波新書、1989年)の結び(199頁)を此の一作で飾った竹内実の慧眼に敬服した。

- 102) 「国民総精彩」の訳し方の考案者は、米誌に最初に出た Gross National Cool の其と同じく不明だが、日本語の「精彩」と「生産」の発音の近似を生かした名訳と言える。此の2つの単語は中国語で其々 jingcai, shengchan と読み、発音面の接点が高いが、意味上の関連に因り受容・活用し易い用語である。
- 筆者が考案した中国流の対応は、「国民総産値」(国民総生産)と同音の「国民総産智」だ。Gross National Cool の「軟実力」の性質も、「酷」の冷厳・精彩の両面も、此の「智」に凝縮されている。中国の最大な資本と安全装置は「三達徳」(註43参照)の首位の「智」に他ならぬが、「共産・総産」や「産値・産智」の相関と絡めて系列論考で詳解する。
- 103) 『角川大字源』の解字に拠れば、「柔」は「形声。意符の木と音符の矛(うまれる意=乳)とから成る。生え出たばかりの木の新芽の意。ひいて、“やわらかい”意に用いる。一説に、象形指事で、木と、枝の撓んだ様に因り、しなやかな木、ひいて、“やわらかい”意を表すという。」「酷」の両面性と通じて「柔」も「矛+木」の字形の通り硬質性を秘めたとは、筆者の今風の恣意的講釈であるが、上記の解字の通り漢字は様々の解し方が有り得るし、更に我田引水に言えば、日本の準国技・柔道も名称の字面とは裏腹の不屈不撓の精神や力業に因り、「酷」の「果敢・精彩」の両面を帯びる。
- 104) 原文は「物質変精神，精神变物質」で、出典は「人的正確思想是從哪里来的？」(1963年5月)だ。人の正しい思想は何処から来るのかと言う標題の問いに対して、毛の自答は曰く、正しい認識は概して、物質から精神へ，精神から物質へ，即ち実践から認識へ，認識から実践へ，という様な往復運動を何回も経て初めて完成する。
- 此の文章が書かれた翌年の核兵器実験の成功も、然様な物質 精神 物質の変化と解釈できる。林彪が毛沢東思想を「精神的原子爆弾」と礼讃したのは、其の実績を考えれば誇張でもない。此の1節は『毛主席語録』「22 思想方法と活動方法」に収録され、「文革」中広く流布した。解放軍総政治部編の『毛主席語録』は、建軍38周年の1965年8月1日に世に出たが、20世紀中国乃至世界の最高発行部数(一説では50億冊)を記録し、中国の1つの時代を導いた此の書物の出現も、本稿で筆者が直観した中共の軍・国史の38年周期の例証に成る。
- 105) 複数の文献に出ているが、日本語版で特に詳細な記述は、楊中美著、青木まさこ訳『胡錦濤 21世紀中国の支配者』(日本放送出版協会、2003年[原典=『胡錦濤 中共新領袖』、2002年]48~49頁の件だ。
- 106) 周恩来と温家宝が天津南開中学を卒業したのは、其々1917、'60年の事である。
- 107) 出処不明の此の対の熟語は、「時勢造英雄」(時勢は英雄を造る)が先に有って、逆の「英雄造時勢」は後で派生したと思われる。「物質変精神，精神变物質」(註104参照)と合わせて、形而下(物質や環境) 形而上(精神や豪傑)の経路が窺える。
- 108) 日本語に無い「航天」(宇宙航空)は、大気圏内の飛行を表わす「航空」に対して、大気圏外・太陽系内の飛行を指す。用例に中央官庁の「航天工業部」(宇宙航空工業省)等が有り、スペースシャトルも中国語で「航天飛機」と言う。
- 109) 「国家画報」なる『人民画報』の2003年11号の特集・「中国首次載人航天飛行全記録」では、「世界航天載人倶楽部の第三個成員」(世界の有人宇宙飛行倶楽部の3番目の成員)を誇る記述があった(12頁)。「核倶楽部」に関して中国は一線を劃す立場を堅持して来たが、核保有が外交の有力な後盾と成る国際社会の現実には、当事国の主義主張に関わらず「倶楽」(俱に喜ぶ)の部類の区分を可能にする。猶、近年の中国が唱えている「双贏」(共に勝つ。win-winの訳語)の理

- 想は、「倶楽」と字・義の両方で対応する。
- 110) 「天遣」は中国でも使用頻度が低く、類義の成語の「神差鬼使」(神や幽霊が為せる業)の方が馴染まれるが、正義の使者を気取る米国の「天兵」を皮肉の意味も込めて、此処で使った次第である。
- 111) 「天遣洪荒」の用例として、回首20世紀 大型紀実叢書の「凶年災禍巻」(陳剛編、北岳文芸出版社、1993年)の題名が有る。日本語に無い「洪荒」の語釈は、『角川大宇源』の「 広大でとりとめないさま。〔千字文〕“天地玄黄，宇宙洪荒”。 宇宙の初め。太古」に比べて、『辞海』の「謂渾沌，蒙昧の状態。也指遠古時代。謝靈運『三月三日侍宴西池』詩：“詳觀記牒，洪荒莫伝。”」は、負の形象が若干強い。
- 112) 朱建栄は『毛沢東のベトナム戦争 中国外交の大転換と文化大革命の起源』(東京大学出版会、2001年)で、中国側の文献を駆使して同論文の意義や内幕を検証した(459～504頁)。党中央の指示で総参謀部「写作組」(執筆グループ)が書き、林彪は署名に同意したものの発表前に目を通さず、因って海外で言われた「林彪・羅瑞卿論争」は実在しなかった、と言う件が特に印象的である。本稿の論旨に絡んで論評をすれば、林彪の校閲拒否は建国後の厭戦情緒(註146参照)の現れとも取れ、林・羅の軍事戦略を巡る論争の幻影は海外の中国観察家の無知と考え過ぎの好例だ。
- 113) 「農村包围城市」とは毛沢東が唱え、建国前の内戦・抗日戦争で奏功した戦略である。林彪署名論文で其を敷衍した図式は、「世界の農村」の亜細亜・アフリカ・ラテンアメリカ対「世界の都会」の西欧・北米だ。
- 114) 毛沢東等は「小米加步枪」(粟に歩兵銃)を以て、建国前の中共軍の兵糧・装備の窮乏を形容した。「大米・白面」(米・[上等な]小麦粉)に劣る「小米」さえ無く、草創期には南瓜の汁で凌ぐ時があったが、飛行機・大砲を持つ敵に勝ったのが彼等の自慢だ。因みに、毛が一目に置き建国初期(1954～58年)に総参謀長を務め、初代10大将の筆頭であった粟裕大将の氏名は、粟中心の食糧事情「温飽」(衣食の基本的保障)の解決「小康」(一応の余裕)の進化の表徴に成る。朝鮮戦争で中共軍の主食は「炒面」(糗炒。麦焦がし)で、保存食の故に乾燥無味で食傷気味やビタミン不足を起したが、雑穀が一部混じったものの「白面」へ昇格し肉も入った事は、一歩前進と言えなくもない。
- 115) 中共軍の表徴として建国前の「粟+歩兵銃」に対して、建国後の場合に「高射砲+核兵器」を挙げた理由は、先ず、兵糧の基本的保障の実現に因って兵器の強化に重点が移った事や、「鉄砲から政権が生まれ」(毛の言)た後に国防が軍の至上命題と成った事だ。
- 鉄砲の次世代の兵器の代表格に高射砲を選んだのは、装備や待遇の飛躍的改善を言う俗語の「烏槍換砲」(猟銃が大砲に換る)と共に、朝鮮戦争で制空権の無い故に犠牲を払い、越南戦争への出兵支援の主力が高射砲部隊だった事を念頭に置いたのだ。因みに、粟裕の総参謀長(註114参照)が1958年10月に解任されたのは、其の直前の金門島砲撃を契機とした空中戦で国民党軍に大敗した事が、空軍に力を入れて来た彼に響いた、と言う観方も有る(山田辰雄編『近代中国人名辞典』、霞山会、1995年、737頁。執筆者=平松茂雄)。
- 「高射砲+核兵器」の組み合わせは通常兵器と究極の大量破壊兵器の対であり、原始戦法から原子時代への脱皮を反映する意味も有る。彭徳懐元帥は「你有原子彈，我有山藥蛋」(敵に原子爆弾有り、我にジャガ芋有る)と、「蛋・彈」の語呂合わせを以て草創期の強味で米軍に対抗できると唱えたが、其の時代錯誤的精神主義に対して中国は毛沢東時代から、「兩彈一星」(核弾

[原子爆弾・水素爆弾]・戦略導弾^{ミサイル}、人工衛星)の開発に力を入れた。

中共軍の「鉄砲 政権奪取」の歴史から推し量れば、中国の核兵器保有に世界制覇の意欲を嗅ぎ取るのも無理も無いが、国際社会の一員に成る前と成った後の本質的差は無視できない。21世紀初頭の「^{コンピューター}電 脳 + 宇宙飛行船」の対の共通項も、道義的に「^{グローバル}全球化」時代に適応し軍事的に「兵不血刃」(註47参照)を図る両重の平和目的だ。

- 116) 旧日本軍の兵器と中共の歴史の繋がりとして、陸軍の主力戦車・「89」式と解放軍の'89年の天安門事件での戦車出勤も思い浮かぶ。20歳で学徒出陣し翌1944年に満州に渡り、四平の陸軍戦車学校を卒業し牡丹江の戦車部隊に入った司馬遼太郎は、「89戦車」に思いを巡らす言説が多く有る(「戦車・この憂鬱な乗り物」「戦車の壁の中」「石鳥居の垢」[『歴史と視点 私の雑誌帖』, 新潮文庫, 1980年]所収)。栃木県佐野で敗戦を迎えた彼は、敵が九十九里浜に上陸すれば自分たちは戦車と共に南下するが、其の際に北上の避難民が街道を埋め尽くしているはずだと考えて、参謀本部から来た若い大尉に対応の方針を訊ねた処、暫しの沈黙の後「轢き殺してでも行け」と言われ、日本軍は遂に国民を守る軍隊ではなかったと深い絶望感を味わった(「石鳥居の垢」, 同上, 89~90頁)。市民・学生へ問答無用で猛進した中共軍の戦車の姿は、内外で尋常ならぬ衝撃と失望を惹き起したが、是非・善悪に関らぬ戦争や軍隊の冷厳さは、上記の一齣に既視感が有るわけだ。
- 117) 彭徳懐は1950年12月1日、38軍の軍団長・梁興初、政治委員・劉西元宛での電報で、三所里・龍源里で国連軍の撤退を阻止した同軍の死守と戦勝を表彰し、最後に「中国人民志願軍万歳! 38軍万歳!」と結んだ。異例の「万歳」は数人の副司令官の異論を招いたが、彭は此の至高の賛辞を変えなかった。(王樹増『中国人民志願軍征戦紀実(上)』, 解放軍文芸出版社, 2000年, 353~354頁)此の種の逸話の独り歩きし易い性質も有って、長い間「38軍万歳!」は内外で毛沢東の言として伝えられたが、故郷が至近距離に在る彭と毛は俱に英雄主義者と激情家だから、語り手に関らず中共軍の本質を象徴する価値は変らぬ。
- 118) 年齢30歳前後、飛行経験800~1000時間以上が宇宙飛行士に成る条件とされたので、選抜時に32歳で有人宇宙飛行まで1350時間の戦闘機操縦を経験した楊は、最適の年齢層に在ると言う(註109文献, 24頁)。飛行直前まで候補に残った「最終梯隊」の3人(註121参照)は、奇しくも37, 38, 39歳であった(『人民日報』2003年10月16日)が、其々核兵器実験成功、越南戦争支援開始、「文革」勃発の年に生まれた事は、象徴的意味を持つ。

因みに、空軍降下部隊(中国流では「空降兵」)教官出身のガガーリン少佐は、「ソ連英雄」の殊勲を立てた時には27歳の若さだったが、7年後ジェット機の訓練中に事故死した。

ソ連の初有人宇宙飛行の23日後の1961年5月5日、米国は軌道飛行の前段階なる有人弾道飛行に成功した。人間容器^{カプセル}に乗って大気圏外の185kmの高空に昇ったシュバード海軍中佐は、3700時間(内半分はジェット機に由る)の飛行経験と2人の娘を持つ37歳だった。単純な比較は無意味かも知れないが、今次の中国の人選は米国基準に近いと思える。

米国の人間「飛弾」(ロケット)発射の一齣は系列論考でも取り上げるが、中国の有人宇宙飛行に投影した別の既視感として、7人の宇宙飛行士から最終に3人が残った事や、15分弱の初挑戦に全米が興奮の極みに浸り欧州記者が複雑な心境に陥った事(『朝日新聞』1961年5月6日夕刊)が有る。東京都知事・石原慎太郎や宇宙航空事業団理事長・山之内秀一郎等は、中国の成功は40年前のソ・米の焼き直しに過ぎぬと冷やかに観たが、曾ての米国に抱いた欧州の負け惜しみも感じる。日本政府は2004年1月29日、総合科学技術会議(議長・小泉首相)の半年前の「当

- 面放棄」の結論を覆し、独自の有人宇宙飛行の早期実現を目指す方向を打ち出したが、国産ロケット発射の連続失敗と中国の躍進に対する焦りが丸見えだ。
- 119) 「黄金分割」は『広辞苑』の説明の通り、「(golden section) 1つの線分を外中比に分割すること。(5 - 1) : 2 (ほぼ 1 対 1.618) 長方形の縦と横との関係などを安定した美感を与える比とされる。」外中比を与える数の「黄金数」は、 $(5 + 1) / 2$ 又は其の逆数だ (同) が、1 対 1.618 か 0.618 は余り有名なので、片方の 0.382 は影を薄めがちだ。
- 猶、西洋の黄金分割の数値は奇しくも、語呂合わせで中国の「^{ラッキーナンバー}吉祥数」に成った 618 (註 84 参照) と吻合する。
- 120) 『広辞苑』の「弾指」の語釈は、「(タンジとも) [仏] 許諾・歡喜・警告のため指をはじいて音を出すこと。大鏡道長“いかに罪得侍りけんとて、- はたはたとす” 極めて短い時間。わずかの間。弾指頃(きり) “- の間”』。『辞海』の「弾指」では其の両義の順は逆と成り、の「比喻時間短暫」の定義に続いて、仏経では 20 念を 1 瞬とし 20 瞬を 1 弾指とした、と言う説明や出所(『翻訳名義集・時分』)も付いている。刹那を表わす佛教語の「一念」(註 88 参照) は弾指の 400 分の 1 に当るが、指を凌ぐ心の動きの速さを思わせる 2 つの物差しは、「弾指」の「弓 + 単」「才 + 旨」と「念」の「今 + 心」の象徴性と合わせて、後に展開する「超限戦」論の示唆に成る。
- 121) 「梯隊」は軍隊用語として行軍・戦闘の際の梯形編隊・梯陣を指し、最近幹部集団の各世代に替える用法も多い。漢語専門の『角川大辞源』にも無い此の言葉は、日本語では対応が付き難い。強いて言えば「梯団」に近いが、大体 1 桁に限る範囲は度を重ねる飲食の「梯子」と妙に通じる。
- 122) 楊利偉は 1997 年に 1500 名余りの戦闘機操縦士から抜きん出て、初代宇宙飛行士の 14 人の 1 人と成った。今次の飛行の直前に各種のテスト (特に心理テスト) で 1 位、最終候補 3 人から一頭を抜いた (註 109 文献, 26 ~ 27 頁) 猶、残留組の聶志剛・聶海勝が肩を並べて、「梯隊」の文字通り彼の後に付いて飛行船に向う場面は、競合相手の「倶楽・双赢」(註 109 参照) の光景として筆者には印象的だ。
- 123) 第 1 回連載の原稿で「この土^{くに}のかたち」と記し、編集長の反対で「^{くに}国」に変えたわけだが、司馬遼太郎の着想が興味を引く。Nation でも State でもなく日本の Land を書いてみたい、と彼は構想の段階で語り、更に 1986 年央の手紙で斯く書いた。「明治の最初は Nation です。憲法が出来て State になります。それでもサラ地に国家をつくれれば、アメリカみたいに State のみになります。日本でもフランスでもスペインでも、Nation がふるしき (もしくは土壌、土壌菌) になって State ができています。ときどき、よき Nation 成分があらわれ、ときどき悪しき Nation 成分があらわれます。悪しき Nation 成分とは、小生によれば昭和 10 年 ~ 同 20 年の歴史です。早く、江戸期を書きたき思いなり。」(関川夏央『司馬遼太郎の「かたち」』, 36 ~ 37 頁)
- 124) 拙論・「現代中国の統治・祭祀の“冷眼・熱風”に対する“冷看・熱読” “迎接新千年” 盛典を巡る首脳と“喉舌”の二重奏と其の底流の謎解き」(『立命館言語文化研究』14 巻 1 号・3 号 [2002 年] 連載) 参照。
- 125) 「感覚良好」は報道の文章化に因って、「我感觉良好」と成った場合も有る (註 109 文献, 12, 13 頁)。実際の音声とは違うものの、中国的自我意識が好く出た主語の付け方だ。其は医学監督医師への応答であった (13 頁) から、中国的人本主義の「己身中心」(我が身中心) の「身本主義」(註 164 文献拙稿参照) の発露とも思える。
- 126) 彼の愛読者を公に自認した首相は橋本龍太郎・小淵恵三 (佐高信の発言 [井上ひさし・小森陽一

編著『座談会 昭和文学史3』,集英社,2003年,332頁])の他に,古くは中曽根康弘,近くは2003年に彼に政界引退の引導を渡した小泉純一郎も居る。其の官民の「困った時の司馬さん頼み」現象(関川夏央の発言。同,331頁)は,同時代中国の指導者・知識人を魅了した前清3帝伝記小説熱(註165参照)とは,同工異曲の好一対である。

- 127)「大説」は『広辞苑』『角川大辞源』『辞海』の何れにも出ていないが、『礼記・表記』が出典の「大言」([天下国家]の大事に関する言説)に近い。対概念の「小説」は,取るに足りない詰まらぬ議論と言う『莊子・外物』の原義から,世間話・怪談・寓話・隨筆の総称に転じ,更にnovelの訳語に用いられたのだ。

本稿の論旨に関わる「大説家」の用例として,藤井巖喜の「石原慎太郎=大説家」説が思い浮かぶ。『石原慎太郎 総理大臣論 日本再生の切り札』(早稲田出版,2000年)の此の件(224頁)は,小説家出身の論客・政客に対する著者の期待を表わす妙味が有る。国際問題分析家・藤井は,『テロから超限戦争へ 全ての場所が戦場となる』(廣済堂出版,2001年)の中で,自ら参加した『『超限戦』研究会』の存在と活動を披露したが,此の「超限戦」は本稿で後述する9.11奇襲の既視感の重要な一部だ。問題の『超限戦 両個空軍大校対全球化時代戦争と戦法的想定』(限界を超える戦争 グローバル化時代の戦争と戦法に対する2人の空軍大佐の想定)は,中国空軍専属作家の喬良・王湘穗に由る(解放軍文芸出版社,1999年。日本語版=坂井臣之助監修,劉琦訳『超限戦 21世紀の「新しい戦争」』,共同通信社,2001年)が,1952年生まれ藤井と同世代の筆頭著者・喬は,出生の1955年に芥川賞を獲った石原と同じく,小説家として名を馳せた後「大説」の領分に進出したのだ。

其の難解な軍事理論著書を読み解くに当たって,小説・「大説」を跨ぐ複眼が必要であるが,20世紀の中国と日本に於ける然様な二刀流の大家は,其々魯迅と司馬遼太郎が思い当たる。司馬に対する世紀末日本の指導者の傾倒(註126参照)を端的に象徴する様に,2000年4月1日深夜に小淵首相が脳梗塞で倒れる際,司馬作品に拠るNHKスペシャル『街道をゆく』の録画を観ていた。一方,毛沢東は「文革」発動の決断に際して魯迅を精神の支柱とし,臨終前に最後に接した書物も魯迅の作品であった。

魯迅は中共に同情的で赤軍の長征を描く小説も構想したと言うが,不発に終わったのは司馬並みの軍事的思考力(註155参照)の欠如も一因と思える。世相や言説,歴史から国民性を掘り下げた魯迅と対照的に,司馬は政治・経済面の国家の大計にも目を配った。彼は日本近・現代史の40年周期を指摘し,日露戦争終結の1905年の日比谷公園焼き討ち事件(9月5日)に国を誤らす「鬼胎」を見た(『この国のかたち』第3回・“雑貨屋”の帝国主義)。其の「魔の40年の季節への出発点」は間も無く百周年を迎えるが,中国現代史の起点と成った1919年の5.4運動も,妥協的講和に憤慨した若者の焼き討ちなので,両国の大衆の民族主義が昂ぶった今や其の洞察は甦って来る。本稿では2国の前世紀最大の小説・「大説」家を照射の光源に,地政学と地文化学(註155参照)の交差点で温故知新を試みたい。

- 128) 其の膨大な言動から例証を一々挙げる余裕は無いが,李登輝との意気投合や「日本は必ずアジアでなくともよい」論が先ず思い浮かぶ。筆者の興味を特に引いた彼の其の辺の観方は,関川夏央『司馬遼太郎の「かたち」』に記された談義だ。彼は共産党時代も含む中国の政権の垂細亜的専制の伝統を喝破しながら,垂細亜で其の伝統を脱した例外的指導者として李登輝と朴正熙を挙げ,其の無私の精神は日本の近代化の影響でもあると語った(122頁)

本稿筆者は司馬遼太郎を尊敬する(註127参照)だけに,江沢民も太刀打ちできぬと海外で観

られた李登輝の複雑さを見抜き切れなかった処に遺憾を覚えた。所謂「流民の国」の徹底的現実主義の本質を把握していただけに、尚更心残りなおさらが強い。但し、其は日本の親台派に多い植民地統治への郷愁と異なり、理想主義に因る心情的共鳴として理解したい。李・朴も近代日本も結局は亜細亜の専制の伝統から抜け出せなかったと筆者は観るが、其の伝統打破の希望を込めた「脱亜」論には頷ける。但し、私心無き理想主義者はそもそも出難いだけでなく、ゴルバチョフの例を考えても現実には甘くない。本稿で触れたノーベル平和賞の当否にも絡むが、彼が1990年ノーベル平和賞を受賞した直後のソ連解体の決断は、後世の歴史では必ずしも評価されないだろう。

- 129) 司馬遼太郎は編集者に会う度に相手の出身地を推理し、当初は好く当たったのに1980年過ぎぐらいから推理できなくなった、と言う事象を挙げて関川夏央は、地方文化の色彩カラが薄れたと語った(註126文献, 330～331頁)。

此の逸話は司馬の土地勘・言語感・歴史鑑の三位一体をも示したが、初対面の人に出身地を訊ねる流儀は中国でも多い。毛沢東や周恩来は広域の省だけでなく県まで訊く場合も儘有ったが、其ほど郷土は人間の遺伝子や背景の肝心な一部だ。因みに、彼等が其の次に家族の構成と職業を好く訊いたのは、より即物的人物像を探る意図が根底に見え隠れする。

「人の虚勢や虚像を見破る眼」(註123文献, 64～66頁)で有名な司馬遼太郎は、挨拶に来た『文藝春秋』の新任編集長に射竦める様な目で見詰め、当人に「要するに人物評価をしている(略)。採点されている」気分を味わさせた(137頁)。林彪の「毒」(鋭い)眼(註141参照)にも通じるが、中国語の「打量」は正しく値踏みまさする様に人を見詰める事に言い、其の字面の「兵+商」の複合シリーズは系列論考で重要な意味を持つ。

- 130) 「漸退」は「漸進」の反対語で、日本の静かな衰退の実感に基づく本稿筆者の造語だ。

- 131) 和製漢語の「飛行士」「操縦士」は、中国語で其々「飛行員」「駕駛員」と言うが、「戦士」「兵士」「士官」「力士」等の言い方は両国が共通し、中国語では職業や職位等を表わす「士」が多く(例えば「護士」「看護士・看護婦」,「中士」[二曹], 学士),「闘士」等の使用頻度も日本語より高い。両国の古代の「士農工商」の序列で首位を占めた「士」は、中国では武士より文官の意味合いが圧倒的に強いが、20世紀の戦乱・抗争の中でも屢々引用された『礼記・儒行』の「士可殺不可辱」(士[知識人]は殺しても構わぬが、辱しめては成らぬ)の様に、文武を問わず「士」は字形通り「志」の核心を為す。

其の意味では両国とも精神史の頂点に「士・志」の伝統が有るが、中国語に於いて此の2字は同音ではない。深読みをするなら、「士」と同音の「史・詩・施・事」等は、「士」の資質(教養や行動力等)を示唆し、「志」と同音の「知・智・治・致」は、理想と実践、仁と智、知性と治世の相関を反映する。

- 132) 司馬遼太郎は1941年(18歳)旧制弘前高等学校を受験し、失敗して大阪外国語学校の蒙古語科に入学した。露西亞文学や『史記』の列伝を愛読し、「塞外の民族」の集団としての運命に関心を持った。(大河内昭爾編「司馬遼太郎年譜」, 井上靖等編『昭和文学全集18』, 小学館, 1987年, 1061頁) 其の司馬遷と草原の対は、武田泰淳が輜重補充兵として1937～39年に行かされた華中で構想し、同時期の1943年に刊行した評伝・『司馬遷』(日本評論社。5年後に『史記の世界』と改題し、青社社より刊行。後に再び『司馬遷』に戻った)の論考対象の読解にも示唆的だが、彼の心酔は日本人の騎馬民族の一面及び遊牧精神の衰退をも思わせる。因みに、本稿筆者が愛読する司馬遼太郎の作品には、名高い『この国のかたち』(『文藝春秋』連載, 1986～96年)や巨編歴史紀行・『街道をゆく』(『週刊朝日』連載, 1971～96年)と並んで、『草原の記』(新潮社, 1992

年)が特に感銘が深い。

猶, 同じ頃の大阪外国語学校の印度語科に陳舜臣が在籍した事は, 言説に於ける宇宙情念の中・印の強烈と日本の稀薄の違いや, 中・日の遊牧精神の濃淡と結び付けて考えたい。

133) 『史記』や塞外の民族への傾倒(註132参照)に似合って, 其の筆名の寓意は「司馬遷」に「遼」(遙かに遼し)である。彼は本名・福田定一に羞恥と嫌悪を長らく抱き(「自分の作品について」, 『國文学』1973年6月号。『歴史の世界から』[中公文庫, 1983年]所収, 307頁), 其は戦争の記憶が付き纏う所以だと推測されるが, 文筆活動が始まった翌年の1956年の筆名の登場は, 恰度同年の『経済白書』が宣言した「もはや戦後ではない」時代の暁の出来事だ。

134) 唐以降「安東」の名称は延々と踏襲され, 「安撫・平定」の語感を嫌ってか(註155参照)「丹東」に変えたのは, 意外と遅い1965年の事である。明初に設置された中越境界の国防要地・鎮南関は, 先ず1953年に「睦南関」と改名し12年後に「友誼関」と成った。昔の宗主国意識と訣別する意志表示として有意義な転換だが, 皮肉な事に中朝は改名の直後から不仲が表面化し, 越南も其の2度の配慮に関わらず中国と反目した。

135) 「神の国」は森喜朗首相の失言。就任早々の2000年5月, 「日本は天皇中心の神の国」と言って世論に敲かれた彼は, 後に記者会見で照れ隠しの為か, メモ用紙を示し今日は紙の話をすると駄洒落を言った。当世の日本政治家の存在の堪え難い軽さを示した一齣だが, 美智子皇太子妃の基督教信仰が皇室の神道の伝統に抵触した故の受難(所謂1963年の「宮中『聖書』事件」)を思い起すと, 「神の国」も一理が有ろう。

両国に多い語呂合わせの原理に即して言えば, 中国語で同音の「神・聖」も中国の上部構造の頂点であり得る。猶, 1990年代以降の指導部は上海閩で固まっていると言われたが, 上海の略称「申」は「神」の字形の半分を為し発音も同じだ。

136) 「意志」と「意思」は日本語では混同しがちだが, 中国語では発音も意味も異なり, 後者は意味・主旨の意が強い。

137) 天文学的数字の出費は貧困層が多い中で物議を醸し出し, 当局は経済的付加価値を強く主張したが, 中国的「名利双収」(名・利を俱に収める)願望を考えれば不思議ではない。

興味深い第三者の報道として, 『ニューズウィーク』日本版の「中国の極秘“宇宙野菜”計画」(2003年10月29日, 20~21頁)に注目したい。重力低下や地球の宇宙磁場, 宇宙線の影響で突然変異を起し, 巨大化や成長の加速, 栄養の増加等が期待できるとして, 数十種の種子・苗木を積んで行った事は, 「1畝の巨大胡瓜」計画の様に「異想天開」(奇想天外)と思われようが, 「民以食为天」(民は食を以て天と為す)の伝統に沿った「天・食」の結合だ。同記事の副題は「有人宇宙飛行を成功させた“エンジニア指導者”の果てしない野望」と言うが, 日本語の「胡瓜」(中国語=黄瓜)の字面は奇しくも其の集団の首領の姓を含める。

日本の衛星発射基地・種子島(鹿児島県)の名や, 宇宙飛行士が天外から無重力状態を詠む俳句を首相に贈った逸話が連想されるが, 此の報道に登場した「飛鷹緑色食品公司」の会社名も象徴的だ。「飛鷹」と「緑色食品」(無添加自然食品)の対は, 楊利偉が宇宙飛行中に持ち上げて見せた国旗と国連旗の組み合わせと同じく, 国防と平和, 兵器の進化と「慈化」(註15参照)に関わる。其の論考は後に譲るが, 筆者は台湾産の茶の種子の搭載に引掛かった。政治的演出として当然の事であるが, 茶なら大陸には名品が数々有るので, 其の出番は和製漢語の「茶番」の味も漂った。

138) 単に「綏中県」と記す報道が多いが, 彼が最初に登場した『人民日報』2003年10月16日の複数

の記事では、其々「遼寧省綏中県」「遼寧葫蘆島市綏中県」と紹介された。

- 139) 葫蘆島の地名は湾岸で突出した葫蘆風の形が由来だが、日本語で「葫蘆」より馴染み度の高い「瓢箪」の熟語を此処で借用したわけだ。「瓢箪から駒が出る」は中国語で対応し難いが、意外の方向から意外のものが現れる事に近い比喻として、「半路上殺出個程咬金」(途中で程咬金が飛び出る)が思い浮かぶ。李世民時代の人物で『隋唐演義』にも登場し、斧を揮りかざす蛮勇で巷に有名な程咬金は、兎角首を賭ける『説岳全伝』の牛阜(註142参照)や『水滸伝』の李逵(系列論考で後述)と三重映しに成るが、葫蘆島 瓢箪の延長線に出た駒を「千里駒」に敷衍したのは、「千里馬」(註160参照)と類義の此の美称(出典=[清]趙翼『陔余叢考』)と遼西戦場との所縁(註158参照)の所以だ。
- 140) 中共が公式に発表した「解放戦争3大戦役」の戦果は、遼瀋(遼西・瀋陽・長春)戦役は敵軍47万人殲滅、平津(北京・天津・張家口)戦役は殲滅・改編52万人(約半分が改編)、淮海(徐州中心の山東・河南・江蘇)戦役は殲滅55万人、と成っている。最も重要な「殲敵」数(註16「傷其一指、不如斬其一指」参照)では淮海戦役が一番であるが、遼瀋戦役は敵の精鋭が多い(註150参照)ので、質的には最大な創傷を与えたわけだ。
- 141) 日本語独特の「天王山」は、「京都府乙訓郡大山崎町にある山。海拔270^呎。淀川を挟んで男山に対し、京都盆地の西の出入口を扼する形勝の地で、付近一帯史跡に富む。1582年(天正10)羽柴秀吉と明智光秀とが山崎に戦った時、この山の占領を争い、秀吉の手に帰した。これが両軍の勝敗を決したから、勝敗の分れ目を“天王山”という。」(『広辞苑』)

中国で該当の表現が無い事の理由には、1ヵ所の1回の戦例が代表格に成り切れぬ国土の広大と戦争の多発が有る。山海関が「天下第一関」と呼ばれる事は、軍事的要地の関所の多数の存在を浮き彫りにする。遼西の戦略要地・錦州の南18[°]に在る松山で、曾て総兵・洪承疇の率いる明軍13万人が清軍に敗れ、「改朝换代」(註173参照)の転換点と成ったが、張万隆の『雪白血紅』の第10部(28~29章)・「塔山!塔山!」(香港版,天地圖書有限公司,2002年,405~438頁)の枕として引かれた此の一齣は、松山の知名度の低さが示す様に、夥しい抗争・滅亡劇の中の些細な断片に過ぎない。

強いて1つだけ特徴を挙げるなら、人口に膾炙する街亭が筆頭候補に成ろう。甘肅の庄浪辺りに在る此の処は228年の蜀・魏対決の後、余り激戦の場に成らなかったが、諸葛亮が涙を揮って馬謖を斬る故事で千古の教訓を遺した。錦州の西南30[°]に在る塔山は1948年に、一躍「中国軍事史上の名山」と成ったが、此の形容を用いた張万隆も塔山を街亭に見立て、「街亭雖小、干系重大」(街亭は小さい場所と雖も、極めて重要である)と言う彼の名軍師の念押しを引き合いに出した(407~408頁)。猶、『三国演義』の原文は「重大」ならぬ「甚重」)

記録文学・『雪白血紅』が刊行(1989年)後間もなく発禁処分を受けたのは、林彪の再評価に繋がる恐れが最大の要因だが、塔山の鍵と成る重要性を現地視察で一目で捉え、素早く兵力の重点投入を決断した林彪は、著者のみならず第三者や後世にも敬服されよう。其の眼を形容詞の「毒」(心憎いほど鋭い)と表わした(407頁)のは、塔山戦闘の惨憺・壮絶に対する感嘆・賛嘆(註145参照)や、鄧小平の「好・好狠」(註167参照)と通じて、「酷」の冷厳・精彩の両面を思わせる。

「天王山」が本稿筆者の地文化・歴史の時空両面の興味を引いた一因は、其の争奪戦の恰度500年前の1082年に、蘇軾が黃州の古跡を2度廻り前・後『赤壁賦』を作った事だ。『三国演義』の最大な戦場と擬似の所縁を持つ其の地(註189参照)で生まれた林彪の指揮に由り、塔山が20世

紀中国の内戦の天王山と成ったのは、「史縁」(歴史の因縁。筆者の造語)とも言うべきだ。因みに、『辞海』の「遼瀋戦役」の項でも特筆された塔山戦闘の開始日・10月10日は、奇しくも辛亥革命37周年で中華民国の国慶節に当る。此の日に猛攻を始めた国民党軍の挫折は、蒋介石政権の「気数尽」(命運尽き)の予兆に相応しい。

- 142) 既視感の強い台詞ではあるが、どの故事の真似なのかは断言できない。筆者が影響力の特に強い演義小説を調べた結果、「真似」の字面通りの酷似の表現は見当らなかつた。

真っ先に当たって見た『三国演義』には、「軍令状」(註148参照)を立てる話が幾つか有る。中でも特に人口に膾炙するのは、第95回・「馬謖拒諫失街亭 武侯弹琴退仲達」の次の遣り取りだ。「謖曰：“(略)若有差錯，乞斬全家。”孔明曰：“軍中無戲言。”謖曰：“願立軍令状。”孔明從之。謖遂写了軍令状呈上。」他にも「如不勝，請斬某頭」(第5回)、「今番追去，必獲大勝；如其不然，請斬吾首」(第18回)、「願依軍法」(第49回)、「如不勝，甘当軍令」(67回)、「但有粗虞，先納下這白頭」(第70回)等が目についたが、首を掲げて会いに行く云々の豪語は意外と無い。戦争中の毛沢東が究極の知恵袋として重宝した此の名作は、英雄主義と現実主義の両面を持ち合わせるが、其の論考は後に譲りたい。

首に賭ける誓言で他の作品の例には、『説岳全伝』第37回・「五通神頭靈航大海 宋康王被困牛頭山」の中の、牛阜の「小将若出不得番營，願納下這首級」(小將は若し[敵の]番兵の軍營から出られなかつたら、此の首級を納めても構いません)が有る。清初の銭彩等著の此の演義も若い頃の中共開国世代に影響を与えたが、牛阜は取り分け蛮勇が特徴を成す武将である。

- 143) 高新著、田口佐紀子訳『中国高級幹部人脈・経歴事典』、講談社、2001年、129頁。『雪白血紅』には然様な記述は無く、代りに林彪が部下に飛ばした檄が記された。「告訴你：塔山必須守住！拿不下錦州，軍委要我的腦袋；守不住塔山，我要你的腦袋！」(君に告げる：塔山は必ず守り抜かねば成らぬ！錦州を攻め落せねば、軍事委員会は私の首を取るが、塔山を守り抜かねば、私は君の首を取るぞ。)続いて作者・張万隆は曰く、「其实，果真要用脑袋担保的话，林彪的脑袋首先是用塔山来保的。」(実を言うと、若し本当に首を担保に入れたのなら、林彪の首は先ず塔山が担保と成ったのだ。)

本稿筆者が高新説に引掛かったのは、林彪の豪語を好まぬ慎重な^{イメージ}形象の故である。大量の電文を閲覽し林の格好いい「酷」を客観的に描いた張万隆も、此の件(407~408頁)で然様な話を披露していないので、伝聞や美談の独り歩き(註117参照)と受け止めたい。土台に有る典籍や故事の再生産力は後ほど、歴史の既視感と派生の擬似臨場感の文脈で改めて取り上げるが、張万隆の上記の論評で注目すべき処は、軍委から求められた首の担保でさえも言葉の綾に過ぎぬ事だ。更に翻って思えば、縦^た令^とい^く幻影にせよ頭上に制裁の剣が懸かった状況は、当時も自ら首を差し出さず朝鮮戦争でも尻込みした林の態度を説明できる。

- 144) 高新『中国高級幹部人脈・経歴事典』、129頁。張万隆の『雪白血紅』でも、葫蘆島で督戦中の蒋は10月13日、「限於明日黄昏前攻下塔山，否則以軍法從事」(明日黄昏までに必ず塔山を攻落すること。然もなければ軍法を以て処置する)との「死命令」(値切りや逆らえを許さぬ敵命)を下した、と記された(408頁)。因みに、其を受けて猛攻を挑んだ「趙子龍師」の「奮勇隊」の「敢死」(註26参照)ぶりは、東北内戦中の国民党軍には空前絶後の程だったと中共軍関係者が言う(408~409頁)。

- 145) 高新『中国高級幹部人脈・経歴事典』、129頁。

- 146) 東北野戦軍政治委員・羅榮桓は塔山阻止戦の前に、敵を「屍骨成山，血流成河」(屍骨が山と成

り、血が河と成る)ほど敲き潰せと檄を飛ばしたが、其の通りの展開に成り敵の死体が6千以上に上った(少華・遊胡『林彪の這一生』、湖北人民出版社、2003年、247～248頁。『雪白血紅』では「7千多具」[7千体余り]と言う[425頁])。但し、彼が覚悟を喚起した「悪戦」(同上)の勝利は、「惨勝」(註32参照)に他ならない。遼瀋戦役の残酷さを赤裸々に活写した張万隆の『雪白血紅』でも、中共軍の死者数は出て来ない。殆どの部隊は半数以上が戦死したと言う記述が有るものの、投入兵力数は不詳なので割り出せない。屍骨の形も残らず当事者が言う「餃子餡」(餃子の具)と化した例も有るので、著者の「戦争就是絞肉機」(戦争は肉挽き機也)の感嘆(427頁)には頷くしかない。国民党軍の爆撃で主陣地の標高が2^{ミル}も削られたと言われる(413頁に類似的記述が有る)から、粉骨碎身の「肉末」(挽き肉)が散る結末は不可避だった。

「酷」の「峻巖・精彩」や「苦闘・瀟洒」の両面を示す様に、中共軍は「兵不血刃」(註47参照)の戦例の反面、此の様な「血流成河」の犠牲が多数有った。系列論文で後述する林彪の建国後の厭戦情緒や、周恩来の「台湾を血の海にしたくない」発言は、此の一齣に原点の一端が窺われる。

- 147) 麻生幾は「首都封鎖 北京SARS医療チーム“生と死”の100日」(『現代』2003年9月号)の中で、北京東城区公安分局新橋派出所政治委員・李春生の活躍ぶりを記した。自らの献身ぶりで若い部下を奮い立たせた彼は、「私に中国の諺を口にした。/“手本の力は無限”、と言う件(49頁)が本稿筆者の心の琴線に触れた。46歳の「1級警特」・李より3歳年上の本稿筆者にも、深く脳裏に刻み込まれた格言であるが、古いイメージが強い「諺」と言えるのかは疑問なのだ。其の「榜樣的力量は無窮的」の初出は不詳だが、表現は現代文であり発想も毛沢東時代の色彩が濃い。

国際理解に於ける土地勘・言語感・歴史鑑の重要性を論じる他の論考で、本稿筆者は麻生幾の小説・『ZERO』(幻冬舎、2001年)の中国関連部分の瑕疵を反面教師として取り上げる予定だが、中国の生態を透徹に描いた上記の報道の其の件は、現地関係者の説明の大雑把さや「代溝」(世代の断層)に由る不明が起因だったかも知れぬ。

- 148) 日本語に無い「軍令状」は『辞海』の語釈の通り、将校や兵士が軍令を受けた後に差し出す保証文書で、任務を完遂できねば軍法の処分を甘受すると明記する物だ。同辞書で挙げた古例は、『三国演義』第49回の次の場面である。「雲長曰：“願依軍法。”孔明曰：“如此，立下文書。”雲長便与了軍令状。」

- 149) 中日両国は漢字を共有する「語縁」が有りながら、発想の相異に因り漢字表現の違いが多い。直訳の対応が付かぬ場合の多い軍隊組織の名称も、一例として挙げられる。最小単位の「班」は両国共通であり(旧日本軍の最小単位は「分隊」とも言われる)、作業班の長等の意で最近少数の日本語由来の英語外来語に成った「班長」は、毛沢東が党組織の指導者の見立てに使った(「党委会的工作方法」[1949年]の言、『毛主席語録』の「9 人民軍隊」に収録)ほど中国でも使用頻度が高い。ところが、「班」以上の「排」(小隊)、「連」(中隊)、「營」(大隊)、「團」(連[聯]隊)、「旅」(旅団)、「師」(師団)、「軍」(軍団)は、何れも完全な一致が無い。

名称は実体を表わすと好く言うが、同時に観念を映す符号でもある。日本流の軍隊組織名は「～隊」「～団」が基と成るが、中国流の「排」(註149参照)・「連」は「隊・団」と同じ連繫・団結の意が強く、其の上の「營・旅」は駐屯・行軍の含みが強い。物質は精神に転化し精神は物質に転化する、と毛は観念の生産性を説いた(註104参照)が、大戦中の敗北を招いた旧日本軍の兵站・供給軽視は、「營・旅」の名称の有無や濃淡の差に規定された様に思える。

猶、戦後と中共建国後には其の違いは一層拡大した。鄧小平時代の軍事改革で誕生(1985年に

改編完了)した「合成集團軍」(複数軍団から成る大軍団)は、字面でまだ日本人に理解し易いが、各省・自治区(地方自治体)の部隊を管轄する「軍区」や、複数の軍区から成る「大軍区」(広域部隊)は、日本語で伝える際に一々説明を付ける必要も有る。

更に突き詰めれば、両軍の現在の総称こそが最大の本質的差異を秘める物だ。「隊・団」の延長に在り内向性の濃い「自衛隊」に対して、「人民解放軍」は正に「営・旅」と対応する駐屯・出動の両面を持つ。最近の中国に出た「国軍化」の議論は、党の指揮を否定する嫌いで封殺されたが、「国防軍」の類ならぬ「解放軍」の名称の維持は、台湾の解放が実現しない限り変らぬであろう。

150)「榜様の力量は無限的」(手本の力は無限。註148参照)と言う様に、左様な殊勲に輝く部隊は中共軍に数多く有り、「我軍光栄伝統」(我が軍の栄光有る伝統)の典型として、精神教育の範例を為して来た。「塔山英雄団」が所属した第4(東北)野戦軍の第4縦隊も、「縦隊」(建国後の軍[註149参照]に相当する)編制の撤廃に因り、「4縦」の美称では語り継がれ難いが、1946年に遼東で「千里駒師」を殲滅させ、塔山で「趙子龍師」(註158参照)を痛撃した事で、敵の「王牌」(エース。切り札)を凌いだ最精鋭として名高い。此等の栄光史は系列論文で後述する様に、「部隊史」教育で当該部隊の自負を膨らませ、「軍史」教育で他部隊の功名心を刺激するが、適宜な競合にも過度な競争にも繋がる。

151)曹松『己亥歳詩』が出典の「一将功成万骨枯」は、『広辞苑』では次の様に解釈された。「一人の将軍が功名を立て得たのは、幾万の兵が屍を戦場にさらした結果である。功績が上層の幹部のみに帰せられ、その下で犠牲になって働いた多くの人々が顧みられないことを嘆く語。」『角川大宇源』も「功が将軍に帰ってしまうことを戒めて言う」と解いたが、中国的感覚では戦争の残酷さを形容する含みも同時に有る。塔山阻止戦で双方の死者は正に1万人に上った(註146参照)から、其の血の海から1人の大将(張万年)が出世した必然性が有る、と言うのが本稿の用法である。其にしても、『広辞苑』の講釈の後半は「平和国家・企業戦士」の感覚なのだ。

張万年が居た部隊は塔山で8~9割戦死した(高新『中国高級幹部人脈・経歴事典』,129頁)が、塔山戦闘の血に染まった風采は巡り巡って、彼と名前が1字違い戦闘の前年(1947年)に生まれた次世代の軍人作家によって芸術的に記述された。瀋陽軍区某集團軍幹事として故郷の遼東・本溪で『雪白血紅』を完成した張万隆は、「一将功成万骨枯」の原義を地で行く実話を随所披露した。既に英雄と成った者を大英雄に樹てる上級の意図で本来の英雄が頭角を顕わせず了いだった悲話は、当事者の名前を嚴重に伏せた(423頁)。其の秘話の扱い方と作者の不平は、当局の逆鱗に触れた(註141,158参照)事由の一端を窺わせる。

一方、司馬遼太郎の『殉死』は文春文庫の宣伝文で、「戦前は神様のような存在だった乃木将軍は、無能故に日露戦争で多くの部下を死なせたが、数々の栄職を以て晩年を飾らせた。明治天皇に殉死した乃木希典の人間性を解明した問題作」と要約された。何度も机上で追体験を試みた彼(註155参照)の胸にも、「一将功成万骨枯」の感慨が去来した事か。

152)張万年は高齢にも拘らず、1992年に濟南軍区司令から総参謀長に昇進し、2年後に中央軍委副主席に就任し、'97年に更に党中央政治局・書記処入りを果たし、中央軍委の第1(筆頭)副主席として日常業務主宰の権限が与えられた。

153)遅浩田は1987年に濟南軍区政治委員から総参謀長に昇進し、'93~2003年に国防相を務めた。高新の講釈に拠れば、天安門事件の武力鎮圧で招いた内外の非難が祟り鄧小平に冷遇されたのが、実権を握る中共軍委に比べて儀礼的性質の強い国防部への転出の要因だ(『中国高級幹部人脈・

『経歴事典』, 127頁)。

154) 連 (中隊) 指導員として兵士2名と共に、千人以上の国民党軍を降伏に追い込んだ (高新『中国高級幹部人脈・経歴事典』, 125頁)。

155) 「地文化学」は「地政学」の対概念 (拙論・「M (毛沢東) 感覚・C (中国) 感覚」と「J (日本) 感覚・I (国際) 感覚」の多変数: 地球化時代の東北亜細亜を読み解く新機軸の試掘 88の鍵言葉の横串を糸口に (序説) [『立命館言語文化研究』15巻3号, 2004年1月] 解題部分参照)。筆者は近年「統治・祭祀」を政治文化論の切り口にした (註124文献参照) が、政治・文化も此の両面と同じく「酷」の「冷厳・精彩」に対応する。「天文学」の対概念の「地文学」と「人類文化学」との接線に、「地政学」に因んだ「地文化学」を更に「人類地文学」と名付けたのは、筆者の独創の心算である。其の基軸の原理として念頭に置いたのは、中国の古賢が尊崇を唱えた天・地・人「三才」や、筆者が国際理解の要とする土地勘・言語感・歴史鑑「三要」(註147参照。「三要」は「三才」や「四要諦」[註3「理・礼・力・利」参照]を擬った命名) 等だ。

筆者は国際政治や現代中国史の論考に於いて、地政学的・地文化学的視点の結合を試みて来たが、20世紀日本最大の「大説家」(註127参照) を読み返すと、此の文脈で色々な共感と示唆を得た。「司馬遼太郎は方向オンチであった。そのくせ地図や地理を好んだ。偏愛した、といってもいい。地形は風土の母であり、風土はその風土なりの人間を生むと考えている風だった。」(関川夏央『司馬遼太郎の「かたち」』, 38頁) 彼は日本の風土の特質を「谷の国」(『この国のかたち』第19回の題) と概括したが、老子の「谷神は死せず、是を玄牝と謂ふ。玄牝の門、是を天地の根と謂ふ。綿綿として存するが如し。之を用ふれども動きず」を引き合いに出した処は、上山春平の観方 (『神々の体系 深層文化の試掘』, 中公新書, 1972年, 53~54頁) と一脈通じる。上山は自ら名付けた日本の「凹型文化」の画竜点睛に此の語録を用いたが、政治や地政学に対する文化や地文化学的役割も、山を納め且つ潤す谷や森羅万象の根源を成す「谷神」の如きだ。

歴史の街道を縦走した司馬の考察は正しく深層文化の試掘だが、1990年代以降の中国の「余秋雨現象」は、中国文学に対する日本文学の先行性と共に、日本文学に於ける彼の先駆性を示す。国内の奥地・辺地や海外の紛争地域に涉った余秋雨の「文化苦旅」(同上拙論参照) は、学者・作家の知性・感性で風土の気韻や歴史の基因を捉える眼光・表現は、司馬遼太郎に近い「大説家」(註127参照) の流儀・力量を感じさせる。2人は「不見年年遼海上, 文章何処哭秋風」を介して名前も繋がるが、接点と成る李賀の此の句 (註183参照) は司馬文学の土台を浮き彫りにする。

関川夏央は『司馬遼太郎の「かたち」』の中で、其の作家生涯の中の至高の喜びを記した。『殉死』(文藝春秋, 1967年) の創作の為に自分で何度も地図で旅順総攻撃の指揮を模擬し、乃木大将の作戦は根本から間違っていたとの結論に至った彼は、作者は職業軍人かと言った或る軍人の感想を聞いて手放して喜んだ。2度目に味わった異常な感激は、元東北軍首領・張学良が軟禁解除後の1990年にNHK特集で登場する事に成った際、戦後日本への初の直接発信の会見人に彼を指名した事だ。(74~76頁) 『殉国』の成功は土地勘と歴史鑑の結合の賜物と言えるが、2回とも遼寧・戦争に絡んだ事は、日本及び彼と中国東北との地縁・「史縁」(註141参照) を思わせる。

和辻哲郎の『風土 人間学的考察』(1935年) の題、及び生存空間と国民性とを関連付けた思索は、筆者の「人類地文学」の観念・原理の示唆と成った。司馬遼太郎は歴史の回廊のツボに身を置き其の気脈を汲み取ったが、由来・経緯を表わす中国流の「來龍去脈」は、龍の如く連なる山脈に見立てた成語である。日本人が言う「子規山脈」(室岡和子『子規山脈の人々』[華神社, 1985年], 坪内総典『子規山脈』[日本放送出版協会, 1997年], 日下徳一『子規山脈 師弟交友

録』[朝日新聞社, 2002年]等参照)は、彼の伴人の文学遺産と人脈の両義を持つが、歴史の去来を貫く深層の「龍脈」は、風水思想の通り「能量」(パワー)の磁場として、時勢・英雄の両方を造り上げる(註107参照)。現に、蘇軾の『赤壁賦』の母胎と創作現場だった黄冈(註189参照)に、中共の2人の国家主席(董必武・李先念)、2人の国防相(林彪・秦基偉)、更に聞一多(学者・詩人)、李四光(地質学者)等が生まれた。

国内地域の「域内総精彩」(註102参照)の「軟実力」の好例にも成る現象だが、墨と血、冷厳と精彩を以て20世紀中国史を彩らせた人物の輩出は、文化・歴史・人間の縁の派生原理や生産力を示す。聞一多は反独裁の言論で1946年7月15日に国民党特務の凶弾に倒れが、蔣経国、江沢民時代の国・共2党の政治「慈化」(註15参照)を論じる後出の系列論文では、聞一多暗殺は前近代的暴挙の典型として登場する。彼より10歳年上(1889年生まれ)の李四光は、中国の地質力学を創り共産党政権の地質部長(大臣)を務めたが、其の生誕百周年の際に建国後初の戒厳令を西藏で発動した胡锦涛は、他ならぬ地質畑の出身である。

司馬の磁場を隠し持つ「遼」は天・地・人3元に於いて、遼遠・遼寧・瀋陽(州)・『史記』文脈(「子規山脈」を擬った筆者の造語)が其々思い当たる。四平の陸軍戦車学校を経て牡丹江の戦車部隊に入った足跡(註116参照)は、中国東北の歴史街道の要穴を浮き彫りにする。東北の真ん中の吉林省の四平は戦術的天王山の塔山(註141参照)に対して、平津戦役と淮海戦役で主戦場に成った張家口と徐州(註140参照)と同じく、広域の戦略的「兵家必争之地」(兵家が必ず争う地)である。『雪白血紅』第4部第10章・「四平不平」(138～165頁)が描いた通り、林彪野戦軍が先ず苦杯を喫し次に捲土重来を遂げた血戦は此処で繰り返された。一方、「大説家」・魯迅を心の支えとした最期の毛沢東(註127参照)は、身辺世話の手足として生活・機密担当秘書・張玉鳳に頼ったが、彼女の生年(1944年)・生地(牡丹江)は奇しくも司馬の駐屯と吻合する。

張の父親は戦中に移住した日本人歯科医かと言う疑念を、李志綏は暴露本の中で明かした(新庄哲夫訳『毛沢東の私生活』下、文藝春秋, 1994年[原典英語版=同], 142頁)が、毛沢東の専属医だった彼の名も「綏」と関わる。志の対象と成る「綏」の語義は「安。安撫」で、「安東」の改名は正に朝鮮に対する「安撫」(慰撫する。安定させる)の尊大さを消す意味が有った(註134参照)。国民党は内戦時代に中共の「暴乱」を封じる目的で広域「綏靖区」を設けたが、『三国志・呉志・陸遜伝』が出典の「綏靖」も「安撫・平定」の意だ(『辞海』)。「綏」は国民党時代の綏遠省(1914年設立の特別区から'28年に昇格)の略称でもあり、呼和浩特等を含む同省は1954年に内蒙古自治区に編入したが、広域の東北(註7文献158～159頁、本稿筆者の訳注参照)の一部と視て能い。牡丹江の近くの綏芬河(河川名・地名)や楊利偉の生地・綏中県(註138参照)等、本稿の文脈に絡む東北の地名には此の「綏」が目立つ。事実は小説より奇なりと言うが、「大説」は事実に基づく故に小説より次元が高い。

- 156) 例に因って筆者の勝手な解釈である(註103参照)が、「酉+告」の字形から鶏が時を告げる形象を連想したのは、12支の「酉(鶏)」や中国の版図の鶏形(註14参照)、中国映画の最高栄誉・「金鶏賞」、鶏の「報曉」(曉を告げる)と関わる「醒」の字・意、等の刺激に因る。

『角川大辞源』の「酷」の解字は、「形声。意符の酉(さけ)と、音符の告(あつ意=厚)」とから成る。酒の味の濃い意。ひいて、「きびしい」「むごい」などの意に用いる」と言う。酒は「醒」と逆の「酔」をもたらすので、筆者の上記の想像は否定されるわけだが、「酷」の「冷厳・精彩」の両面は「烈酒」(強い酒)・美酒で対応できる。因みに、鶏と酒は「鶏尾酒」(カクテル)の字面・形象で繋がる。

- 157) 原文は「鮮血凝成的戦闘友誼」。朝鮮戦争終結直後の親中派要人に対する金日成の「血洗」(血の肅清。註67参照)を始め、両国の誼は早くも亀裂が入りやがて修復不能と成った。実情に即して其の「虚情」の成句を揶揄的に読み解くなら、色々な常識の落とし穴が目につく。2002年秋の中共大会の合言葉・「与時俱进」(時と共に進む)を擬(もじ)って、鮮血の「与時俱淡」(「淡」=「淡化」即ち稀薄化、註163参照)が先ず思い浮かぶ。「血濃於水」(血は水より濃い)と熟語は言う(日本にも有る此の格言は中国の典籍には出処が見当らず、英語の“Blood is thicker than water”の訳かも知れない)が、「君子之交淡如水」(君子の交わりは淡きこと水の如し)は、「小人之交甘如醴」(小人の交わりは甘いこと醴の如し)への否定と共に、血盟も含む過度に濃密な利害関係への警告に聞こえる(此の警句は『礼記・表記』では孔子の言として、「君子之接如水，小人之接如醴。君子淡以成，小人甘以壞。」と成っており、『莊子・山木』では隠者・子桑雎が孔子に語った言葉として、「君子之交淡若水，小人之交甘若醴。君子淡以親，小人甘以絶。」と言う)。紳士の淑やかな恬淡は闘士の戦闘的激情と対蹠に在るが、「友誼」に「戦闘的」の修飾語が付いた事は、平和時代の有名無実化の伏線とも取れる。最後に、「蜜月 冷却」と同工異曲の「凝結融解」は、中国の陰陽思想の変易理論にも合致する。
- 158) 「千里駒」(註139参照)の名を冠した国民党軍の精鋭部隊は、52軍(軍団長=杜聿明)第25師(師団長=李正誼)である。内戦開始早々の1946年10月の遼東戦場で、中共東北野戦軍第4縦隊に由って殲滅された。『雪白血紅』で此の滅亡劇を記した張正隆は、当該部隊の美名は抗日戦争中の古北口戦闘・台兒莊会戦・ビルマ遠征の功績が元だろうと推測し(225頁)、国民党軍の史料は関係部門がなかなか見せてくれない所為で、独立95師の「趙子龍師」の威名の由来と共に把握できない、と愚痴を零した(267頁)。
- 所謂「長他人志気、滅自己威風」(他者の志気を助長し、自らの威勢を殺ぐ。出典=『西遊記』第33回・「外道迷真性 元神助本心」)は、中国人社会の一種の禁忌なので、左様な情報封鎖は解らなくもない。因みに、本書の発禁処分の要因は林彪再評価の匂い(註141参照)の他に、国民党軍に関する記述も中共の正統と若干ずれた事も有ろう。更に言うなら、随所に出た「南満戦場」「北満」も建国後に忌避されて来た表記だ。
- 159) 「千里馬運動」は朝鮮労働党中央が1956年末に提唱し、'58年に本格化した労働経済兼思想教育の大衆運動だ。中ソの影響力から抜け出し自主工業を建設する意図が指摘された(韓国史事典編纂会/金容権編著『朝鮮韓国近現代史事典 1860~2001』、日本評論社、2002年、409~410頁)が、「千里馬の速度で進軍しよう」の掛け声で熱気を煽動する手法は、「一馬当先、万馬奔騰」(1匹の馬[模範]が先頭を走り、其に随って1万匹の馬[大衆]が奔騰する)の合言葉が踊り出た同時期の中国の「大躍進」と一緒だ。後に展開した「千里馬作業班運動」は、毛沢東時代の「工業戦線」の、軍事共産主義(戦時共産主義)的建設・統治に似通う(「班」の軍隊組織の意は註149参照)。
- 160) 俊才に譬える「千里馬」は中国で古くから広く使われ、「世有伯樂、然後有千里馬。千里馬常有、而伯樂不常有」と言う逆説が有名だ。『広辞苑』の「千里の馬」の語釈の「一日に千里を疾走する馬。才能の非常にすぐれた人にいう。千里の駒。」の次に、「“- はあれども一人の伯樂はなし”(有用な人材はいるが、それを使うことのできる為政者は少ない)」も付いているが、明記されていない出典の韓愈『雑説四』と照らせば、「常」の有無の違いが興味深い。猶、「伯樂」の初出は『莊子・馬蹄』『楚辞・懷沙』であるが、莊子や屈原の浪漫精神には騎馬民族的奔放不羈も窺える。

- 161) 「終焉」と「周縁」を結び付けたのも日本語の語呂合わせの派生(註44参照)だが、両国の「語縁」の不即不離の相関を示す様に、中国語では同音でもないし俱に現代では馴染みが薄い。但し、「文革」に因る国民経済の破局や核兵器恐喝に因る人類存亡の危機を形容する「崩壊(毀滅)的辺縁」(崩壊[破滅]の寸前)は、不思議に其の「終・縁」と字面に対応する。猶、今の中国人に「終焉」を見せれば、「身が落ち着く。隠居して晩年を送る。困窮すること。一生の終り。死」(『角川大辞源』)の多義を思い浮かべ、現代に生きるを認識できる者が少ない。「周縁」も短絡的に周囲との縁を連想させがちだが、古意と異なる此の語彙は巡り巡って、日本語と同じ「周辺国」で隣国を表わし、「中心国」意識を秘めつつ善隣関係を図る最近の中国の志向に符合する。
- 162) 1644年の清世祖に由る北京占領、明朝滅亡から、1911年の辛亥革命までの清朝の歴史は267年に及んだ。中華民国の大陸時代の38年の7倍より僅か1年多かったが、7は佛教でも基督教でも神秘的な数字であるだけに、本稿で指摘した38年周期と共に歴史の循環を導く天意が感じ取れる。
- 163) 対立の人為的激化を好む毛沢東の傾向に対して、江沢民時代以降は「淡化」の空気が強いが、民族の分裂を避け国家の統一を図る為に怨念を棚上げにして置く姿勢は、抗日戦争や毛沢東時代の中共の対国民政策にも見られた。
- 164) 拙論「中国、中華民族、中国人の国家観念・民族意識・“国民自覚”」参照(中谷猛・川上勉・高橋秀寿編『ナショナル・アイデンティティ論の現在 現代世界を読み解くために』、晃洋書房、2003年、127、140頁)。
- 165) 朱鎔基は朱元璋の直系の子孫であると言う記述は、高新『中国高級幹部人脈・経歴事典』(47頁)を始め多数有る。本人は嫉妬を招き易い自己顕示を忌み、体制も封建王朝の名残りを嫌うので、仮令い事実であっても公に宣揚される事は無かる。二月河の長篇歴史小説『康熙大帝』『雍正皇帝』『乾隆皇帝』が1990年代前半に話題を呼び、江沢民や朱鎔基、李鵬等が揃って興味と肯定を示したと言う伝聞も、帝王学が堂々と登場し難い故に確証は得難いが、「盛清」(註171参照)並みの安定・繁栄・強大を目指す彼等の志向を思えば有り得る。
- 166) 師哲・李海文著、劉俊南・横澤泰夫訳『毛沢東側近回想録』、新潮社、1995年(原典=『在歴史巨人身辺 師哲回想録』、中央文献出版社、1991年)、269~270頁。
毛沢東は詞・『念奴嬌・崑崙』(1935年)で中華民族の聖山を礼讃し、同時に其の洪水を起し易い嫌いにも触れ、自註で「好看不好吃」(見た目は好くても美味しくない)の評を下した(註101文献、63頁)。「好看又好吃」の理想に照らせば、西域や伝統に対する彼の価値判断の葛藤が窺える。
- 167) 筆者は他の論考で此的一幕を講釈した事が有るが、本稿で思索を深めた発見として次の諸点がある。
中国流の最も日常的挨拶の「你好」(今日は)は、「お達者で。ご機嫌よう」の祈願と共に、字面通り「貴方は好い」の肯定も含めている様に思える。
『紅樓夢』の林黛玉は死ぬ前に、相思相愛を寄せ合いながら結婚できなかった賈宝玉の名を呼んで、「你好……」と言って息を引き取った。声に成らなかった言葉として「狠」が続く、「何という酷いお方だ」「好くも私を棄てた」の詰りが想像されるが、此を揶揄に用いた民衆の鄧小平に対する感情は、「愛憎相織的情結」(愛憎が織り合うコンプレックス)と言える。中国語の「好」は副詞として善悪を問わぬ「大変」の意も有るが、「詰」の「言+吉」の字形と「なじり」の意とも通じる此の両義は、古典の悲話を現実の諷刺に巧みに生かした考案者の智慧と

共に、「酷」の冷厳・精彩の両面に合う。

鄧小平逝去に関する体制側の報道（本稿後出）では、市民の「再說一声“你好”」（もう一度「今日は」を言わせてもらおう）の聲が大写しにされた。無名の人の礼讃に喜ぶ司馬遼太郎の最大な感激（註155参照）にも通じるが、此の事は建国35周年祝典で受けた祝福の価値（註168参照）を思わせる。逆に、天安門事件で招いた怨嗟が其だけ彼を傷付けた事も、確証が無いながら想像し得る。其の鬱憤は彼の名誉回復の意欲を刺激し、1992年南巡の私的原動力に成ったとも考えられる。

168) 建国35周年祝典・大閱兵の有った1984年を彼の絶頂期と捉えるのは、中国人民大学国際政治学部教授・楊炳章（ベンジャミン・ヤン）の『鄧小平 政治的伝記』も一緒だ（加藤千洋・優子訳、朝日新聞社、1999年〔原典英語版＝'98年〕、262頁）。

169) 鄧小平が中ソ対立で特に声価を上げたのは、ソ連と如何なる共同行動も取らぬ様な強硬論の主張よりも、1963年に中共代表団団長として訪ソ中スースロフと論戦を交わした事だ。ソ共屈指の理論家の思弁・言説にも負けぬ結果は、文武「全才」（全面的才能）の証明と成った。相手が翌年のフルシチョフ解任のの仕掛け人に成った事（註70参照）は、鄧の「勲章」の重みを一層増した。

170) 1969年3月2～17日に中ソ国境で局地的武力衝突が起き、『人民日報』『解放軍報』は「打倒新沙皇」と題する社説（4日）でソ連「社会帝国主義」を糾弾した。其の時代でもスターリン批判は中国では禁忌でいたが、ソ連は其の30年前のフィンランド侵攻から既に「新ツァーリ」の様相を呈し始めた。ソ連は独逸の波蘭侵攻の翌月（'39年10月）に、レニングラード防衛を理由にフィンランドに領土交換等を求め、拒否に遭った後2度（同年と1941年の独逸侵ソ連後）侵攻した。12%の領土の割譲や賠償、海軍基地の提供を強いられたフィンランドの犠牲を思えば、同じ北欧発のノーベル賞の共産圏敵視（註39）は頷ける。第2次世界大戦後の米ソの世界「瓜分」（瓜を割る様に領土を容易に分割すること。出典＝『漢書・賈誼伝』の「高皇帝瓜分天下」）も、後に2超大国と成った「覇道の枢軸」（本稿筆者の造語）の暴挙だ。

因みに、同時代の中国は越南や朝鮮との善隣関係を配慮して、「鎮南関」を「睦南関」「友誼関」、「安東」を「丹東」に改名した（註134参照）が、1860年に建設し11年後シベリア艦隊の基地と成り、ソ連の太平洋艦隊司令部の所在地として冷戦時代に閉鎖都市だったウラジオストークは、「東方を征服せよ」と言う露西亜語に由来した地名を変えていない。猶、シベリア鉄道の終点でシベリアの門戸に当る此の地は、日本語で「浦塩斯徳」の当て字も有るが、中国では「符ラディウスケーハイシユンウェイ」ラディウスケー ハイシユンウェイ（海參崴）という新・旧訳名の併記が普通だ。

171) 唐の「初唐・盛唐・中唐・晩唐」の4期区分は、国民総生産と「国民総精彩」（註102参照）の両面から観ても、栄枯盛衰の推移を反映している。「晩」自体は価値判断が伴わないが、李商隱の『登楽遊原』の「夕陽無限好，只是近黄昏」（夕陽限り無く好し，只是れ黄昏近し）の様に、衰微の前兆とも見て取れる。

其以外の王朝に「盛期」の命名が余り見当たらないのは、「硬實力・軟實力」が俱に強大な時期が滅多に無かった事も一因だろうが、筆者は唐並みの版図拡張を遂げた清の最盛期を「盛清」と名付けたい。世祖（順治）に因る北京占領～康熙時代前期の約半世紀の「初清」に次いで、康熙後期及び雍正・乾隆時代の約百年が其に当り、嘉靖・道光2帝の約半世紀の「中清」を経て、第1次鴉片戦争後で太平天国が蜂起した咸豐元年（1851年）に60年の「衰清」に突入した、と筆者は観ている。「前清・清朝中葉・晩清」の分け方が一般的であるが、鴉片戦争以降の末期症状

の衰弱こそが近代史開幕の必然性なので、歴史認識を示す意図で表記の明確化が宜しかろう。因みに、唐には左様な名称は似合わないが、唐の強盛の反転を暗示する動乱の陰影は、「荒唐」や「頹唐」(頹廢・衰退)の字面に内蔵されている。

共産党中国の場合は未だ歴史が浅い故に栄枯盛衰の区分は出来ないが、鄧小平時代の「社会主義の初期段階」の現状規定と、江沢民時代の康熙・雍正・乾隆熱(註165参照)とを併せ考えれば、香港と澳門の返還を挟んだ建国50周年辺りが強盛期入りの節目と観て能い。毛・鄧・江の雌伏 胡錦濤の至福(註54参照)を裏付ける様に、「盛」の「成+皿」の字形には前人が播いた種の収穫の寓意も読み取れる。因みに、中国語の「盛」は動詞として「成」と同じchengと読み、形容詞として「勝」と同音のshèngだが、日本語の「切り盛りする」と「盛り上がる」で両者の接点が説明できる。共通項の「飽満」は中国で豊饒の理想の形容に成るが、「成 皿」の「盛」を見せた清の統治民族は他ならぬ「満」だ。

- 172) 北戴河は清末から建国までの間に、外国人や国内の富裕層の保養地でもあった。鄧小平は対外開放や「先富」(一部の人が先に富裕に成る)を唱えたが、毛沢東時代から中共指導者が北戴河を愛用した事は、其の伏線の様にも思われる。因みに、北戴河の対外開放の始まりは維新变法が勃興・頓挫した1898年だ(註71参照)。
- 173) 王朝・政権の交替を指す「改朝換代」は、政権が変わっても封建的体制は変らぬと言う含みも有るので、旧時代・「旧社会」との断絶を自認する中共政権は、「新中国」の建立の形容に使うのを忌み嫌う。其の点「天朝」意識が濃厚だった太平天国とは違うが、毛沢東時代も結局「封建的社会主义」(林彪一味の政変構想[本論で後述]の言)の性質を帯びたし、「一朝天子一朝臣」(一朝の天子、一朝の臣。天子が換れば臣下も皆換る。指導者が交替すれば下の者も交替する。出典=『元曲外・追韓信』)の旧習は、中央に限らず社会で根強く遺っているのが実情だ。
- 174) 「祖龍」は秦始皇の異名で、『史記・秦始皇本紀』に出た始皇帝36年(前211年)の「今年祖龍死」の予言が有名だ。
- 175) 江沢民の題辞癖は内外から冷やかされたが、昔の権力者や文人も視察・旅行先で好く詩文を遺した。「革命大串聯」(革命的経験の大交流)の大義名分で公費観光を楽しんだ紅衛兵や、最近の観光熱で国内外を歩き回る人々にも、孫悟空の「齊天大聖到此一遊」(齊天大聖此处に一遊せり)の落書きの真似で、「^{アム}到此一遊」と名前を名勝旧跡に刻む輩が居る。足跡を記す其の手跡は「心跡」(心の動き。精神の軌跡)の発露と観れば、中国人に特に強い「留名」(名を留める)願望の表現として頷ける。
- 猶、「跡」の「足+赤」の字形は「足赤」と重なるが、此の単語は「足金」(足=充分)の類義語であり、「金無足赤、人無完人」(金には純金が無く、人には完全な人が無い)の熟語で有名だ。
- 176) 日本語訳 = 竹内実。『毛沢東 その詩と人生』, 285 ~ 286頁。
- 177) 曹操に対する賞讃は「奸臣」の固定形象と掛け離れた故に護衛を驚かせたが、彼は向きに成って弁護し、秦始皇に就いても同様の態度を示した(権延赤『走下神壇の毛沢東』, 中外文聯出版社, 1989年, 218 ~ 219頁)。
- 178) 曹操は生前「魏王」に^{とど}止まったが、長男・曹丕は帝を称えた後「魏武帝」と追認した。
- 179) 『三国演義』第1回・「宴桃園豪傑三結義 斬黄巾英雄首立功」の話:「汝南許劭, 有知人之名。操往見之, 問: “我何如人?” 劭不答。又問, 劭曰: “子治世之能臣, 乱世之奸雄也。” 操聞言大喜。」

人物評の的確さと共に感心したのは、正負の順で両面に言及した練達さだ。平面的“ Yes, but … ”風の肯定否定と違って、正反合の弁証法(註13参照)も読み取れる。「能臣・奸雄」の複合が「奸臣」を内包した処が、曹操の大衆的^{イメージ}形象(註177参照)に合う此の名言の隠し味だ。

- 180) 駒田信二「対の思想 あるいは影の部分について」(『対の思想 中国文学と日本文学』, 勁草書房, 1969年, 2~20頁)参照。
- 181) 日本語訳 = 竹内実。『毛沢東 その詩と人生』, 287頁。
- 182) 劉希夷の妻の父・宋之間は、彼の『代悲白頭翁』の中の「年年歳歳花相似, 歳歳年年人不同」を激賞し、自分の句として譲れとせがんだ。一旦承諾した劉は直ぐ惜しく成り約束を反故にしたが、宋は激怒の余り奴僕に彼を撲殺させた。
- 183) 李賀『南園十三首・其六』の全文は、「尋章摘句老雕虫, 曉月当簾掛玉弓。不見年々遼海上, 文章何處哭秋風。」『其五』の「男兒何不帶吳鉤, 收取關山五十州。請君暫上凌煙閣, 若個書生萬戶侯。」と共に、失地回復の情念・意欲を好く表現した名作で、本稿筆者も含めて愛読者が多い。『其四』の「三十未有二十余, 白日長肌小甲疏。橋頭長老相哀念, 因遭戎韜一卷書。」は、知名度が低いながら毛沢東の李商隱好きを解く糸口になる。名軍師・張良が「天書」を授けられ兵法を習得した故事は、「超限戦」(註127参照)や中国軍事思想の論考にも示唆的だ。
- 猶、本稿引用部分の日本語訳は、鈴木虎雄訳註『李長吉歌詩集』が出所(岩波文庫, 1961年, 上, 145頁)。
- 184) 日本語訳 = 目加田誠(蘅塘退士編, 目加田誠訳註『唐詩三百首 3』[平凡社, 1975年], 36~37頁)。金昌緒『春怨』の全文は、「打起黃鶯兒, 莫教枝上啼。啼時驚妾夢, 不得到遼西。」
- 185) 戦乱の中の民衆の受難を描く杜甫の『新婚別』『垂老別』『無家別』は、同じ反戦情緒を訴える『新安吏』『潼關吏』『石壕吏』と共に、「三吏三別」の総称で名高い。
- 186) 「文革」開始の前年に姪・王海容との談話で、毛沢東は杜甫の『北征』を薦めた。其の独特な選好を反映して、彼が推奨した唐詩集は『唐詩別裁』である。
- 187) 日本語訳 = 竹内実・吉田富夫『志のうた 中華愛誦詩選』, 中公新書, 1991年, 35頁。
- 188) 『三国演義』第48回・「宴長江曹操賦詩 鎖戰船北軍用武」。
- 189) 曹操が敗れた赤壁は今の湖北武昌県の西、嘉魚の東北だが、古代の人は黄州(今の黄冈)の赤鼻磯を赤壁古戦場と誤認したのかも知れない(『辞海』の「赤壁」の語釈)。猶、其の武昌県も辛亥革命勃発の地・武昌市とは同一ではない(後述)。

“9 .11 ” 恐怖襲擊的種種既視感 (1)

駭人聽聞、瘳人深省的“9 .11 ” 恐怖襲擊，在破天荒的外觀下有似曾相識的印象，以反常規的方式展示了常識盲点中的常理。本文將該事件作為21世紀史的基調性起点，試圖從歷史經驗及現实跡象中發掘背景和本質，提出“冷戰後”之後的“後冷戰”時代的前景予測。

美中的競爭与共存似將成為新世紀歷史的主軸之一，為此有必要澄清“中国脅威論”、“中国崩潰論”的幻影。“9 .11 ” 証實了喬良、王湘穗著《超限戰——兩個空軍大校对全球化時代戰爭与戰法的想定》（1999年）的予見，筆者將在系列論文中從這部啓示錄里尋求中国的新思考和老傳統。

筆者既保持客觀的立場又立足於母国的精神風土，以中国的文史哲為利器把握对象的深層。作為筆者提倡的“國際地政学 + 人類地文化学”結合的方法論的实践，本文的新意之一是以中国化的“国民總產值 + 国民總產智”概念，及具冷嚴和瀟洒、堅实和精彩兩面的“酷”為複合視角。

本部分針對美国以驅逐“無賴国家”、“邪惡軸心”為自任的“世界憲兵”的拳止，指出其“力 + 欲的軸心”的独善、霸道，及“極超大国”的脆弱的一面。進而聯系最近的中国首次載人航天飛行和日俄戰爭百年来的東北亜的變遷，通過对遼西走廊的典型透視探索歷史走向。

(XIA, Gang 本学部教授)